死の外科医の能力を持つオリ主はまちカドを謳歌する

生徒会長月光

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主がワンピースのトラファルガー・ローの能力を得てせいいき桜ヶ丘にて過ごすお話し。

オリ主がシャミ子のかかりつけ医となり彼女の巻き起こす騒動に次第に巻き込まれ何だかんだで解決していくことになります。

Ｐｉｘｉｖにもマルチ投稿してます。

何でも許せる方のみお読みください。

目　次

死の外科医の能力持ちの一日 ―― 1
優子覚醒、封印を解くために探すぞ魔法少女…ローさんの正体!? 6
覚醒後の初登校！桃色魔法少女との再会 ―― 13
シャミ子は魔法少女に鍛えられ　死の外科医は覇気を説明する 19
お小遣いアップで友情もアップ！ ―― 30
二度目の邂逅と娘を思う母の独白 ―― 38
魔力特訓と小さな小人 ―― 43
ごせんぞの逆襲…？温泉帰りの胸中 ―― 51
シャミ子初めてのアルバイト！タコさんウインナーを売りまくれ！ ―― 57
シャミ子の妹へのプレゼント大作戦！ ―― 63
死の外科医は桃色魔法少女の家へと招かれる ―― 70
シャミ子のパソコン運びミッション！　叫べ！ききかんりー！ 77
桃色ドリーム　シャミ子夢へ潜る ―― 83
時は来た！シャミ子魔法少女の自宅へ ―― 89
決意を新たに立派なまぞくを目指せ！ ―― 97
貧乏とおさらば!?祝い事は家族皆で!! ―― 104
特訓開始！トラ男は杏里へテニヌを教える。 ―― 114
シャミ子の1日たまさくらちゃん体験！ ―― 121
柑橘系魔法少女との遭遇、お面は御免だ!? ―― 126
ハッピーバースデーシャミ子！シャミ子の生まれた日 ―― 133

ハロウィンパーティ開催!!悪い子はいねが？ ―――― 142
番外編　昔々のハロウィンでのこと ―――― 156

死の外科医の能力持ちの一日

ここは多魔市せいいき桜ヶ丘
古来より会い争う光の一族と闇の一族とが共存する極めて珍しい町。
せいいき桜ヶ丘の外は闇の一族を光の一族が刈る混沌とした場所になっているが、中立地帯のこの場所ではのほほんとしている。
そして辺り一面を見れる枯れた桜の木の下で昼寝をしている男がいる。
「ふぁぁぁぁ……この世界に転生して二十数年…相変わらずここは賑やかだな。」
男はこのまちカドまぞくの世界へ転生してきた者。彼自身前世の自分の名前は転生した時に忘れてしまったので、神様からもらった能力の持ち主の名であるトラファルガー・ローを名乗っていた。
がこの町に住む者達からはトラ男と呼ばれている。
彼自身はまぞくではないものの悪魔の実の能力者だからか、それとも異能持ちだからか、闇の一族認定を受けていた。
なので暗黒役所に活動名を書類で提出しようとした時にそのままの名前で出そうとしたのだが、ある人物に死の外科医トラ男と出されてしまったため、以後死の外科医やらトラ男やらと呼ばれるようになってしまった。
そんな彼は臨時の医師としてせいいき記念病院に、いつもは桜ヶ丘高校の保険医を勤めている。
本来ならこの町の守護をしている魔法少女がいたのだが約１０年前より失踪しているためトラ男は一人パトロールし、町に異常がないか観察している。
今は休憩時のために昼寝をしていたようであった。
「さて今日も異常はなさそうだな。」
と常日頃から発動させている見聞色の覇気で異常がないか回り終え帰宅する。
道中商店街に寄り安くなっていたぶりや鮭を購入しついでとばか

りにカレーの食材も購入する。
そして彼は１０年以上住んでいるばんだ荘に戻り早速夕食の準備をする。
「ＲＯＯＭ。」
とオペオペの実の能力を台所で発動させると瞬時にぶりを捌き、
「メス！」
次々と食材を捌いていく。
大根とぶりを各々煮ていき自身の分を作っていく。
鍋にカレーの具材を煮ていきカレー粉とすりつぶしたリンゴを入れる
炊飯器は多めに６合程炊き終えたのを確認してタッパーに詰める。
そして自身の食事を冷蔵庫へとしまうと２つ隣の部屋を目指す。
コンコン
「は～い！あっ！トラ兄！」
「良子か。清子のやつはいるか？」
「うん！え～とね今もやし炒めともやしもんじゃ作ろうとしてるよ。」
「相変わらずのメニューだな。上がるぞ。」
とトラ男は家にあがる。
「あら、ロー君どうしたの？優子の検診はまだだったと思いますが？」
「カレーを作りすぎてな腐らせるのも食材に悪いから食ってくれ。」
「まぁ！ロー君のカレーは優子も好物なのです！今日はカレーパーティー…はっ！そういえば今月はお米が…」
「米も炊きすぎてなタッパーに詰めて持ってきた。」
とタッパーに詰めたご飯を取り出し段ボールの上に置く
「いつもありがとうね。」
「俺が炊きすぎただけだ。その余りを持ってきただけのことだから心配するな。」
と良子が居間で勉強している隙にＲＯＯＭで自身の部屋のカレーの鍋と自身の部屋から持ってきた空の鍋を
「シャンブルズ」
で入れ換え台所へと置く。

「いつも思いますがとても便利ですね。食材を切り分けてフグも調理できたり入れ換えられたり流石死の外科医のトラ男さん」
「能力の使い道なんていくらでもある。生かすも殺すもそいつ次第。…活動名はあんまり言わないでくれ。」
「ええカッコいいじゃないですか」
「死の外科医はまだ分かるがトラ男のところだ！」
「自分の名前そのまま使うよりは良いではないですか」
「活動名考えたあんたが言うか…」
　と呆れ半分で清子に言うトラ男。
　そして
「おかーさんただいまです！ローさん!?あわあわちゅっ注射はこの前打ったばかりですよ!?」
「お帰りなさい優子。ローさんはカレーをお裾分けしに来てくれたのですよ。」
「相変わらず小さいな。もっと飯を食え。じゃないと大きくなれないぞ」
「にゃにぃおー！まだまだ伸び盛りです！」
「中1からこの前測った時までの身長を知ってるから誤魔化しは効かないぞ。」
「ムッキー!!いつか大きくなってぎゃふんと言わせるです！」
「それよりカレーだ。居間の片付けしとけ。あと冷えたラッシーも冷蔵庫あるから持ってけ。」
「カレー!!甘口ですか！」
「甘口に作ってある。」
「わーい！片付けします！」
　と優子もはしゃぎながら居間へ向かう。
「ローさんいつもありがとうございます。」
「気にすんな。あいつとの約束でもある。三人で食いな。」
　と三人分をよそい居間の段ボールに置いていく。
「トラ兄ありがとう！」
「久し振りのご飯物です。お腹も空いてましたから一杯食べるので

す。」
「じゃあ俺は帰る。ゆっくり食べな。」
「トラ兄も一緒に食べよう！」
「いや俺は…」
「そうですよローさん。折角作ったのですから、それに一人で食べるより皆で食べた方が美味しいですよ？」
　と清子はローの分までよそっていた。
「そうですよローさん！それともカレーが苦手なんですか？」
「…はぁ…仕方ない。ぶり大根は明日だな。」
　とローも席につく。
「それではいただきます。」
「いただきます!!」
「美味しい…トラ兄のカレー味もさっぱりしてて好き！」
「はわわわ…高そうなお肉が沢山入ってます…！だ、大事に食べないと」
「グラム１９８のやつでセールで半額なってた奴だ、大事に大量に食っとけ。」
「お野菜も柔らかいわね。」
　そして食べ終わり余った残りの分は冷蔵庫へとしまい明日の朝食となる。
　鍋も一通り洗い終わったので帰るロー。
「じゃあな。早めにカレーは食うんだぞ。」
「ローさん鍋持ちますね！ふぬぬぬ、ちょっ、ちょっと重い…」
「無理すんな。」
「いえこれぐらい！」
　とローの部屋へと鍋を持っていく優子。
　そして部屋に着くと鍋を置く。
「優子学校は慣れたか？」
「はい！その友達も出来て楽しいですよ！」
「そうか…何かあれば言え。かかりつけ医兼保険医として相談に乗ってやる。」

「ありがとうございます！」
「それと鮭持ってけ。多めに買いすぎてな。」
「おぉ！脂が乗ってるやつです！」
「ローさんありがとうございました！」
と部屋を後にする優子。
「……さて寝るか。」
と布団を敷き簡単にシャワーを浴び寝に入るロー。
彼の一日はこうして終わる。
平穏を送るローであるが後にこの数日後にまぞくに覚醒した優子のドタバタに巻き込まれることになるとは夢にも思わなかった。

優子覚醒、封印を解くために探すぞ魔法少女…ローさんの正体!?

おはようございます！
私は吉田優子！
何処にでもいる１５歳の少女！
私の家はおかーさんと妹の良子、おとーさんは昔に原子力潜水空母でイカ釣りをしていて今は宇宙船に乗って空気清浄機の買い付けに行っているそうです！
そういえばおかーさんが言ってるときにローさんが頭を抱えてましたがどうしてでしょうか？
あっ！ローさんはご近所に住むとても優しいお医者さんです！私は昔から身体が弱く走るのもダメでローさんは私に色んな治療をしてくれてご飯も時々持ってきてくれておかーさんも良も喜んでます！
でも注射は痛いので嫌いです。
そんな私ですが朝起きて鏡を見ると何と！
角と尻尾が生えていたのです！
「おおおおお、おかーさん！大変です！なんか朝起きたら頭が重くて！尻尾が頭に角が!?」
「落ち着くのです優子」
グワンと頭の角を引っ張られました…
うぅ気持ち悪いです…
でもお陰で落ち着けました。
そしておかーさんに聞くところによるとどうやら私は闇の一族という古き時代の一族の末裔なんだそうです。
そして光の一族という魔法少女から生き血をごせんぞの像に捧げると私たち一家の呪いやらなんやらと家族四人１ヶ月四万円生活からおさらば出来るようです！
あっ！でも呪いが解けたらローさんが来てくれなくなっちゃうか

も…？
と、取り敢えず解いてから考えます！
そして私はおかーさんに見送られ魔法少女探しを始めました！
そう簡単に見付かれば苦労はないと思います！
活動名がシャドウミストレス優子と決まりおかーさんを止める間もなく送られてしまいました…
き、気を取り直して！
まずは町を散策です！
武器っぽいのはなかったのでフォークを持ち出発！
それにしても…朝のあの夢は何だったのでしょうか？
そうしてシャドウミストレス優子…長いのでシャミ子は歩く。
のだが
「はわぁ!?」
と植木鉢につまづき、電柱にぶつかり犬に吠えられびっくりし水溜まりに突っ込み、邪神像を階段に落っことしてしまう。
必死に追い掛けて漸くキャッチ出来ました！
でも私もボロボロ…
プップぅぅぅぅぅぅぅぅ
「ひゃわぁぁぁぁぁぁぁ!?」
あっ私…死ぬんだ……
ローさんの夕飯のまた食べたかったな…
「ＲＯＯＭ！　シャンブルズ!!」
シュイン
プシュュュュュュュゥ
その日私は魔法少女とローさんの正体を知りました。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ローサイド
今日は非番だからコーヒー豆を買いに商店街を回った。
途中肉を買いにマルマ精肉店により優子のやつと同じクラスの佐田屋にこれでもかと買わされてしまった。
こりゃあ清子の所に分けねぇとな。

そうして歩いていると優子のやつが何かボロボロになってドアストッパーやら漬物石に使ってた像を持っていた。
全くあいつは相変わらず運が悪いな。
と呆れていると道路でしゃがんでしまっている性ですぐ横に迫るダンプカーに気付いていない！
（不味い！あいつの身体能力じゃ避けられん！仕方ない！）
と極力能力を見られないようにしていたトラ男は己のオペオペの能力を使う
「ＲＯＯＭ！シャンブルズ！」
と自身とシャミ子の位置を入れ換える。
そのまま武装色を纏いダンプカーを受け止めようとして
桃色の旋風が巻き起こる。
そして一瞬受け止めた衝撃が巻き起こるがダンプカーは傷もなく止まっていた。
（こいつ魔法少女か！ダンプカーを止める際に衝撃を緩和させるだけじゃなく相手にも怪我をさせないようにするとは…中々強いか…）
と分析をしていると
「大丈夫ですかお兄さん？」
「あ…あぁ」
「ダンプの人も大丈夫？」
「大丈夫。き、君の方こそ怪我は？」
「問題ないです。」
とダンプはそのまま行った。
「さて私は女の子を守ろうとして間に入ったけど何故お兄さんになってるのかな？」
「……」
と二人睨み合っていると
「お、おにいいいちゃゃゃゃんうううう」
「！優子怪我な…あとで治療だな。ひとまずは無事か？」
「こ、怖かったですうううううう」
と何故かフォークを持っている優子が抱きつきに来るのを受け止

める。
「？兄妹だったんですね。妹ちゃん今度から前見て歩かないと駄目だよ。」
「は、はいいいぃ」
「？きみその角…もしかしてまぞく？」
「はっ!?こ、これはその…!?」
　と優子の頭を見ると角と尻尾が……元々血が濃いのは分かっていたが覚醒するとは思わなかったぞ…
「も、もしやコスプレですか？」
「…？違う。魔法少女」
　と優子のやつが凄い顔をしているがそれはさておきこいつが穏健派なら良いが万が一なら…
　といつの間にか背に担いでいた彼の愛用の妖刀、鬼哭を手に持ち警戒する。
「…貴方は私たち魔法少女から特級まぞく認定されてる死の外科医？」
「うぇっ!?おにぃちゃん、まぞくだったのですか!?」
「……」
　バチバチと火花を散らす二人にあわあわするシャミ子。
　唐突に桃色魔法少女はレジ袋から菓子パンを取り出すと
「はい上げる。」
「ふぇ？」
「おなかすいてるんでしょ？それに食べないと大きくなれない。」
　とフォークを持つシャミ子を、見て言う。
（ほ、施された！）
「むきー！小さいって言うな！私はこれでも高1です！それにここであったが百年目！魔法少女を倒して一族の復興をするのです！」
　グゥゥゥゥゥ
　……
「やっぱりお腹すいてるんだね。」
「!?こ、これで勝ったと思うなよーーーー!!でも助けようとしてくれ

てありがとうございます！」
と物凄く遅い走りでその場を後にするシャミ子
「はぁなんか馬鹿らしくなっちまった。」
と刀を納める。
「桃色屋、あいつを助けようとしてくれたこと礼を言う。」
「？困っている人を助けるのは当然。」
「それでもだ。どうやら穏健派のようだから何か怪我したら一度だけタダで治してやる。名刺に電話番号も書いてある。」
と名刺を渡すロー
「これはどうも…？」
「じゃあな。」
とローも後を去る。
「……死の外科医。思ったより悪い人じゃないかも。…姉の言った通りだ」

ーーーーーーーーーーーーーー

その夜
「優子お前はとにかく運が悪いというよりもまずは周りを見ることを覚えろ。今回は偶々俺や桃色屋がいたから良いが毎回側にいてやれる訳じゃないんだぞ。」
「で、でもローさん！私もまぞくに覚醒したんです！秘められた力でこう敵をスパーンって」
「身体能力マイナスのお前が覚醒したからってほんのちょっとプラスになったぐらいだ！」
「そ、そんなことないです！」
「じゃああの時おにいちゃんって言ったのはなんだ！」
「あらあら優子ったら甘えたい時や動揺した時は前の呼び方のままなのね。」
「お、おかーさん！」
「トラ兄、お姉大丈夫？」
「あぁ。頭が弱い以外正常だ。」

「にゃにぃおー！」
「全く。今日は肉が余りすぎて牛丼をお裾分けしようと思ったんだが優子の分は…」
「ごめんなさいローさん今度から気を付けます！」
「分かれば良い。」
「牛丼！トラ兄卵は…？」
「一緒にあるからいくらでも使いな。」
「やった！」
「それと家で浸けといた漬物だ。」
　と茄子ときゅうりの漬物を出すトラ男
「そういえば！ローさんも、まぞくだったんですか！」
「トラ兄もお姉と同じ？」
「俺は人間だ。だが魔法少女の奴らはどうにも異能持ちのやつもそういう括りにしてるらしくてな。」
「凄い！トラ兄はどんなことが出来るの？」
「例えばＲＯＯＭ」
　と半球体の透明な膜が出来た。
「俺の能力はこのＲＯＯＭの中で様々なことが出来る。例えば台所のジュースと空のジュースをシャンブルズ！」
　と空になったジュースが容量一杯のジュースと入れ替わった。
「あ！あの時の！ローさんが助けてくれたんですね！」

「他にもあるが今日はここまでだ。一度に言っても理解しきれないだろうからな。それと」
「優子に大きな怪我がなかったのが一番だ。」
　とシャミ子の頭を撫でる。
「おにいちゃん…！」
　と感動するシャミ子
　だが
　グワシッ！
「しかし一体どんな構造になってるんだ？頭から直接生えてんのか？

頭蓋骨からなのか？尻尾も尾てい骨が伸びたのか？う～ん興味が尽きん。今度スキャンしてみるか？」
「わー!!ローさんツノを両手で掴まないでぇぇぇ!!」
「ふふふ、仲が良いですね。」
「あわわわわ…これで勝ったと…おもうなよーーーー」
頑張れシャミ子まだまだ、まぞくとして始まったばかりだ!!

覚醒後の初登校！桃色魔法少女との再会

皆さんこんにちは！
私はシャドウミストレス優子！
闇の一族の末裔で魔法少女の生き血を求め魔法少女に出会ったものの片手でダンプを受け止めていました！
あわあわあわ…！
今の私ではレベルが違いすぎて勝てません…何とか突破口を見つけないと。
そして何時ものように登校するとクラスメイトの佐田杏里ちゃんにツノが生えたことに疑問を浮かべるのでクラスに入り珍しそうに見る他の人たちに話します。
と不思議なことに皆さん受け入れてくれたのでまずはあの桃色魔法少女を探さねばと闘志を燃やしているとなんと杏里ちゃんから情報が！
なんとA組に魔法少女が！名前は千代田桃というそうです。
これはチャンスです！
とお昼休みになり敵情視察をします。
何事もまずは敵を知らないといけないってローさんが言ってました！
（病原体の話しをしていたときのこと。）
それなのに杏里ちゃんが声を描けてしまったためこちらに来てしまいました。
「お、大きい…！」
「あれ？昨日の小さい妹さん？」
「小さくにゃいぞー！まだ大きくふしゃーー」
「優子言葉が追い付いてないよ！」
杏里ちゃんが言いますが構いません！
例え握力計を三個使わなければ測れない握力だろうと、魔族に覚醒したんです。多少は善戦してみせます！
「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃ」

ポコンポコンポコンポコン…ポ…コ
……
「お腹の横と手首がいたい…」
「思ったより弱かった!?」
「ど、どうして避けないのですか?」
「う～ん。避ける必要のないぐらいだったから?」
そうでした片手でダンプを受け止めていました!
そして桃色魔法少女は私の手を掴みました。
はっ!?まさかちぎって投げられる!?
「ご、ごべんだざいでしだーーー」
「メンタルも弱かった!?」
と桃色魔法少女は私の手を持ち
「親指は中で握らない方がいい。怪我するから。後腕だけじゃなくて身体の回転も入れる。ほらやってみて。」
と言われたので
「ほりゃ!」
とさっきよりいい音が!
「う～んセンスが…飛び道具の方がいいかも?」
「うぅうこ、これで勝ったと…」
「思う前に何やってんだ優子?」
「はわわわ!?ローさん!」
「あっ!トラ男先生!昨日はありがとうございました!」
「佐田屋か、あぁ肉旨かったぞ。って伝えといてくれ。」
「ラジャー!」
「…死の外科医…」
「ここでは先生と呼べ。もしくはローだ。」
はっ!?そうでした!ローさんとなら魔法少女の生き血も簡単に手に入る!
……で、でもこれは私がやらねばならないこと!
ローさんを巻き込むのは良くありません!
「つうか優子。お前は喧嘩もしたことないのにいきなり戦闘しような

んてレベル1の勇者がレベルマックスの魔王に挑むぐらい無謀だぞ。」
だ、断言されてしまいました!?
「…そんなにですか?」
「あぁ。それに飛び道具使おうにも肝心の優子のスペックじゃあその辺のフォークでさえ三メートル飛べばいい方だろう。」
「にゃにぃおー!!!」
「なら試すか。ほれフォーク。」
「とりゃあ!!」
グサッ!と二メートルのところに刺さった。
「…予想より駄目だったか…」
「うん。よわよわ魔族。」
こ、これ
「これで勝ったと…思うなよーーーーーー!!!」
は、恥ずかしいです!!
おにいちゃんだけじゃなく宿敵にまで呆れられてしまいました!
と走る私の後ろ姿をローさんが微笑ましそうに見ていることに気付きませんでした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「取り敢えず授業も始まるから早く席に戻れ。」
優子のやつが退散したので俺もまた保健室へと戻る。
「そういえば死の…先生はあの娘とどういう関係…?」
「まぁ昔から面倒見てる手の掛かる妹みたいなもんだ。」
「あぁだからおにぃちゃんって…羨ましい」ボソッ
「あん?」
「いえ何も…あの」
キーンコーンカーンコーン
「チャイムがなったから戻れ。学生は勉強が本分だからな。」
スタスタスタ

「あっ！……死の外科医…姉の手掛かりを何か…」

ーーーーーーーーーーーーー

翌日

き、昨日は善戦出来ましたが！これで終わる私ではありません！

何とか作戦を考えないと！

「いや昨日のはどう見てもボロ負けでしょ。」

「杏里ちゃん!?」

「まぁ優子なりに頑張ったみたいだけどね。」

「杏里ちゃ～ん！」

やはり持つべきものは友です！

ここは！

「桃色魔法少女よりも弱い魔法少女を探して！」

「私はそれなりに弱い方だよ？それと長いから桃って呼んで。」

「ほわっ!?桃色魔法少女!?」

ど、どうしてここに!?まさか昨日の報復に!?

「急に闇に目覚めた子は色々凄いことになるから様子を見に来た。」

「凄いこと!?」

な、なんですか!?凄いことって

「それよりもあの…世界を救ったと？」

「同僚が強かったから。」

ということは桃色魔法少女よりも強いのがワサワサといるということ!?

「で、シャミ子ちゃんだっけ？」

「ち、違います！シャミ……シャドウミストレス優子です！」

「やっぱりシャミ子。」

「滑舌なんて気にすんなシャミー」

「略さないでください！もう怒りました！今日の放課後か、河川敷でキサマを討つ！血液さらさらにして待ってるが良い！」

「あんまり気が進まないな…もう変身したくないし…弱いものいじめになっちゃうから」

「シャミ子ー今日で修行仕上がるの？」
「やはり週末にしてください！」
ーーーーーー
放課後
「さぁまずはダンベル上げです！」
「５００でいい？」
「よーし打倒魔法少女！」
「あっ…」
……
「一時退散…」
「良いの？お兄さんもやってるよ。」
「ローさん？」
と隅を見ると……
逆立ちで腕立て伏せしながら巨大なバーベルを足に乗せてるローさんでした!?
「はわわわ!?おにぃちゃん!?」
「ん？優子か。ここに来るなんて珍しいな。」
と足に乗ったバーベルを空中に放ると今度は肩に乗せてスクワットし始めました！
おにぃちゃんの上半身久し振りに見たなぁ…凄い…カチカチ…！
「…死の外科…先生。」
「言いにくいなら好きに呼べ。」
「じゃあ死の外科医で、とても凄い筋肉…絞めすぎず柔らかな筋繊維でしなやかな筋肉…やりますね!!」
「桃色屋も中々アグレッシブだな。普通の魔法少女は魔法主体が多いって言うのにな。」
「最後にものをいうのは筋肉ですから」
それは間違ってますよ！
ま、不味いです！
このままではおにぃちゃんが魔法少女側に付いてしまいます！
「お、ローさん！おかーさんが今日お酒飲もうと言ってたです！」

「清子のやつが?·まぁそういう時もあるか。」
「わかった。焼酎と強めの酒とつまみを買ってくと言っておいてくれ」
とそのままスクワットに戻ってしまいました。
何だか詰まらないのでローさんにしがみついてみたりしましたが難なく持ち上げられてしまいました。
うぅぅぅ
「こ、これで勝ったと思うなよーーーーー!·」
こうして魔法少女に勝つために特訓をする私でした。
その夜おかーさんとローさんはお酒を一緒に飲んで何か話していたようですが疲れていたので私は寝てしまいました。

ーーーーーーーーーーーー

「優子の奴が覚醒するなんてな。」
「えぇ。でもいつかはこうなるかもと思っていました。」
「あいつに真実を話すのはまだ早いな。」
「もう少しあの娘が成長したら話すつもりです。それまで優子のことをお願いします。」
「分かってる。優子は魔族に覚醒して以前みたいに走れないということもない。魔族としてレベルが上がれば優子の呪いに対する耐性も上がって普通に過ごせるだろう。」
「…これも桜さんとローさんのおかげです。呪いに干渉してくれて、ローさんが懸命に治療してくれたから今の優子があります。」
「そうだな。優子は一生懸命生きてるからな。」
「あと優子ばかりに構うのは少しズルいです。私も構ってください。」
「はいはい。今日はとことん付き合うさ。」
と夜が更けるまで飲み明かし翌日シャミ子、良子からお酒臭いと言われてしまい凹む二人であった。

シャミ子は魔法少女に鍛えられ　死の外科医は覇気を説明する

私はシャドウミストレス優子！
今日は待ちにまった対決の日！
この日のために家で鍛えたのです！
そうして多魔川に来たのは良いのですが…
「どうしてそんなに焼けているのですか!?さては私との対決など忘れて遊び呆けて！」
「週末の約束だけど土曜か日曜か分からなくて昨日から待ってた。」
はわわわ!?
「それは申し訳ありません」シュン
「私も気付いたのが金曜日だったから良いよ。でもこういう時困るから連絡先分かる？」
「あっはい。え～と０４２ーの」
シャミ子よ。敵に個人情報を漏洩させてしまっておるぞ？
「きょ！今日のために私は鍛えてきたんです！勝負です！」
「うん。確かに前会ったときより一キロ落ちてるし上半身を中心に筋肉量が増えてる。」
「へっ？そ、そうなんですか？」
「そりゃそうだ。鶏肉、クエン酸、あとは貧血気味だから鉄分も多めに取らせていたからな。」
「成る程！特にこの上部の部位が」
「な、長くなるから良いです！」
な、何ですかこの、魔法少女は！
それにローさんが何時もより多くお肉をと酸っぱいやつとひじきを持ってきたのにはそんな訳が……
「おにぃちゃん!?なななななな何故いるんですか!?」
「大丈夫だとは思うが一応念のためにな。」
「保護者同伴で来たの？」

「お、ローさんの力を借りずとも私は貴女に勝って見せます!!!」
わ、私だってやれば出来るとおにぃちゃんの前で証明するんです！
「準備運動はしないの？」
「結構です！」
「いやした方がいいよ。さあ！やろう！」
「どうしてそんなにグイグイ来るんですか！」
「この前痛そうだったしもしかしたら尻尾の靭帯が切れちゃうかもしれないよ？」
「し、尻尾の靭帯!?そ、そんな嘘には騙されませんよ！ねっ！ローさん！」
「…いや強ち間違いではないかもしれん。この前スキャンしたが尻尾に神経も通ってるのが分かっているからその可能性も捨てきれん。」
「そうなんですか!?」
「ほら死の外科医の言うことなら間違いじゃない。」
うううう、ローさんはそういう嘘は言わないですからやった方が良いかも…
「ほらかかとは上げちゃ駄目。」
「優子。膝は前にだ。」
あれーーーー
「はぁはぁはぁ、」
「一通り伸ばし終わったしじゃあ走ろうか？」
「はしっ!?」
「ウォーミングアップはしておいた方が良いから。」
「なんで!?」
「初心者でもペースを作れば三キロくらいは走れる…筈」
「三キロ!?」
「来ないなら一人で行くから。」
「キサマ逃げる気か!?」
「うん。」
「逃がさないぞ～」
「じゃあ行こうか。」

「ふむ…優子の魔族としてのスペックも把握しとかないと行けないか…仕方ない付いていくか。」
「さぁ。最初の1キロはキロ9分ペースで2キロ目からは七分半ペースで行こう」
　タッタッタッタッタッ
「はぁはぁど、どうして私は敵と一緒に走っているのんですか…」
　つらい、つらいつらいつらいつらい、犬の散歩してる人がいる。つらい橋がある。つらい、おにいちゃんが横で頑張れって言ってる、つら……
「万物は流転する!!」
　生まれて初めてのランナーズハイなシャミ子であった。
　そうして走ること四キロ
「そういえばどうして走ってたんだっけ?」
「はぁはぁ、な、何ででしたっけ…お、思い出せませんが…じ、自分の可能性を感じました…」
「じゃあこのまま海まで!」
「ここ結構山よりですけど!!」
「というかそんなに走れません!勝負です!」
「思い出しちゃったか…じゃあ…やる?」
　……片やウォーミングアップばっちり。
　もう片方はバーンアウト……
「明日以降にする?」
「そうしてください!」
「ふむ…四キロ走れたのか…感慨深いもんだ。娘の成長を見る親父の心境というやつか…」
「……四キロ!?」
　…帰りも四キロ戻らなきゃ行けない…
「ロ、ローさん!電車代貸してください!」
「…悪い優子。財布系は家でな。Ｓｕ○ｃ○ぐらいしか持ってきてねぇ。」
「そ、そんな～～も、もんも～お金貸してください～」

「良いよ。五百円で良い？」

宿敵にお金を借りることになるとは…ぬぬぬ

としていると突然バシャン！という音ともに水しぶきが上がる。

「この魔力…！下がってシャミ…」

「ローーーー!!!」

と炎を纏いトラ男目掛けて飛んでくる。

「待てこらサラマンダー。」

とトラ男は武装色を纏い受け止める。

「わーい！ローだ！ローだ！」

「何してんだ？確か今は涼しい所に行くといって北極だか南極に行くとか行ってなかったか？」

「飽きたからローに会いに来た！なぁなぁ遊ぼうぜ！」

「後でな。今は忙しい。一先ず帰ってゲームでもやってろ。」

「おう！そういえば何で魔法少女がいるんだ？燃やすか!!」

と言った瞬間桃は凄い速さで変身してパンチしてました！

ボォォォォォォ

「効かないぞ！僕たちは現象なんだ！魔力とかなら多少痛いけど普通の拳じゃ…」

「止めろ！」ゴツン!!!!

「いったぁぁぁぁぁーーー!!!!拳骨しなくたって良いじゃん！」

「そこの桃色屋は穏健派だ。無暗に手出すんじゃねぇ。」

「む～分かったよ！先帰ってるから！」

とサラマンダーと呼ばれた少年は姿を消す。

「い、今のは一体？」

「あれは俺の使い魔だ。自由気侭なやつでな。炎の精霊なのに暑いところは苦手と来たもんだ。」

「あれで使い魔!?しかも精霊って確か世界的に姿を現さなくなったんじゃ…？」

「あいつらは現象として何処にでも現れるからな。最初会った時はあ

いつ単体で２０人規模の魔法少女を炎で焼いてたからな。」
「はわわわ!?だ、大丈夫なんですか!?」
「問題ない。そんときに今みたいに拳骨してやった。ついでに、魔法少女たちも治療してやった。」
「魔力で干渉する以外で!?」
「?そんなに凄いことなんですか?」
「当たり前だよ!さっきのは炎っていう現象が形になってる。だから本体にどれだけ攻撃しても当たらないから魔力で強引に干渉するしかないんだよ。なのに今拳骨して痛がってた。」
「???……ローさんが凄いってことですね!!」
「あ～まぁ優子に難しい説明をしても理解しづらいか。」
「というかさっき腕が黒く変色してた。あれも魔力…?」
「説明すんのは清子や桜屋以来か。魔力じゃねぇ。そもそも俺は魔力なんてない。」
「じゃあどうやって?」
「あれは覇気だ。」
「破棄……何か捨てるんですか?勿体ないです。」
「捨てる方の破棄じゃなくて気合いとかの覇気だ。」
「覇気は人間由来のやつなら誰にでもある潜在能力。大半の人間は気づかないまま、あるいは引き出そうにも引き出せず一生を終える。」
　むむむ難しい話しです。でも何となく分かります。自分の中の凄い力ってことですね!
「その覇気でどうしてさっきみたいに」
「慌てるな。まず覇気には三種類ある。」
「さっきのサラマンダーを、受け止めたのは武装色の覇気。」
　ブゥンとローさんの腕が真っ黒になっちゃいました!?
「ローさん日焼けしすぎです!?」
「シャミ子ステイ。今大事な話だから。」
「まぁ優子は置いといて。武装色は言わば体の周囲に見えない鎧のような力を作り出す覇気。更にこいつは形のない現象でさえも捉えることが出来る。」

「だからさっきの炎を掴めたんだ…もしかして拳骨出来たのもそれ？」
「そうだ。より強力な鎧は攻撃力にも転じることが出来るからな。ただしあくまでも実体をとらえることができるだけで、能力を停止させることは出来ないから油断は出来ん。」
「????」
「優子、寒いとき手袋をするだろう？」
「はい！ローさんからもらった暖か手袋です！」
「そうだ。手の周りを保護するだろう。武装色は言わば凄い手袋のようなものだ。」
「ふむふむ」
「そして凄い手袋をしていることによって風といった寒いものを掴めるってことだ。」
「成る程！武装色は凄い手袋なんですね！」
「いや何で手袋!?鎧で良いんじゃ？」
「優子は甲冑とかの鎧を見たことないからな。例えるなら手袋みたいな身近なものにしないと分からんだろう。」
（あぁこの人苦労してるんだな。）
　と桃は感じる。
「武装色を纏うことを武装色硬化、武装硬化という。
　今見たように左腕だけに覇気を纏うこと、或いは全身を武装色で覆うことで防御力を高めることも可能だ。」
「これがまず一つ、次は見聞色の覇気。」
「見分ショック？」
「見聞色の覇気だ。」
「これは相手の気配や感情の動きを読むことができ生物の発する心の声も聞くことができる。
　生まれつき持つ者やショックで覚醒する者もいる。
　強力な素質を持つ者なら周囲の人間の思いを理解することも可能となる。」
「心を読めるってことですか!?」

（それなら桃色魔法少女の弱点を聞いて対策できる）
「それなら桃色魔法少女の弱点を聞いて対策できるって考えだな。」
「心を読まれた!?」
「でも実感が沸かないな。今のだって長いこと一緒にいるから分かっただけじゃ？」
「なら桃色屋。その状態で俺に攻撃してみな。」
「えぇ!?」
「なら遠慮なく。」
　と桃は拳を振り上げ。
「右ストレートと見せかけて腕を掴んで背負い投げ。」
「!?」
　スカッ
「左足での回し蹴り。」
「クッ！フレッ」
「フレッシュピーチハートシャワーか。直線なら当たらんぞ。」
「!!!」
　と桃は攻撃を止める。
「今のが見聞色の覇気だ。」
「凄いです！おにぃちゃんが桃を圧倒してました！」
「それだけじゃない…今目を瞑ってたし私の攻撃の名前も当てた！」
「見聞色を極限にまで極めていくと未来予知（未来視）の領域に達し、少し先の未来が見える」とまでに相手の先の行動・言動などを映像として「視る」ことができ予知することができるようになる。」
「今のは数秒先の未来を見たってことか。」
「凄い！とても万能です！」
「だか、これにも弱点はある。意識外の攻撃、不意打ちは通るし極限まで集中してないと出来ない芸当だ。」
「見聞色は心の声が聞こえるということですね！」
「……まぁそんなもんだ。」
「今ので二つってことはもうひとつある？」
「最後のが覇王色の覇気。」

「覇王…なんだかカッコいい名前です!!」
「簡単に説明するなら王の気質を持つものが持っている覇気だ。」
「残念だが覇王色は俺は使えん。」
「だから説明だけだ。これは圧倒的な力量差がある者を威圧感や殺気によって、一瞬で意識を刈り取り気絶させることができる。
　使い手の実力によっては広範囲に覇気を発散させた圧力により周囲を吹き飛ばすなど、物理的な破壊力を生むことがある。」
「何か凄い衝撃波と、威嚇して気絶しちゃうんですね！」
「まぁそういうことだ。」
「…死の外科医…さっきの武装色教えて貰えませんか？私はこの町を守る魔法少女…姉が守ってきたモノを守りたい…」
「…まぁ良いだろう。その代わり優子のやつの特訓も見てやってくれ。」
「ローさん!?」
「魔族に覚醒したからには魔法少女に狙われるのは決定事項だ。最低限自衛できる力はつけなけゃいけない。」
「厳しい言い方だが弱ぇ奴は死に方も選べねぇ。」
「おにいちゃん…」
「だがお前たちはまだ子供だ。そういった危険を遠ざけるのは俺たち大人の役目だ。ゆくゆくはお前たちが大人になった時、次の世代を引っ張っていくことになるだろう。」
「何はともあれ、優子も成長したな。」
　ポンポンと頭を軽く撫でられるシャミ子
「はい！」
「さて優子は先に帰りな。」
「ローさんは？」
「用事があるからな。それを終わらせてから帰る。」
「分かりました！桃！この借り（５００円）は必ず返します!!」
「…ええっと…こ、これで勝ったと、思うなよーーーーー!!」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「行ったか。で、桃色屋、何か聞きたいこと…桜屋のことだな。」

「はい…知ってるみたいなので単刀直入に言います。失踪した姉について何か知りませんか？」
「…」
「姉は十年前に失踪しました。この町で…天災があってでもそれを知ろうにも姉の残した結界があり魔法少女の私では古株の魔族に接触して聞くことが出来なかった。」
「死の外科医はこの町を拠点にしてる…教えて貰えませんか…」
「…悪いが桜屋の所在がこの町で途切れたぐらいしか知らん。だが」
「？」
「もし自分の身に何かあればこの町を頼むと俺に言っていた。」
「だから俺は休日はこうやって外に出て異常がないか確認している。」
「！まさかさっきの見聞色で？」
「あぁ一定範囲だが歩いて移動すればせいいき桜ヶ丘を、見れるからな」
「桜屋から結界についても教えられたからな。そういう調整をするのも俺の役割だ。」
「…ありがとうございます。」
「何かあれば頼れ。桜屋には借りもあるからな。最低限協力はしてやる。」
「私はもう一回走ってきます。」
　と桃はそのまま走り去る。
「俺も帰るか…サラマンダーの奴がいるから今夜はそうめんか…」
　と来た道を帰る。
　そのまま歩いていると…見聞色でシャミ子の反応をキャッチした。
　のだが
「あぁ乗り過ごしたな。おくおくたま、まで行きやがったか。あそこは桜屋の私有地だったな。…ＲＯＯＭ　シャンブルズ」
　と連続で移動するトラ男。
　シュイン
「寝てて乗り過ごしたな優子。」
「おにいいいいちゃややぁん!!」

と抱きつくシャミ子をトラ男は背負うと
ＲＯＯＭとシャンブルズで移動しながらばんだ荘に帰ってきた。
「あっ！トラ兄！トラ兄の部屋に誰か入ってったよ？」
「良子。あれは俺の知り合いだから問題ない。」
「わかった！あれ？お姉どうしたの？」
「四キロ走ってな。疲れてるから背負ってきた。」
「お姉凄い！」
「ありがとう良。」
「そんなわけだから今日は記念に流しそうめんをやるぞ。」
「流しそうめん！良やったことないから楽しみ！」
「清子に器の用意して貰ってくれ。」
「は～い！」
と良子は部屋に戻る。

「さてと筋肉痛になるからちょっとした治療をするか。」
とシャミ子を、部屋に運ぶとお手製のクエン酸（甘口）を飲ませると
「ちょっとチクッとするぞ。」
「へっ？」
「カウンターショック　弱」
とかなり弱めの電流を手に纏いながらシャミ子の両足をほぐす。
暫くすると終わったのか
「さてとサラマンダー！そこの竹を全部下に持ってけ。流しそうめんだ!!」
「分かったぜ！ロー！」
と立て掛けてあった竹を持ちながら浮遊して下に持っていくサラマンダー。
「ローさん…足が痺れました…動けないです～」
と言うので仕方なくまた背負い
「清子。今日はサラマンダーもいるから外で流しそうめんやるぞ。」
「は～い、サラちゃんも久し振りだから一杯切らないとね。」

とネギを片手に言う清子であった。
そうしてそうめんを次々と湯がいていき外の竹はＲＯＯＭで上手く組み立てながら高いところから水を部屋から通して流しそうめんをする。
今日初めて会うシャミ子、良子も何だかんだ波長は合うようで仲良くなっていた。
二階から一階に掛けて竹を設置しシャンブルズでそうめんを上から流し、各々上手く取りながら日曜の夜を過ごすのであった。

お小遣いアップで友情もアップ！

皆さんおはようございます！
私はシャミ子…じゃなかった！
シャドウミストレス優子！
この前覚醒した出来立てホヤホヤの新人魔族です！
今日おかーさんに魔法少女探しのことを話すと対策が必要と言われました。
魔法少女対策グッズのために今まで月１２０円だったお小遣いが何と！５００円に大幅アップしました！
「おかーさん！ありがとうございます！」
「良いのです優子。おかーさんも当たらない懸賞は止めます！」
「おかーさん折角集めてたのに!?」
「当たらなければ切手泥棒なのです!!!!」
「なら家で引き取るぞ。俺の奴と合わせると丁度応募出来るからな。」
「では宜しくお願いしますねローさん。」
「あいよ。」
「ハッ！ローさん魔法少女対策の武器を見せてください！いつか見たカッコいい剣を！」
「別に良いが刀だってタダじゃねぇしな。この前見た手頃な奴で１０万とか」
「他のにします！」
け、剣は高いです！それに私が持っても振れないですから良いものを探さないと！
ーーーーーーーーーーーーーー
「成る程それで朝からご機嫌なのか？」
「そうなのです！これで魔法少女を倒せる武器を買うのです！」
「シャミ子駄菓子買い放題だよ！」
「駄目です！これは魔法少女を倒す資金なのです！無駄に使うことは……」
「良いの？駄菓子買わなくて？」

「魔法少女を倒します…ハッ！駄菓子を食べたごみで倒せば!?」
「シャミ子揺らいでるぞ～？」
　と杏里ちゃんと話しをしているうちに着きました！
「あっ！桃！先日貸してもらったボトル返しますね！」
　昨日は水分補給でボトルも借りていたので返せて良かったです。
「そんなに急ぎじゃなくても良かったのに。」
「そういうわけにはいきません！宿敵の魔法少女にホイホイ借りていては立派な魔族にはなれません！」
「えらいねシャミ子は。それなら昨日貸した５００円の返済も……」
「はわはわはわはわ…な、何故か丁度　も、持ってます……！」シクシク
「やっぱ良いよ。ごめん。」
「にゃにいおー！早くお納めやがれです～！」
「事情は分からないけどシャミ子泣いてるし」
「これは泣いてない！目汁だ!!」
「ちよもも～シャミ子の家は訳あってびんぼーなんだ。」
「…それなら十回払いにしよう。月５０円で」
「本人を前に勝手に進めるな～です！けどそれでお願いします！」
「いいよ。」
「でもこれで暫く私とは戦えないね。倒したら払えてない彷徨える借金が一生付きまとう。」
「ど、どうしてですか!?」
「そしたらシャミ子一生こげつき魔族だよ。お兄さんも凄く困るよ。」
「ローさんに迷惑を掛けちゃ駄目です！分かりました！」
　と見事に丸め込まれているシャミ子であった。

「まずは４５０円で桃を倒せそうな武器を探します！」
「おぉ！具体的には？」
「フエラムネで吠える犬を呼び寄せます！」
　シャミ子ーーー駄菓子から離れなよぉぉ!!
　ーーーーーーーーー

放課後
私は放課後杏里ちゃんの提案でショッピングセンターマルマに来ました！
「ここは宝船ですか!?」
「まぁまぁこういったところでまずどんなのがあるか確認してみよう！」
「それは良いのですがどうして桃が一緒にいるのですか！」
「休戦中だし、それにシャミ子ちょっとずれてるから予算フルに使ってガラクタ買いそうだし。」

「そんなことありません！」
「じゃあその割りばしと輪ゴムは？」
「輪ゴム鉄砲カッコいいじゃないですか！で、でも戻してきます！」
そうして私たちは色々な物を見に行きます。
途中釣竿やバケツ、ルアー、スコップ、シャベルを見かけました！
「お、思ったりよりも武器は高いです…それに一杯歩いてお腹が空きました。」
「そうだね！おっ！あそことかどうよ！」
と新しくなったフードコートの文字が見える。
シャミ子、シャミ子や…
貴女はいつか夢で見たご先祖!?
シャミ子よ。魔法少女と休戦中ならば今は英気を養う方が先決です。
いや、ここは水を飲んで我慢だ！
おにいちゃん!?
優子。確かにフードコートは良いが果たして腹にたまるのか？
うっ!?た、確かに…
ええいうるさい！食べたいときに食べるそれも魔族の生き方じゃ！
だが栄養面が偏れば優子のためにならん！
年上を羨まんか！

見たこともない奴よりも優子の健康の方が大事だ！
シャミ子の中で天使（ご先祖）と悪魔（トラ男）が戦う。
言ってる内容は配役逆じゃないかと思うがスルーで。
そして最終的に勝ったのは…
「杏里ちゃん！私を止めてください!!!私はフードコートになんて絶対に行きたいです!!!」
「行動と言葉が合ってない!?」
「無駄におしゃれでお腹に貯まらなさそうでも憧れは無限大です！」
「炭水化物を取った方が良いアイディアが出るかもよ？」
「行動のための糧食は経費で落とせるよ。」
「なるほど！」
……結局買ってしまいました…
ぐぬぬ…何故こんなことに…
もしやこれも魔法少女の計略!?
さては私から経済力というキバを抜こうとしているのか!?
「かしわ天？」
「鶏肉のことだよ。」
「一口ちょうだい！キス天あげるから！」
「いいよ。」
「シャミ子もいる？」
「ち、ちくわと交換なら良いです。」
「優子に桃色屋、佐田屋こんなところで珍しいな。」
「トラ男先生！どしたの？」
「週末に釣りに行くからな。バケツを買いに来た。」
「普通は釣竿では？」
「俺を中心にＲＯＯＭで囲んでシャンブルズでバケツに入れればいくらでも取れるからな。」
「成る程。」
はわわわわわ
ど、どうしましょう!?
おにいちゃんに外で食べたと知られたら

なに?外で食った?なら優子の夕飯はご飯抜きのこれから青汁生活だ!

なんて言われてしまいます!?

「優子…お前…」

「お、おおおお、おにぃちゃん　ご、ごめんにゃざぃぃぃ」

「何で泣くんだ?」

「だって外で食べたから。」

「そんなことでグチグチ言わん。むしろ積極的に青春を謳歌してることに感動してるぞ。優子も友だちと食べに行くようになるとは…今日はカツで御祝いだな。キャベツとロースとあとソースとレモンとパン粉と」

「カツですか!?やったです!!」

前食べたときとても美味しくて感動しました!!

流石おにぃちゃんです!

「優子、佐田屋、桃色屋、天ぷらまだ食うか?今なら俺が奢るぞ。」

「なら私はかしわ天3つ」

「あたしはなすとかき揚げ!」

「じゃあ…さつまいもと玉ねぎの天ぷらを」

「よし待ってな。取ってくるぞ。」

と取りに行くトラ男

「…トラ男先生ってシャミ子に過保護だよね〜」

「うん、死の外科医はシャミ子に甘々。」

「昔からの付き合いですから!世界一のおにぃちゃんなのです!」

エッヘン

「各々持ってきたから食うと良い。」

と平皿に分けて人数分持ってくるトラ男

「あれ?この塩緑っぽい?」

「抹茶塩だ。自家製のやつだから好きに付けると良い。」

「頂きまーす!…うまっ!?絶妙な抹茶の風味が天ぷらに合ってる!」

「これは…つゆに付けて食べて塩を足して…無限に食べれる…！」
　ほわぁぁぁぁぁ
「シャミ子が呆けてる!?」
「あまりの美味しさに感動してんだな。」
　爽やかです～～
「にしてもつゆまで飲んでシャミ子はえらいな～」
「天かすも入れましたし美味しかったので！」
「でも今月は割りばし鉄砲も作れません…」
「割りばし鉄砲って何に使うんだ？」
「ちよもも対策だって。」
「輪ゴムじゃあ流石に子供でも痛がらないと思う。」
「ったく。」
　と言いながらおにいちゃんは輪ゴムを取り出して簡単に割りばしを割って割りばし鉄砲を作りました。
　そしてさっき飲んでたコーヒーの缶を取り出しました。
　いったい？
「そら。」
　バチコン!!
　……
「ほぇあ!?」
「うそーーーー!?」
「…輪ゴムが缶を貫通した。」
　あわわわわわわ!?
「まぁ輪ゴムならこれぐらいか。」
「すっげえ!!トラ男先生どんだけ！」
「……まさかこの間の武装色は武器にも付与できる？」
「あぁ。タダの輪ゴムだろうと一瞬で凶器に早変わりってな。」
「…やっぱり輪ゴム鉄砲は魔法少女を倒せる武器なんですね！」
「それは死の外科医が規格外なだけ。普通は子供の遊び道具だよ。」
「うぅ～でもうどんとちくわで残りは１２０円になってしまいました。」

そして桃は自販機を指差すと
「喉渇かない？」
「もうその手には乗りませんよ！」
「それにしても安心したよ。シャミ子お金無さそうだしいつも一人でとことこ帰ってたから美味しそうに食べる姿が見えて嬉しかったよ。」
杏里ちゃん…私を思って…魔族に覚醒する前私は体も弱くて早退とかも多くて杏里ちゃんは部活もあるのに気遣ってくれて…
「おりゃーー」
なけなしの１２０円をいれてコーラを購入します！
一気飲みです！
「けほけほゲホゲホわ、私もとっても楽しかったです。また杏里ちゃんと一緒に行きたいです！」
色々ありましたがとても良い一日でした。
これからは色々と気付ける魔族になります！こういった集団行動が私の糧になっていくのです。
「あっ」
と桃が見たものは……
無料飲料水のコーナーだった。
……
「こ、これで勝ったと思うなよーーーーーー!!!」
「えっ!?私？」
「待て優子。」
ガシッとトラ男に角を掴まれるシャミ子
「な、何ですか！私は飲み物を無料で飲めたのに買ってしまった無駄遣い魔族です!!!」
「さっき言ったろ？今日の夕飯の買い物だ。一つ二つぐらいなら好きに買って良いぞ。」
「良いんですか!?じゃあひじきと豆腐と」
「買いながらで良いだろう。行くぞ。桃色屋と佐田屋も遅くならない内に帰れよ。」

「は～いトラ男先生また今度！」
「死の外科医ご馳走さまでした。」
「おう！これからも優子を宜しくな。」
そうしてそこで分かれ、おにいちゃんにお菓子を買って貰いました！
良と一緒に食べよう！
「優子…今日はどうだったんだ？」
おにいちゃんはいつも私の様子を聞いてきます。
その度に私は今日あったことどんな風に思ったのか言ってます。
今日は当然！
「皆で仲良くお出かけ出来て楽しかったです！おにいちゃんありがとう！」

その夜トラ男はカツとキャベツを大量に作りご飯と共に持っていきソース、塩、レモンと味付けを、たくさん用意して清子、シャミ子、良子も満足そうに食べる姿があったとのこと。

二度目の邂逅と娘を思う母の独白

おはようございます！
私はシャミ子…ではなくシャドウミストレス優子！
偉大なる闇の一族の末裔です！
とその前に正確にはまだおはようじゃなかったです！
「優子よ。挨拶はもうよいかの？」
「はい！ご先祖！」
そう！私は前に一度夢の中でお会いしたご先祖様に夢の中で出会いました！
「さて何処まで話したかの？」
「ご先祖がメソポタミアやらを転々として私との夢のアンテナが1しか立ってなくて夢の中に潜ることが出来るってことです！あとコーラ美味しかったです！」
「善きかな善きかな。そうじゃお主には才能がない！体力もない！メンタルも弱い！色々と駄目駄目じゃ！」
うぅ～そんなに言わなくても～
「しかし頼れる者が心強い！あの医者ならば魔法少女の生き血を容易く手に入れることなど赤子の手を捻る簡単じゃ！」
「嫌です！おにいちゃんの手は借りません！何でもかんでも頼りすぎるのは良くないことです！」
「えぇい！それでも闇の一族の末裔か！使えるものは使わんと勿体ないじゃろ！」
優子～もうお昼ですよ～
「おかーさん！」
「む！セイコか？」
「おかーさんを知ってるのですか？」
「まぁのう。ぬっ！いかん！電……波…ザッ…が…」
「ご先祖の姿が透明に！」
でも現実の私がもう一回寝たので何とか少し話しが出来た。
取り敢えず起きたら死ぬ気でメモを取る！

あとなんだがおとーさんのこととか始祖像の秘密とか言ってたような気が？

ーーーーーーーーーーーーー

「おかーさんメモ帳どこ!?」

「電話の上で見ました。何かメモをするのですか？おかーさんの分もメモをしておいてください。」

「えっ!?でも大事な…」

「砂糖、みりん、キッチンペーパー、ひじき、鶏むね肉、もやし、にんじん、長ネギ、酒１７８円、卵８８円は水曜日の１５時」

「……すごく…大事なことだった気が…」

「どうしましたか？」

どうしましょう!?忘れてしまいました…

そうだ！

「パンケーキ！そのために起きたのでした！」

そうして食べたパンケーキはもっちゃりしてておかーさんが冷やご飯と豆腐でかさ増ししてました…

うぅ～洗濯もおかーさんの手伝いをしたのですが制服が駄目に～

あれ？そういえばフライパン…

さっきおかーさんが持ってたときは少し黒光りしてたような？

…気のせいですね！

ーーーーーー

「…お父さんあの娘も成長してます。どうか見守っていてください…」

優子はとても優しい娘に育ってくれました。

あの娘が生まれてすぐ…身体も弱いあの娘は呪いの影響が強く…もって５年と言われました…

あの時、もっと丈夫に産んで上げられなかったと泣いてばかりでした。

そんな私たちはせいいき桜ヶ丘という希望に縋り桜さんと出会い呪いを軽減してくれました…

そんな時、昔から大人びていた当時中学に上がったばかりのローさ

んも二つお隣に住み始めていたときは驚きました。
昔からローさんは子供ながら大人びていて家も近所だった私は良く遊びに出掛けては怪我したときも治療してくれたりしました。
同年代から疎ましく思われ、大人たちも気味悪がりあの子から遠ざかる者がいましたが私は不器用ながらも優しいローさんと良く遊びました。
夫と出会い優子が生まれて…魔族である、夫が光の一族に狙われ巻き込んではいけないと周りに何も言わずに飛び出て…
そんな私を追い掛けてきてくれたローさんに安堵した気持ちもありました
そして初めて夫と出会った時ローさんと二人して何処かへ行ってしまい帰ってきたら所々ボロボロな、ローさんと服がちょっと汚れていた夫の姿がありました。
理由を聞いても二人ともはぐらかすばかりで教えてくれませんでした。
あの時は怪我したローさんを私が治療したりと普段とは逆でしたがとても楽しかった。
それから優子の面倒を良く見てくれて当時の私は分かりませんでしたが優子にあった薬を調合して投与してくれて健康面を気遣ってくれてました。
昔から不思議な能力を持ってましたがローさんはローさんです。
心優しく気配りの出来る子です。
そう言うと決まっていつもそういうところだぞとローさんは言ってました。
どういうことでしょう?
そうして10年前に良子が生まれて優子も病弱ながら元気に育ってくれて
それと同時に夫はいなくなってしまいましたが身近な所で見守ってくださってます…
寂しくないと言えば嘘になります。
でもそんな寂しさを埋めてくれるように娘たちは優しく育ちまし

た。
ローさんも夫がいなくなってからでも良く遊びに来てくれて優子の健康を考えてくれて生活の援助もしてくれます。
例え貧乏でも私は胸を張って幸せだと言えます！
「何か良いことでもあったか？」
と窓から顔を覗かせるトラ男
「ええ、毎日が幸せでとても嬉しいのです。ローさん」
「なんだ？」
「いつも優子のこと、良のこと、ありがとう。」
「…あれだ、俺が勝手にやってることたから別にいい…」
と照れるローさん。
相変わらず誉められなれてないですね。
「…あいつのことか？」
「それもあります。でもあの人はちゃんと戻ってくるわ。私はそれまでこの家を…娘たちを守ります。」
「私じゃなくて私たちだろ？」
「ふふっ頼りにしてますねローさん」
「分かってる…清子姉。」
「久し振りに呼んでくれましたね。今日は腕によりを掛けて作ります！」
今日も1日頑張るわ！
……でも時々優子は抜けているところがあり心配です。
優子…ウールは正しく洗わないと駄目になってしまいますよ？
はぁ…将来結婚できるのかしら…
まぁローさんがいればあの娘も大丈夫でしょう！

追記
優子が、月曜日に学校へ行き帰ってくると魔法少女の娘に制服を借りたとのことでした。
……おかーさん、優子の将来が心配です……！
その日はローさんが知り合いの農家から大量にもらったお野菜と

ローさんが暇だからと1から作ったパンとコロッケやピーマンを細かく刻んでハンバーグにしてパンに挟んで皆で美味しく食べました！

ローさんは相変わらずパンは苦手みたいでご飯を食べてましたが一緒に食べられて嬉しそうでした。

ローさん！

あからさまにピーマンを嫌そうにしないの。

相変わらずピーマンが苦手なんですから。

娘たちの前では顔に出しませんが長い付き合いですから分かりますからね！

魔力特訓と小さな小人

皆さん！
今日も元気ですか！
私はシャドウ以下略
…シャミ子です！
私が今いるところは…廃墟です！
何故こんなところにいるのかというと学校で飛び道具の話しになり桃が飛び道具を見繕うというので着いていくと桃が昔に買い取った場所でした。
所々ボロボロな廃墟でしかも桃に輪ゴム鉄砲を取られてしまいました！
「まずシャミ子は勘違いしてる。飛び道具って魔力を飛ばすことを言うんだよ。」
「がえじで～おうぢにかえじで～」
このままでは桃にちぎり投げられてしまいます！
「今日はなにか出るまでは帰さない。それに死の外科医からシャミ子の特訓も任されてるし。」
「いやですぅ～どうせならおにぃちゃんに教わりたいです～」
「死の外科医は魔力がないから教えられないって言ってたでしょ？」
「そうでした…」
「まずは何か分かりやすい的を…」
と始祖像を的にしようとしてたので辞めさせます！
「こ、これは先祖代々受け継がれし邪神像です！」
「なら仕方ない…木を、折ると可愛そうだし…」
「始祖像は可愛そうじゃないんですか…」
「仕方ない…一旦これでやろう。」
と魔法少女的なステッキを渡されてしまいました!?
「これは私が持ってはいけないものでは!?」
「いいからそれでやってみて。何か出そう？」
「むにににに…変な汗なら出てるのですが…ふんぬらばーーー！」

「何か言いながらの方が出るかも？なにか世界に向けてコメントないの？こんな世界壊したいとか、世界征服してやるとか」
「ど、どうしてそんなことが言えるのですか!?皆優しいですよ！」
「う～ん。戦うのに向いてないね…取り敢えず心に浮かんだものを言ってみて」
「えっと……今日もローさんと一緒にご飯食べたい！」
「…ごめん、何でも良いと言った私が悪かった。その子の生まれ持った資質が高まって魔力解放のキーワードがそれぞれあるんだ。私ならフレッシュピーチハートシャワーとか。」
「おぉ！ローさんといた時の結局は出さなかったやつ！見せてください！ほらこれで！」
「そこは引っ掛からなくていい。」
「まぞくとして覚醒したなら技の一つや二つ持ってるはずだし、だからこそ暴発しないように監視してたわけだし…」
「うぇ!?監視してたんですか!?」
　ま、まさか本当にちぎ投げコース!?
「そこも引っ掛からなくていい。取り敢えず自分の願望を技っぽく言ってみて。」
「うーん！ろ、ロイヤルホ○○！サイ○リ×レッドロブ○タ×スカイローガ！」
「ファミレス行きたいのは分かったけど、技っぽくとは言ったけどそうじゃない!!」
「おばか!!!!シャミ子やる気あるの！」
「ありますぅ」
「じゃあ強くならないと!!」
「魔法少女って私みたいになあなあで済ませるようなタイプだけじゃないんだよ！情け容赦のないのだっているの!!
　シャミ子はブラコンで優しい娘で悪いまぞくじゃないのに！そういう人にあったら一瞬でじっくりぐつぐつ煮込まれて終わりだよ！」
「にこまれる!?」
　な、なんて恐ろしいのでしょうか…

「というか今おばか！って言いませんでした？」
「言ってないよおばかっ！」
「ど、どうしてそんなに会ったばかりの私に肩入れするのですか…？」
　私なんておにいちゃんがいなかったら弱々の泣きべそまぞくなのに…
「そこは引っ掛からなくていいの。ほらもう日没だよ。今日中に何か出せたら１００％牛のハンバーグを作って上げるから。」
「１００％牛!?そんな幻の牛が有ったなんて!?」
「さぁやってみて！」
「ぐぬぬぬ～、熱海に行きたい！猫に包まれたい！ローさんと一緒に釣りに行きたい！納豆たまご掛けごはん！」
「ぬぬぬ～皆が仲良くなりますようにーーーー!!!」
　ポワン
「や、やりました！緩やかですけど出ましたよ！」
「…そんな掛け声で出ちゃうんだ…」
「あれ？何か私に向かってきてませんか…？」
「魔力が足りなくてシャミ子の方に戻ろうとしてるんだね。」
「当たるとどうなるんですか？」
「うーんそうだね。ちょっと痛いぐらい？」
「ど、どれだけ？」
「筋肉注射ぐらい？」
「お、覚えてろーーーー!!!」
　注射は痛いので嫌いですーー!!
　ゴロン
「あで!?」
　ゆらゆらゆら
「のわーーーー!?」
「……ノー…？」
「あれ？痛くない？」
　というか何かに躓いて…？
「ノー？」

「あれ？小人さん？」
「これは……？」
「ノー！」
何だか元気一杯の小人さんです！
「使い魔？にしてはなんというか愛くるしいような…？」
「ノー」
と小人さんは私に抱きつきました。
「…多分さっきのシャミ子の魔力がこの子に流れ込んだのかな？」
「そうなんですか？」
「まぁでも微々足るものだし退治しなくても良さそうかな？」
「こんなに無害そうな見た目で可愛らしいんですよ！退治なんて駄目です！」
私は小人さんを抱きしめます！
何と言うか庇護欲をそそられるようです！
「ノー…？」
「そうだ！ローさんにもらったクッキー上げますよ。」
サクサク「…ノー…！」
「嬉しがってるのが分かるね。」
「あはは…そろそろ帰らないとですね。小人さん気を付けて帰るんですよ」
今日は何だかんだ魔力も出せましたし日々前進あるのみです！
「…皆仲良くなりますように…だっけ。」
「私…シャミ子のこと鍛えるのもっと頑張ろうかな…」
「ど、どうしてそうなるのですか!?」
「ほら家までダッシュだよ。」
「お、覚えてろーーーー!!」
頑張れシャミ子。
ちりも積もれば山となる。
今日も立派なまぞくになるために走れシャミ子。
「……ノー」トテトテトテ

ーーーーーーーーーーーーーー
「成る程それで家まで走ってきたは良いが帰ってきた途端足がつったと」
「うわーん!!おにぃちゃん何とかして～」
「お姉、マッサージして上げる」
「良…!ありがとう!!」
「取り敢えずカルシウムとマグネシウムとって水分を補給するしかないな。」
「あらあらそれなら丁度夕ごはんはししゃもと牛乳だから大丈夫ね。あとローさんの好物の焼き魚ですよ。」
「悪いな清子。」
「良いんですよ。いつもローさんにはお世話になってますから。」
「なら俺からは甘いカボチャの煮物を提供しよう。」
「良、カボチャ好き!トラ兄ありがとう!」
「おう!沢山食べて大きくなるんだぞ。優子も身体を作るのは食だからしっかり食え。」
「はい!ローさん!」
「あとは靴だな。最近良く走ってるからガタが来てたんだろうな。」
「うぅ～面目ないです。」
「気にするな。優子が成長してるって証だ。…今度の休みに買いに行くか。清子と良子も一緒でな。」
「お出掛け!トラ兄楽しみ!」
「そうですね。皆でピクニックしましょう。」
「何が良いですかね～」
おかーさんと良、おにぃちゃんと一緒にお出掛けです～
とても楽しみだな～
「そういえば今日小人さんに出会ったんです!」
「「小人?」」
「はい!とても小さな小人で可愛らしいんですよ!」
「…優子疲れてるのですね。今日はゆっくり休みなさい。」
「お姉大丈夫?熱ない?」

「失礼な！本当に見たんですよ！」
「小人か…まぁ俺も昔に見たことがあるから優子も会うことはあるだろう。」
「おにいちゃん！」
「それで桃色屋との修行はどうだ？」
「はい！小さいですけど魔力を出せました！」
「ほう。俺は全くないからな。これからも続けるんだぞ。」
「はい！桃曰く私には才能はないみたいですが頑張ります！」
「何言ってんだ優子。何かに一生懸命になれる…それ自体才能があるってことだ。だから誇れ優子。」
「おにいちゃゃゃゃゃん!!!大好きですぅぅぅぅ～」
　そうしてシャミ子はトラ男に誉められ気分も良く週末をワクワクしながら眠りに付くのであった。
「むにゃむにゃ…これで…良いのですｚｚＺ」

ーーーーーーーーーーーーーー

「にしても小人か…いつかのあいつらを思い出すな。」
「もしかしてあの…？」
「あぁ過激派の魔法少女連中に体よく利用されていたお人好しなやつら。
　あの後桜屋の協力でおくおくたまの方にすみかを移させてそこから移動したりはなかったと思うんだがな。」
「あの時はあの人もローさんも桜さんも大忙しでしたね。」
「全くだ。まさかまぞくを一ヶ所に集める装置を作らせて大都市でまぞく狩りをしようとするなんてな。しかもやつら無報酬で休まずに働かせてやがって。」
「あの後あの子達を皆連れてきて豚汁を作って食べてもらいましたね。」
「あぁ。土の精霊だから野菜とかの栄養が一番効いてたな。清子も懐かれてたしな。」
「えぇ。サラちゃんも同じ精霊だから意気投合してたし仲良くなって

ましたね。」
　ガサゴソ
「そうだな…！清子…動くな。何か…いる。」
「えっ！」
　とトラ男は玄関まで静かに忍び寄りその音の正体を探る。
「…ノー？」
「…ノームか？」
「ノー！」
　と小人…ノームはローの姿を見るや抱き付く。
「ローさんどうでした？」
「どうやら優子が会ったのはノームだったみたいだ。」
「あら？もしかして好奇心旺盛だったノーちゃん？」
「ノー！」
「あらあらそうなのね。」
「ふむ。何となくだが経緯はわかった。どうやら好奇心に駆られてこっちに降りてきて桜屋の倉庫跡地で休んでたときに優子の魔力を取り込んで俺が持たせたクッキーも食べさせたみたいだ。」
「そうなのですね。だからノーちゃんは恩返ししたくて付いてきて…靴を直してたのね。」
「ノー！」
　とそこには外側が剥がれていた筈の靴が新品同様の輝きを放っていた。
「流石物を作らせたら右に出るものはいないと言われる程の腕前。」
「ノー…ノノ～」
「ん？ここに住む？」
「ノー！」
「屋根裏に住まわせてほしいだとさ。」
「えぇ良いですよ。今日から宜しくねノーちゃん。」
「ノー！」
　こうしてシャミ子は本人も知らずにその優しさで土の精霊ノームに懐かれることになり屋根裏にて生活を共にすることになるので

あった。

ごせんぞの逆襲…？温泉帰りの胸中

さて読者の諸君
オペオペの能力を持って転生したトラ男だ。
優子の挨拶じゃなくて悪かったな。
むさ苦しい男の紹介なんぞいらんと言うと思うがまぁ聞いていきな。
俺はいつも通り保健室勤務で周りを見回っていてな。
そんな時に優子のクラスでいきなり魔力の高まりを感じてな。
急いで直行したんだが。
「おい桃色屋何があった？」
「あっ死の外科医…実は」
「おぉ！我が子孫の兄君よ！共に魔法少女から生き血を搾り取るのだ！」
……？
「優子何やってるんだ？机に立って。んなことしても身長は一気には伸びんぞ？」
「なにゆうちょるか!?余は永劫の闇を司りし魔女リリス！此度は子孫の身体を借りて魔法少女を屠りに来たのだ！」
「なに！リリスだと！」
「知ってるのかトラ男先生!!」
「あぁ聞いたことがある、リリスはサタンの妻として全悪魔の母として出てきたり始祖の女として出てきたり、確かメソポタミアの神話の方にリリートゥと呼ばれる女の悪霊として出ていた記憶がある。
俺も飛ばし読みしているからその全容までは分からんが大悪魔といっても過言ではないだろう。」
「シャミ子のご先祖トンでもないビッグネームだったんだね！」
「そのなんじゃ…そんなに誉められても何も出せんぞ？」
「照れてる！」
「その先祖が出てきたということは優子はどうした？」
「あれじゃ！余の封印空間でゲームして待っておろう！その間に余が

魔法少女を屠るのじゃ！」
「…まぁなんつうか流石優子の先祖。所々抜けてるな。」
「さて！余の封印解放のためお主の血を頂くぞ！しかし子孫を助けようとしてくれ鍛えてもいるのじゃせめて苦しまぬようにしてやるぞ！」
「望むところ…」
「ククク、封印が解けたらまずはローカル路線バスで温泉巡りをして今までの疲れを癒し、その後は状況に応じて世界征服してくれるわ！」
「いやいや止めとけ。察するに優子の身体を間借りしてるようなもんだろ？なら勝てんぞ。」
「何を言うか！余は何千年と生きる夢魔じゃぞ！これしきのこと！そりゃァァァァ」
　と机を投げ攻撃しようとするリリス
　しかし
　……
「ぬあっ!?ちょ!?重っ……な、何故じゃ!?どういうことじゃ!!」
「簡単なことだな、いくら元が強かろうとも貧弱な優子の身体じゃあ攻撃力もへったくれもないだろうさ。」
「なんと!?いや道理で…というかちょっと動いただけで息切れするし重心はぐらつくし、力は入れづらいし、目もちょっと悪い…」
「え？シャミ子の身体ってそんなに？」
「まぁそうだな。色々あったからな。」
　昔に余命宣告されるし呼吸器に問題もあって走るのなんてＮＧだったしな。
「リリスさん多分ですがあなたの考える動きにシャミ子の身体が付いていけてない。」
「なんじゃと!?ということはトンでもないポンコツということか!?」
「ポンコツ…？聞き捨てならないな。優子は懸命に生きてるんだぞ…

それをいうに事欠いてポンコツ？
てめえが先祖だろうが何だろうが優子のことを悪くいうのならばここでぶった切るぞ？」
と保健室に置いていた愛刀をＲＯＯＭとシャンブルズで引き寄せる。
「トラ男先生目がマジなんだぜ！」
「ごごごご誤解じゃ!?子孫を悪くいうつもりなどないのじゃ！」
「おぉ流石死の外科医。殺気だけで怯ませた。」
「ならば魔力で勝負じゃ！ほりゃぁぁぁ！」
と放った筈の魔力は何故かＵターンしてくる。
「ぬっ？何故Ｕターンしてあいたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「…俺は何を見せられてるんだ？」
「フッ」
「ぶふふふ」
「そこ二人笑うな！呆れるな!!」
「これ以上好きにさせるとシャミ子の身体が痛んでしまいます。」
「ち、近寄るでない！こ、こうなれば一度体勢を立て直して！一般人!?邪神像を返すのだ!!」
「やっぱりこれないと遠くにいけない感じですか～」
「いいぞ佐田屋。そのまま持ってろ。
何度か試したことはあるが俺は精神の入れ替えもできるからその邪神像とやらから優子の魂をそのまま移し変えれば元に戻るだろう。」
「合点承知の助！」
「さぁ」
（ま、まさかちぎって投げられるのか!?）
ーーーーーー
必殺！シャミ先ちぎり!!
「め、冥土の土産はありますか？」
「諦めんのはや!?」
「やはり根本が優子と似てるな。」

――――――――――――――――――

数時間後

皆さんこんにちは！

私はシャミ子

偉大なる闇の一族の末裔です！

私は桃が始祖像の裏のスイッチを押した後ご先祖の封印空間でゲームをしていたと思うのですが

「ここはいったあばばばばばばばば、な、なにこれなにこれなにこれ～!?」

「ここは多魔健康ランド。シャミ子の先祖の最後の望みで温泉祭りだよ。」

「ごせんぞ負けちゃったんですか!?ご健闘してましたか！」

「…まぁしてたした。」

ごせんぞはやはりすごい方です！

「うっ…か、身体が痛い…」

「色々と無茶な動きとかしてたから。それとこれはまだシャミ子には早いから固めといた。エボキシ接着剤で」

「エボキシ!?ってなに?」

「それとリリスさんからの伝言で何か方法を考えてからまた来るって」

「これで勝ったと思うなよーーー！それとシャミ子すまん！」

「それと健康ランド代は持ち合わせがないからシャミ子に付けといてって。」

そこにはなんと１７２０円と大金の書かれた領収書が……!?

お小遣い４ヶ月分………

「意識戻ったしもう一回入りに行ったら?」

「うわーん！元取ってやるーーー！」

「あらあらシャミ子のぼせなきゃ良いけど。」

「のぼせても帰りは大丈夫。」

そうして再度温泉へと入ったシャミ子。

色々な温泉をもう一度堪能し、上がる頃にはのぼせ上がってました。
「はれ～ももが三人に見えますぅ～」
「見事にのぼせたね～」
「これはどうしたものか」
「お疲れさん。優子は俺が担いでいくからいいぞ。」
「トラ男先生！仕事終わったのか！」
「あぁアルコールの補充とかだったからな。比較的早く終わった。」
「死の外科医は温泉は入らないの…？」
「俺は優子のお守りだ。取り敢えず牛乳でも買うといい」
と二人にお金を渡してシャミ子の分も買いそのまま飲ませる。
「それにしてもトラ男先生、シャミ子に過保護だよね。」
「佐田屋は入学式の時のこと知ってるだろ。そういうことが毎日あったから心配になるんだ。」
「おぉ！そうだった。あの時もトラ男先生いたっけ。」
「まぁそこはいいさ。早く帰るぞ。」
とトラ男はシャミ子を背負うのであった。

……

そうして途中で二人と別れたトラ男たちはばんだ荘へと歩いていた。
「…おにぃちゃん…ごめんなさい。」
「どうした優子？」
「私また迷惑掛けちゃった…
まぞくになってから身体の調子も良かったのに…」
まぞくになるまではいつも私が苦しかった時、こうやって背負ってくれてお薬も飲ませてくれて迷惑ばかり掛けちゃって……
「別にこういう風に頼られるのは嬉しいもんだぞ。昔は良くこうやって話したもんだな。」
「うん…」
「それにな優子。俺はごめんよりもありがとうって言葉の方が良い。
俺がしたいようにして頼られて、それに迷惑なんて掛けられてなん

ぼだ。
まだまだ優子は子どもだ。
いくら躓いたって良い。どれだけ時間が掛かっても良い。
大事なのは…前に進もうとする意思だ。
一人で抱えずに俺や清子を頼ってくれ。」
「…ありがとう…おにぃちゃん！」
おにぃちゃんはいつも私に優しい
色んなことを知ってて私が苦しいときはいつも寄り添ってくれて
…
私立派なまぞくになれるように頑張ります！
そしていつかおにぃちゃんにも成長した私を見せて安心してもらいたいです！
こうしてごせんぞの入れ替わりがあったもののシャミ子はまた一歩まぞくとして成長するのであった。

シャミ子初めてのアルバイト！タコさんウインナーを売りまくれ！

おはこんばんにちは！
私はシャドウミストレス優子！
偉大なる闇の一族のこぜんぞ様の血を引く覚醒ほやほやのまぞくです！
突然ですが今日は杏里ちゃんの実家のマルマの精肉で１日アルバイトを始めることにしました！
時給７５０円で三時間程働きます！
理由はこの間桃に借りた電車代と健康ランド代を返すためです！
このままでは桃への借金が雪だるま式で増えてく雪だるまぞくになってしまいます！
杏里ちゃんの紹介で杏里ちゃんのお母さんの手伝いをすることに！
杏里ちゃんのお母さん魔法のようにウインナーをタコさんに変えたりバジルレモン味やガーリック味と色々な味を試食させていただきました。
ハムッ！美味しい！なにこれ美味しい！新しい！ずっぱじょっぱい！
頑張って沢山売るぞーー！
おかーさんにも許可を取りましたが家は１ヶ月生活費四万円の呪いがあるためか稼ぎすぎると運命的にお金が逃げてしまうそうです！
「知人のおめでた婚が重なったり、お賽銭で小銭と間違えてお財布を投げちゃったり財布ごとドブに落ちたり果てにお給料袋を鳥に取られてしまったことも。」
「後半はおかーさんがドジなだけでは？」
「そうだな。清子は昔からドジだったからな。いきなり転ぶのなんて序の口でハサミを買いにいく筈が巡りめぐって食パンになってたり、

自分の足に躓いたこともあったな。」
と遠い目をするトラ男
「お、おにいちゃんが黄昏てる!?」
「それと医療費、暖房費、教育費は別途判定なのか稼げます。」
「なんですかその曖昧な判定は!?」
「まぁ生活費は俺は対象外だからこまめに援助してるんだがな。」
「あまり稼ぎすぎても不思議な力で調整されてしまうので程ほどにするのですよ。借りを返して前に進めるのならそれは良いことです。」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「稼ぎすぎと鳥とドジに気を付けるぞーーー!!」
そうしてウインナーを売っていくシャミ子。
ここで働ききったら正々堂々戦って封印を解いてその後は……
その後私はどうしたいんだろう…
そういえば私って魔法少女を倒して何がしたいんでしょう…
あんまり考えたことなかった…
それなら…それなら桃ともっと仲良くなりたい…
「ありがとうございました!」
「シャミ子ちゃん頑張ってるね!今日1日頑張ったらウインナー1袋持って帰って良いよ。」
!魔法少女を倒したら…
ウインナーが貰える!!
ウインナーを売って!
封印を解いて
ウインナーをもらって
ウインナーを売って!
「…なにしてるの?」
ハッお客様!
「いらっしゃいませ!美味しい美味しいウインナーの試食販売会です!
お一つどうですか!!」
「……桃?」

ジューーーーとウインナーを焼く音が響く。
「ありがとう。」
とパクっとシャミ子の持っていたウインナーを食べる桃。
「ひょげぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?桃!?
な、ななななななな何してるんですか!?」
ヒィィいいいいいちぎ投げられるうぅぅぅぅ
「…ごめん、食べてから私も何か違うなーって思った。」
「私はアルバイトです！桃への借金を返済するために働いているのです！
宿敵ですが今日はお客様です！さぁどうですか！私のおすすめはバジルレモン味です！」
「頂くね。…美味しいね。」
「そうでしょう！そういえば桃は買い物ですか？ひき肉、缶詰め？玉ねぎ？」
「そこは引っ掛からなくていい。それにしてもシャミ子はえらいね。
正規ルートでちゃんと返そうとして。
私の見てきたまぞくは富豪に催眠を掛けたり、銀行強盗したりとあったから非行にはしらないのはえらい。」
「ぞげんこつできません!?
そんなことしたらおかーさんも良もローさんも悲しみます！
それにローさんはいつも優しく接したらその分の優しさは返ってくるものと言ってました！
というか桃は今までどんな修羅場を見てきたのですか!?」
「わ、私はただちゃんと桃に借りを返して正々堂々と勝負をしたいだけです！」
そうです！私は魔法少女の生き血をごせん像にまぶさなければいけないのです！
といっているシャミ子はタコさんウインナーを焼いている鉄板が斜めになっていることに気付いていない…そして
ズル!!!とウインナーを乗せた鉄板が地面へと真っ逆さまに。

「はわっ!?焼きたてのタコさんたちが!?」
　というシャミ子
　そこに桃色の旋風が巻き起こり目を開くとそこにはつまようじが刺さった大量のタコさんウインナーを手に持った変身した桃の姿が。
「こ、これは全てのタコさんウインナーに爪楊枝が刺さってお皿に乗ってます!?というか桃が変身してる!?」
「何とか落とさずに済んだ。火傷してない？」
「してないですけど、何故このタイミングで変身するのですか!?私にぽこぽこされても変身しなかったくせに！」
「そうだね。魔法少女時代は良い思い出がなくて出来れば変身したくなかった。
　けど、今はシャミ子の頑張りを無駄にしたくなかった。」
「桃…」
　感動しました！桃はとても優しいので
「それに今の私じゃシャミ子ぽこよりも全てのタコさんウインナー相手には変身しなくちゃいけなかった。」
　前言撤回！フシャァァァーーー
「それにしても落ちるタコさんウインナーに爪楊枝を刺してお皿に乗せるなんて芸当が出来るなんて思わなかった。
　魔法少女時代は力でのごり押しが主だったからここまで繊細な動きが出来たなんて…」
「私シャミ子のお陰でレベルアップ出来た!!」
「しまったです!?魔法少女をレベルアップさせてしまいました!?」
　こ、これでは余計倒しづらくなってしまいました
「じゃあウインナー買ってくね。」
　と桃はウインナーをいくつも買ってくれました。
「桃！」
「うん？」
「これでかったと…違いますね…」
「ありがとうございました！」

「こちらこそ。」
後に桃はこの時を思い出しシャミ子の笑顔が綺麗だからと頬っぺたを何度も触りながらシャミ子の笑顔にやられたんだよと言いシャミ子を抱きしめるのでした。
そして私はウインナーを売り続けました！
途中サングラスをしてちょび髭を蓄えたお兄さんが四袋買っていってくれたりして順調でした！
ちょび髭のお兄さん頑張れって言ってくれました！
それにおにいちゃんの手の温かさにそっくりでした！
…そう。ちょび髭のお兄さん…
物凄く心配性な医者が変装して様子を見てウインナーを購入していたとのこと。
そうして私の一日は終わりました！
杏里ちゃんのお母さんにお疲れ様と言われたのですが…
とても、盛況だったためかウインナーはなく、ヨーグルトしかありませんでした。
うぅ～～～！おのれもも～～～～～！
「これで勝ったと思うなよーーーーー！」
私はお給料をもらいとことこ家に帰りました。
その夜
「優子～今日はローさんがナポリタンを作ってくれましたよ～」
「ナポリタン！美味しそうです！」
「トラ兄ケチャップたっぷり良い？」
「勿論だ。好きなだけ掛けると良い。」
「ありがとう！」
「それにしてもどうしてナポリタン？」
「それはですね。ローさんがウインナーを四袋買ってきてくれたからです！」
「四袋？そういえば今日ちょび髭のお兄さんも四袋買っていってくれました！」
「まぁ、良いじゃないか。ほら全員分よそうぞ。」

わぁぁぁナポリタンです～具材たっぷり…？
「おにいちゃん？タコさん？」
「あぁ優子今日一杯売ってたろ。今日は記念にウインナーをタコ型にしてみた。」
「タコさん！形が綺麗だね！トラ兄！」
「ほぇ～凄いです！」
そうしてナポリタンも食べ終わり食器を洗うおにいちゃんの手伝いをします。
「…優子。今日初めて働いてどうだった？」
「はい！タコさんウインナーをいっぱい売って色んなお客さんと触れ合えてとても楽しかったです！
それに初めてお給料をもらって…自分にも出来たって自信になりました！」
「そうか…優子も成長したな。働くってのは中々大変なことだ。
お金をもらってやることやって…
今日のことは将来絶対に役に立つから忘れないようにな。」
「はい！」
「手伝ってくれたから優子にはお手伝い料として２００円贈呈しよう。」
「ありがとうおにいちゃん！」
何だかとっても良い気持ちです～～！
こうしてシャミ子は初めてのお給料２０００円とお小遣い２００円を手に入れるのであった。

シャミ子の妹へのプレゼント大作戦！

皆さん！
私はシャドウミストレス優子！
前回杏里ちゃんのお母さんの所で働きお給料を貰いました！
これで桃への借金を完済出来ます！
「そういうわけで一括で返済するので受け取るのです！
そしてこれで光と闇の貸し借りはゼロになります！
正々堂々と勝負するのです！」
「おはようシャミ子。アルバイトしてたもんね。
ウインナー今日持ってきてるけど食べる？」
「一面がウインナー弁当です!?食べたいですけど良いです！」
「そう。でもシャミ子からバイト代巻き上げるのは嫌だな。
何か自分のために買ったら？記念トロフィーとか」
「可食部のないものに散財するわけにはいきません！」
「なら生ハムの形をしたトロフィーなら？」
「な、生ハム…ジュルリ…
ハッ!?そ、その手には乗りませんよ！今回は食で騙されませんよ！
何と言ってもおかーさんとローさん共同のボンバーおにぎりを食べたのです！
お腹は既にぱんぱんなのです！」
そうシャミ子は朝トラ男に無理を言い特大のおにぎりを作ってもらい具の中身は清子が吟味して結構な直径３０センチ弱という大きなサイズだったので真ん中にしゃけ、左におかか、右に昆布と味に飽きないように工夫をしたおにぎりを食べていたのだ！
「準備万端だったか…」
「なるはやで借りを返し封印を解いてこそまぞくの第一歩を歩めるのです！」
「そっか…」
と凍らせたペットボトルを片手に少し考える桃。
「あ！さては困ってるな！」

「困ってないよ。」
「そんなこと言って仕草に出てるぞ！」
「出てないよ。」
「フッフッフ！初の優勢です！やったやった！」
　と喜ぶシャミ子の尻尾を軽く掴み凍った冷たいペットボトルをピタッと押し当てる桃。
「ふははは っ…冷た!?えっ!?な、なになに!?ちゅめた!?なにこれなにこれなにこれ!?」
「凍ったペットボトルだよ。やっぱり溶けないね。」
「すいません！調子乗りました！ごめんなざいでじだーーー!!」
　改めて話しをするシャミ子
「だ、大体全額返してもまだお小遣いは残ります！今日は放課後妹に何か買ってあげるのです！」
「…妹？」
「はい！とても可愛らしい自慢の妹です！」
「やっぱり一括返済禁止！月５０円でそれ以外受け付けません。」
「一体どうしたのですか!?」
「妹ちゃんや家族に何か買ってあげな。死の外科医への日頃の感謝でも良いし。いまならこの八切りのパンも付けるよ。」
「だから食では騙されませんよ！」
「というか桃のお弁当ざっくり系ですね！ご両親はお忙しいのですか？」
「……家族はいない。」
「えっ？」
「話しすぎた。忘れて」
　と桃のデリケートな部分に触れてしまったシャミ子。
「う、薄いパンで今回は手を打ってあげます！今回だけはなんでも聞いちゃります！」
「えっ？」
「今度からは四つ切りじゃないと言うこと聞きませんからね！」
　とシャミ子なりに桃を気遣うのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

放課後

あの後桃まで付いてきてしまい今は商店街で良を待っています。

今日は良の欲しいものを買います！

と意気込むシャミ子。

「あっ！桃、良には正体を隠してください！その…熾烈な戦いをしていると言ってしまいまして。」

「話しを大盛りにしちゃったわけか」

「な、並盛ぐらいです！」

それから暫くしてランドセルを背負った良子がやってきた。

「お姉～先来てたの？」

「荷物持ったまま来たの？」

「図書館で勉強してたの」

「良は勉強が出来ますからね～」

「お姉その人は？」

「此方は親友の千代田桃です。」

「!?」

「桃！合わせてください！」

と小声で耳打ちするシャミ子に頷く桃。

「今日は初めてのアルバイト代で良にプレゼントを買ってあげます！」

「え？良いよ。だってお姉大事な戦いしてるって。だから良は何も入らないよ。」

「そんなこと言っちゃダメだよ！何でも良いんだよ！」

「じゃあ包帯と家庭の医学…」

「大丈夫ですよ！怪我は何だかんだおにいちゃんが治してくれますから！」

「でもトラ兄がいない時に怪我したら…」

「おねーちゃん怪我しませんから！」

と良子は中々自分の欲しいものを言おうとしません。

それからも兵法書やらお徳用のひじき、心理学の本と決まりません。
そんな中で、桃は良子の視線がある場所にいっていることに気付く。
「シャミ子。良ちゃんここに来たときちょいちょいあそこ見てる。多分あれかな？」
「これは…トイカメラ？良これ欲しい？」
「いや！そのみ、見てただけ！ちっちゃくて可愛らしい…と、図書館でずっとカメラの雑誌見てて気になっただけだから。」
「めちゃくちゃ欲しいんですね！」
「で、でも高いし」
とそこに書かれていた値段は２１３８円
丁度バイト代とトラ男からもらった２００円で買えそうな金額であった。
「全然買える金額です！おねーちゃんが買っちゃります！
それでおねーちゃんの雄姿を撮ってください！」
「お姉…ありがとう～」
と嬉しさのあまり泣き出してしまう良子。
「あわわわっ!?どうして泣くのですか!?」
「だって…お姉最近無理してるとき尻尾がしなしなになるから分かりやすい。」
とへにゃりと元気のなさげな尻尾を見ながら言う良子。
「え!?そうだったんですか！」
「気付いてなかったの？
緊張してるとき、悩んでるとき、ワクワクしてる時、気が乗らないとき、元気のないとき色々あるよ。」
「あわわわっ!?」
「むっ今の尻尾はこの人どれだけ私のこと観察してるのちょっと怖いんですけど…かな？」
「どうしてそこまでわかるのですか!?」
そうしてカメラを無事に買うことが出来たシャミ子。

「桃、その…なるはやで借りは返すと言ったのですが…」
「うん。」
「今日良のあの笑顔を見れて何かしてあげられて良かったです。」
　とキラキラした目でカメラを触る良子を見て見守る二人。
「借りは時間をかけて必ず返します！なので血糖値高めにして待っているが良いです！」
「あ～わかった。」
「なんですか！その気の抜けた返事は！」
「あのお姉。最初取るならお姉と桃さん撮りたい」
「えっ!?それはその…」
　と歯切れの悪いシャミ子
「私は全然構わないよ。」
「桃!?」
「じゃあシャミ子用に手近な踏み台を探さないと。」
「本屋さんの前にありました！」
「良し！」
「良しじゃないです！そんな身長差は気にしなくて良いのです！」
　そうして二人の写真を撮る良子。
　その後現像のやり方が分からなかったが良子だが桃が確認するとどうやらＵＳＢでパソコンから印刷が出来ることが分かり良子はそんな桃へと様々なことを質問する。
「写真の色を変えたりは？」
「それはキチンとやるならペンタブが必要になるかな？簡単になら出来るけどどうせやるなら本格的に…」
　途中から何を言っているのか分からなくなったシャミ子は
「こ、これで勝ったと思うなよーーーーー！でも後で良に教えてあげてくださいーーーーー！」
　と良子を抱えてその場を去るのであった。

ーーーーーーーーーーーー
「行っちゃった…」

「桃色屋何してるんだ？」
「あ！死の外科医。さっきまでシャミ子と良子ちゃんと一緒にカメラで撮ってた。」
「カメラ？」
「カクカクシカジカ」
　とトラ男へ説明する桃
（でもこれで伝わるのってそういえばお姉ちゃんぐらいだった…）
　と気付く桃だが
「マルマルウマウマ…成る程バイトで稼いだ金で優子は良子へプレゼントを買ってそのまま帰ったと。
　桃色屋は優子のやつが心配だから一緒に付いてきたというところか。」
「おぉ！合ってる！」
「つうかやはり姉妹か…桜屋も同じ事言ってたからな。」
「姉がですか？」
「あぁ。しかもあいつ分からないとこれ見よがしにからかってきやがってな。
　見返してやろうと見聞色を鍛えて表層から何を考えているのか分かるようにはなったな。」
「…なんだか姉がすいません。」
「いやあの時は俺もむきになってたからな。あの野郎が仲裁に入るのがお決まりだったな。」
「あの野郎？」
「まぁそこは置いておく。
　それと今度時間を明けとくから放課後に屋上へ来るといい。
　そこで武装色を教える。」
「覇気…ですね。」
「あぁ魔法少女の身体はエーテル体で主に出来てるのは知っている。」
「はい。なので武装色を纏えるのかどうか少し疑問になってて」
「結論は出来る。元は普通の肉体を再構成してエーテル体にしてるのだから理論上は使える。というか桜屋が使えてたからな。」

「お姉ちゃんが!?」
「そうだ。だが使いすぎれば魔力同様身体から抜け出るから適度に休みながらでないといけない。
桜屋は魔力コントロールが群を抜いていたから何とかなったが普通ならコアになっちまうらしい。」
「それほど難しいんですね…でも姉が出来たのなら私にも会得できる可能性はある!」
「その意気だ。今日はもう遅い。早いところ帰って休むこと……桃色屋はそういや一人暮らしか。」
「そうですけど?」
とトラ男は携帯を取り出して何処かへと電話を掛ける。
「清子か。俺だ。今日は晩御飯俺の分はいらないから頼むぞ。
それと冷蔵庫に昨日の飯の残りをチャーハンにしたやつがあるから中華スープと一緒に持っていってくれ。
悪いな。」
ピッと電話を切るトラ男。
「桃色屋、迷惑じゃなきゃ飯を作ってやるがどうする?」
「良いんですか?宜しくお願いします。」
そうして急遽トラ男は桃へと夕飯を作るため千代田家へとお邪魔することになるのであった。

死の外科医は桃色魔法少女の家へと招かれる

（さて諸君。
死の外科医トラ男だ。
俺は前回、桃色屋が一人暮らしなのを思い出し家庭訪問も含めて千代田家へと来ている。
途中、卵、醤油、玉ねぎ、塩、胡椒、餃子の皮やら色々とを買い込んだ。
桜屋がいなくなり一人暮らししてるのなら自炊してると思っていたのだが…）
「いやこれは駄目だろ。」
と思わず突っ込むトラ男。何故ならそこにはカップ麺やらコンビニ弁当といったものが散乱していたからだ。
「いやご飯さえ食べれれば何でも良いし作らずそのまま食べれるから。それにあんまり食に興味はないし。」
「それでも限度があるだろ！まだ１５の少女の食生活じゃないぞ。ええいひとまず掃除だ！それとゴミの袋は何処だ！あとご飯も炊いとくぞ！」
「そこの引き出し…」
「こいつか！面倒くさい。ＲＯＯＭ！」
とＲＯＯＭを展開してそのままゴミ袋を広げてシャンブルズでどんどんゴミを分別していく。
「鍋借りるぞ！あとフライパンもだ！」
とフライパンを見るのだが
「おいおいフライパンボロボロじゃねぇか？」
「この間ちょっと失敗しちゃってそのままだから」
と穴が空きそうなフライパンを見て言う桃
「仕方ねぇ今日はこいつでやるか。」
と言いながらまな板の上でどんどん食材を切っていくトラ男。その間に食器など全て洗い早炊きにしておいた炊飯器のご飯が残り五分程で出来上がるのを確認するとボロボロのフライパンを手に取り

「ひとまず武装色でコーティングすれば何とかなるだろう。」
と武装色でフライパンを硬化させてその上にどんどん冷蔵庫に入っていたウインナー、玉ねぎ、刻んだネギを入れて卵も片手で割りそのままかき混ぜる。
ピィーと炊飯器が炊き上がりを教えてくれたのでその間に豚骨ベースのネギの入ったラーメンスープをもう一品作る。
そしてご飯を入れて炒めて溶いた卵をそのまま投入しフライパンで豪快に混ぜていく。
塩、胡椒を適量入れてチャーハンの周りに醤油を一周させるように掛けるとＲＯＯＭで更に空中で素材同士混ざるように回転させ器へとよそう。
そして油そのままになっているフライパンへ手早く餃子の皮に餡を詰めていきどんどん焼いていく。
のだが火を使わずに武装色でコーティングしたフライパンの下に絶妙にカウンターショックの電圧で焼いていく。
数分して丁度良くなったのでそのままシャンブルズで皿へと移すトラ男
そしてスープを加熱してテーブルへと持っていく。
「さぁチャーハンセット餃子付きだ。スープはチャーハンに合うように作ったから飲んでみな。」
とトラ男は自分の分も適当によそうと席に着く。
「ぼーとしてどうした？」
「あ、いや死の外科医は料理上手なんだなって。」
「まぁな清子に教わったしな。俺の作る料理より清子のやつのは旨いからな。」
「そう。いただきます。」
とレンゲを口に入れる桃。
「……はっ!?いつの間にかチャーハンがない。」
「旨そうに食ってくれて作った側も嬉しいもんだ。お代わりもあるぞ」
「いただきます。」

と無我夢中で食べていたためか気付けばすっかりなくなった皿にトラ男はお代わりをよそう。
今度は一口食べてスープを飲む。
(暖かい…ご飯が口のなかでほどけて味が無数に広がる。スープも丁度良い塩っけに食欲がどんどん沸いてくる。餃子もキャベツのしゃきしゃきと濃すぎずあっさりしてて食べやすい…)
その後も黙々と食べ続ける桃。
気付けば5合分やったチャーハンの殆どは桃の胃袋へと消えていた。トラ男も食べ終わり今は作り置きをしているところである。
「…美味しかった。ありがとう死の外科医。」
「美味しかったようで何よりだ。」
「あの…姉とはどんな形で出会ったんですか?」
「そうだな。少し長くなるから先に片付けをするぞ。」
とトラ男は食器を全て片付けて洗う。
「なぁーーーう…」
「お前は…メタ屋か。久し振りだな。」
と桃の飼い猫であり魔法少女をナビゲートするナビゲーターのメタトロンことメタ子が近寄ってきた。このメタ子普通に喋ることもあるのだがまぁそこは置いておこう。
「相変わらずのようだな。」
とトラ男はメタ子用のご飯も用意する。
「桜屋の話しをする。あとはあいつのいば」
「まだ時ではない。」
「そうか。わかった。」
とメタ子を抱き抱えてテーブルへと戻ってきたトラ男。
「さて何から話したものか。あいつとの出会いは苛烈だった。」
「苛烈?」
「挨拶代わりに大技のサクラメントキャノンぶっぱなしてきやがったからな」
「なんで!?」
「なんでも目付きが悪いから取り敢えず大人しくさせてから話し合お

うとしたらしい。」
「行き当たりばったりな姉らしい」
「んでこっちも訳も分からず攻撃してくるから応戦するしかなくてな。結局半日やりあって決着は付かず仲裁に入ったやつが話しを付けたって所だ。」
「姉と半日も戦って生き残るだけじゃなくて互角に渡り合ったんだ。」
「んでそっからやつの仕事の手伝いをしてお互い技術を教え合って俺は覇気を教え、桜屋には結界を教わった。そのお陰か魔法少女避けのすぎこしの結界の更新もしてたりするからな。」
「成る程。」
「んで十年前に会ったきり音沙汰なしというところか。」
「１０年前何があったんですか？」
「実は俺も肝心な所を知らないんだ。強大な敵と戦ったぐらいしか分からなくてな。その時の俺は体調の悪化した優子に付きっきりだったからな。」
「シャミ子何処か悪いんですか。」
「その当時は呼吸器に問題があってな。まぞくに覚醒する前なんか走るのはＮＧちょっと動くだけでも息切れ、喘息もおこし掛けたり身体が弱かったからな。」
「…は、走るのＮＧ…わ、私…シャミ子のこと結構走らせてたような…」
「医者として過度な運動は止めるが今の優子なら多少は平気だろう。」
「もしかして最初河川に来たのは」
「優子がまぞくに覚醒したからどの程度元気になったかも見たかったからな。取り越し苦労で良かったものだ。」
「シャミ子のことととても心配してるんですね。」
「まぁな。最初は清子の娘だからって理由だったがな。」
「え？」
「そうだな。これは他の奴らには絶対に言うなよ。俺はな優子の母親…清子に惚れていた。初恋でな。」

「惚気話？」
「俺はな昔からこの能力があってこいつを使いこなすために医学書を読んだりして必要だったからドイツ語も取って読んでいた。
　最初は天才だのなんだの言われたが次第にそれは恐怖の眼差しに変わった。当然だ、当時まだ六歳のガキが大人でさえ読むのが難しいものを理解してるんだ。
　そうやって俺から離れていった。だが優子の母親の清子だけは俺の面倒を見ていた。というか清子はドジだからな、何度怪我の治療をしたか。」
「シャミ子みたいにドジ？」
「まぁ遺伝だな。で、俺の能力を見ても便利だねって怖がらずに受け入れてくれてなそういったこともあってな。
　そんなある日清子が何も言わずに消えちまってな。
　俺は清子の手がかりを求めて色んな所を巡った。そうした中で魔法少女に会って襲撃されて撃退してってのを何度も繰り返すうちに警戒されてな。
　そうして数年経って漸くこの街で清子を見掛けたら知らん男と優子を抱えた清子を見掛けてな。
　遠くから見てて嫉妬もあったが何よりも清子が俺といた時じゃ出せない笑顔をしてたのを見てな。それで後日清子の旦那に決闘を挑んだ。」
「何故に決闘!?」
「気持ちの整理を付けたかったのもあるんだが清子を任せられるか、守れるのか気になってな。」
「いや死の外科医の能力なら普通の人なんて軽く」
「あぁ俺が軽く捻られた。あっちは傷らしい傷はないしこっちはズダボロに伸されたな。今思えばあのボロ負けが有ったから今があるんだろうな。」
「死の外科医を簡単にあしらうシャミ子の父親って何者？」
「んでその時の戦いの余波で桜屋に絡まれたってとこだな。」
「んでもって子供を持つ親ってのがどんだけ強いのか思い知ったな。」

「はぁ…？」
「で、清子の旦那にやられて清子に治療されてその間幼い優子を見てたんだがな
　懸命に生きようとしてるのを見てその手伝いをしたいと思ってそのまま部屋を借りて居座った。」
「居座った!?その…恥ずかしくはなかったの？ボロ負けして初恋も破れて思い人に治療されて」
「結構ぐっさり言うな。それも確かにあったさ。だけどな二十何年も生きてるとなあの時のことを思い出すが恥ずかしくはなかったさ。
　何度も何度も躓いて諦めそうになったのなんて数えきれない程だ。」
「…私も…魔法少女として本当にやっていけるのか…合ってるのか自信ないし…姉のいたこの町を守りたくてやってたけど…私じゃ駄目で…やる気もなくしてしまって…」
「なぁ桃色屋。何も躓くのは恥ずかしいことじゃないんだ。人生なんていつも躓いてるもんだ。でもな本当に恥ずかしいことは」
「立ち上がらないことなんだ。」
「立ち上がらないこと…」
「躓いても起き上がってを何度も繰り返せばいつか辿り着けると信じる。一人で駄目なら周りを頼れ。
　少なくとも桃色屋には一人頼りなくていつも転んでばかりなやつがいる。何度も挫けずに諦めないあいつが」
「…シャミ子」
　桃は今まで一人で頑張って…いや耐えてきたというべきだろう。
　自分の師匠で義理の姉が、突然いなくなり姉の背を追いかけてきた桃
「それでも自分を信じられないなら優子を信じてみろ。」
「シャミ子を？」
「あぁ、宿敵だって言いながらも何度も桃色屋に構って欲しくて背伸びしてる心優しく桃色屋を気遣い信じている優子のことを信じてみな。一人じゃ駄目でも二人なら新しいことが見えてくるだろうさ。」

「…ありがとうございます。少し前向きになれたと思います。」
「そりゃ良かった。」
「死の外科医ってもしかして凄い先生？」
「ただの保険医だ。相談あればいつでも受け付けるぞ。」
と席を立つトラ男。
「邪魔したな。食生活は今後とも気を付けるようにな。取り敢えず買っといた余ったやつでコロッケの作り置きを冷蔵庫に仕舞ってあるから残さずに食べろよ。」
そうして千代田家を後にするトラ男
「…シャミ子が懐くのも分かるな。頼りがいのあるお兄さんだね。」
「なぁーーーう。」
そうして帰宅したトラ男は夜遅い時間であるものの吉田家へと顔を少し出すことにした。
「あら、ローさん帰ってきたんですね。チャーハン美味しかったですよ」
「そりゃ良かった。」
「それと良子からローさんにって」
「これは似顔絵か？」
「はい。良く似てると思います！」
「ふ…そうだな。あとで額縁に入れて飾るとするか。」
そして寝ている良子の頭を撫でてシャミ子の様子を見て部屋へと戻り執心するトラ男であった。

シャミ子のパソコン運びミッション！　叫べ！ききかんりー！

（皆さん！３日ぶりです！
　闇の一族の末裔、シャミ子です！
　今日は放課後やることもなくあとは帰るだけだったのですが桃から古いノートパソコンとやらを借り受けることになりました！
　理由を聞いたら良のためだということです。）
「良ちゃんの写真見たけど凄いセンスがある！
　早めに操作を覚えとけば絶対将来役に立つよ。
　シャミ子グラフィックソフトと最新のＯＳ入れといたからね。」
　良を誉められるのはとても誇らしいです！
　それにしても…
「オーエス？やっぱり古いパソコンだと動かすのに喝が必要なんですか？綱引きみたいに！」
「それは掛け声のオーエスだから」
「それとシャミ子パソコンは精密機械だからボールがぶつかったり水が掛かったり転んだりしないように気を付けてね。簡単に壊れちゃうから気をつけて。」
「こ、このパソコンのお値段は…？」
「内緒…落とさないように…絶対に落とさないようにね。」
「なんか桃楽しそう!?」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
（そうしてパソコンを、運ぶ運び屋まぞくです。構内全てが敵に見えます…しかし良のために私はやり遂げるのです！）
「ちょりーーーすっ！」
「あじゃやばぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
　と杏里に、驚かされたり
「あっ！シャミ子ちゃーーん」
「杏里ちゃんの友達の小倉さ…ん」

バケツに水たっぷりもった小倉シオンが話し掛けてきたり。
「そうだ！シャミ子ちゃんこれ飲んでね。魔力がごりごりに上がる漢方だよ。」
「分かりました！分かりましたからそのバケツを遠くにやってください!!!!」
と丸薬のようなもを飲まされたりしたものの何とか学校を出るシャミ子。
「はぁ…何とか無事に出ることが出来ました。あとは車の左折巻き込みに気を付けて行けばお家に帰れます…」
しかしここでシャミ子に最大の試練が！
桃と出会うきっかけとなった吠える犬が目の前に。
…ここで問題！
1、戦う！
2、逃げる！
3、許しを乞う！
4、犬が寝るまで待つ！
戦う…そんなの犬が可哀想…でも犬って強いよね!?四本足あるし！
逃げる…急いで逃げたらパソコン落としそう。
許しを乞う。犬にそんなことやっても余計吠えられる、
犬が寝るまで待ってたら腕が痺れてパソコンを落としちゃう。
シャミ子が家に帰るためにはこの道を通らないと行けない。
（…詰んだ…
このまま吠えられてパソコン落として制服も破けて桃への借金が雪だるまのように増えていく…ゆきだるまぞくになっちゃうんだ!!!）
とシャミ子は悶えていると。突然頭に夢の中で聞いたような声が響く。
「かわいい子孫聞こえてますか？貴方の町の素敵な先祖リリスです。いま貴方の意識に直接的呼び掛けています。」
「へぇ!?ごせんぞ様!?」

「ピンチなのですね。分かります。そして今日のそなたは何故か異様に電波が良い！魔力も絶好調じゃ。
今なら行ける！叫べ！己の心の形を！」
と言われるままにシャミ子は叫ぶ！
「シャミ…シャドウミストレス優子！ききかんりフォーーーム!!!!」
と叫ぶと制服から衣装が肌が露出したものへと切り替わる。
「い、今口から勝手に…」
「ソナタの自意識に余が考えた強そうなイメージをリンクさせたのじゃ！」
「り、リテイク希望です！こんな格好恥ずかしくて町を歩けないです！あとお腹も少し冷えてます…」
「自意識過剰でないか？そんなに恥ずかしい格好でもないじゃろ。」

「そうでしょうか？」
と言った側から犬の散歩でお姉さんから二度見されてしまいました。
「あ～そっか！メソポタミアンとは感性が違うんだ～すまんすまん直しとく！」
「やっぱり二度見系のかっこうだった…」
うぅ～お腹冷えちゃうし…ヒラヒラしてるし…
と悶えるシャミ子…
その後ろでドサッという何かを落とす音がしたのでそちらを確認すると買い物をしてきたであろう袋を落として呆然としているトラ男の姿が……
「ひゃわぁーーーーーーおおおおおおにいちゃん!!!?」
（おにいちゃんに恥ずかしい格好見られた…!?）
と恥ずかしがるシャミ子
そしてトラ男はシャミ子に近寄ると
「…優子…何か嫌なことがあったのか？何か思い詰めてそんな格好に…!?すまねぇ俺が付いていながら…清子に顔向けできん…！」
と物凄く心配するトラ男。予想外の反応にシャミ子も慌てる。

「おにいちゃん!?私は正常です!こ、この格好もごせんぞが…」
「なに…? 取り敢えず帰ったらあの像、斬るか」
「あわわわわわわわおにいちゃん!ごせんぞも悪気があった訳じゃないし、感性がちょっと昔なだけなんです!」
「…仕方ないひとまず優子の優しさに感謝することだ…あとそれじゃあ腹が冷える。優子両手上げろ」
　と言われるままに万歳するシャミ子に何処からともなく出した腹巻きをすぽっと装着させるトラ男
「よし一先ずはこれで良いだろう。」
「暖かいです～おにいちゃんありがとう～」
「それで優子はそんなに大事そうにカバン抱えてどうしたんだ?」
「実は…」
　と説明するシャミ子。
「成る程。桃色屋にノーパソを借りたのか。で、壊れないように大事に持って帰っていたということか。重いなら俺が持つぞ?」
「いえ!これは私が桃から託されたものです!なので最後まで運びきります!」
「分かった。じゃあ帰るか。」
　とそのままばんだ荘へと帰る二人。
　途中で服も元通りになったので安心して玄関まで辿り着いた。
「今日は色々とありました。でも!無事にミッションコンプリート」
　と言いながらも玄関まで入り靴を脱ぐシャミ子。
「ただいっまーーーーーーー!?」
　とそのまま前につんのめてパソコンの入ったカバンが勢いよく飛び出す!
「危なっかしいな」
　と転びかけたシャミ子を後ろからトラ男が抱えることで顔面ダイブは免れた。
「おにいちゃんありがとう…ご、ごせんぞ様ご無事ですか?すいません蹴っちゃって。」
（なんかクラキューするぅ。取り敢えず大事なものを確認してはどう

だ？）
　と念話で話しをする二人。
「そ、そうですね。オーエスすれば直るかもしれない…し…」
　とパソコンを触るシャミ子。ブニョとした感触が伝わる。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー何かブニョりするーーー!?」
　と驚いた拍子にごせん像を吹き飛ばしてしまいそのままままとめていた生ゴミの袋へとダイブしてしまう。
　くちゃい…くちゃい
「わぁーーーごせんぞ様が生ゴミに!?」
「そのまま捨てちまうか。」
「おにいちゃん!?駄目です！ごせんぞは生ゴミじゃないです！」
　シャミ子その発言だと生ゴミ以外なら捨てれると勘違いしてしまうぞ？
「お姉？どうしたの？あっ！トラ兄おかえり！」
「ただいま良子。この間の似顔絵ありがとうな。」
「うん！」
　と良子を撫でるトラ男
「良…パ、パソコンがブニョってするの…」
「多分だがそいつは緩衝材だな。」
「お姉手紙落ちてるよ？」
「どれどれ…」
「シャミ子へ
　もしかしたらシャミ子は転ぶかもしれないので強力な緩衝材を特注で付けときました。
　一度落としたぐらいでは壊れないので安心してください。
　それに壊れても自分で直せるので気にしないで。」
「も、もんも～～」
「流石お姉の親友！桃さん凄い！」
　と感動するシャミ子なのだが
「ｐｓ　泣かないで！ファイト！」
　と自分の行動を予測されてしまったのでシャミ子は思わず手紙を

くしゃっとすると
「ぐぬぬぬぬ…こ、これで勝ったと思うなよーーー！」
「優子も意地になって…桃色屋は優子が関わると感情豊かになってんな。」
とトラ男はシャミ子の様子を見て感慨深く呟くのであった。
余談であるがこの間の似顔絵のお礼とトラ男はサーモンバジルチーズとＲＯＯＭ内で旨味成分の詰まった部分をスキャンで解析し脂身の乗っかった部分のサーモンを握り寿司にして吉田家へと振る舞うのでした。

桃色ドリーム　シャミ子夢へ潜る

私はシャドウミストレス優子！
私は今ごせんぞと夢の中で一緒にお話しをしてます！
「シャミ子よ！何故か半日前から魔力が絶好調の今が好機！というわけで桃の潜在意識に突撃して桃を操っちゃおうスペシャルじゃ！」
「何ですか!?その小道具は!?」
と突撃となりの夢ドリームと書かれた見たことのあるようなでかいしゃもじを担いで言うごせんぞ。
「というか桃を操るって…そんなことしなくとも正々堂々と勝負をすれば良いじゃないですか！」
「なに汚い手を使うわけではないぞ。
一族の力を使い桃の潜在意識に入り込んで起きた後についその行動をとってしまうようにするだけじゃ。」
シャミ子の頭のなかでごせんぞのイメージが浮かび上がり桃が
（おはよーございます！シャミ子様血液１０ガロンでございます！）
などと言っているのが見えた。
１０ガロンも血液抜かれたら死んでしまいます。
「桃はどう転けてもそんなことは言わないと思います！」
「何で若干むきになっとるんじゃ!?
それに寝てるときは大体の奴らは無防備になるのじゃ！
桃とてグズグズよ！」
「そうかな～」
と半信半疑なシャミ子。
「お主の魔力が万全な今がベスト！それに昼は変身もできたしのぅ」
「そういえばあれはなんだったんですか？」
「カッコよかったじゃろ？」
「ご近所と気まずくなりましたよ！
それにおにぃちゃんが物凄い心配してました！あ！」
「何じゃ？」
「ごせんぞ今度会ったときおにぃちゃんに気を付けてください。

おにいちゃん斬るって言ってました。」
「なんと!?…えぇいそんなことは後じゃ！
あの格好は身体能力も上がって逃げるのにも便利じゃ！」
「逃げるんですか…？」
とちょっと呆れてしまうシャミ子であった。
「でもそれって洗脳では？」
「気が進まんか？
余は殴り合うよりも理に叶っていると思うぞ？
それに暗示自体はすぐに解ける。」
「ごせんぞ…」
「桃に余計な怪我もさせなくてすむし、封印が解けたら借りも返せるだろう。」
「そっか直接対決を避けられるんですね！
リアルに殴り合わなければ、意味もなく走らされたり筋トレして全身筋肉痛にならなくて済むんだ！」
「苦労を掛けてすまんのぅ」
と良い笑顔で言うシャミ子に謝るごせんぞ。
そしてしゃもじのようなものを指して
「それはお主の魔力を借り受けて具現化した夢見鏡じゃ。魔力の関係上一枚半までしか用意できんかった。」
「どうして半端な数なんですか!?」
「もう半分は意識的なものを映像にして見ることしか出来んがその一枚のやつはよく見てみるのじゃ」
とシャミ子は覗くと高速で映像が代わる代わる写し出されているのが見てとれた。
「それはお主のチャンネルに近い者達の夢じゃ！そして桃の夢が見えたなら…」
「見えたなら…？」
「目押しで鏡を割るのじゃ！」
「格ゲーですか!?」
とシャミ子は言う。

どちらかと言うとスロットの狙え演出の目押しに近いと言える。
「というか数秒で百人は流れてますよ?流石にこれは無理ですよ。
灰色ばっかりです。」
「周波数が合っておらんな。
もっと桃への心の闇を募らせるのだ!
さすればボーナスタイムでフィーバーじゃ!」
「ボーナスってなに!?」
と純心なシャミ子。
そうして思い浮かべるシャミ子であったが…
「ご、ごせんぞ!闇ネタ出てきません!持ち帰り案件で週末に形にしてきては駄目ですか!?」
そうシャミ子の頭の中に思い浮かぶのは桃に助けられたことばかりな為かプラスのことしかなかったのである。
「今夜決めるのじゃ!何でも良い苦手なことなどでもじゃ」
と思い浮かべるシャミ子
それはいつもペースを握られてしまうことであった。
「き、キサマといると調子が狂うんだーー!」
バリーーーンと夢見鏡を割ったシャミ子。
バッシャーーーンと毒々しい見た目の沼のようなものに着水?していた。
「な、なにこれ!?ヘドロまみれ!ま、まさか失敗?」
「うぅぅ」
「桃!?」
と着水した時に下敷きになっていた桃らしき存在に気付く。
そうして桃を助け起こしてあることに気付く
(あれ?桃なんか小さい?それに髪も長い?)
「おねーさんだれ?」
「わ、私は通りすがりの闇のおねーさんです!
貴方の夢を見にきました!
中々個性溢れる?夢ですね!」
と話しかけるのだがうつ向いて座り込んでしまう小桃。

「えーとですね！私は封印を解きたくてですね魔法少女の血液を分けてほしいなぁって」
「それは出来ない…おねーさんまぞくなんでしょ？
　単純な血液譲渡じゃない…魔力が弱まる。
　それじゃ町を守れない…」
「桃…」
「でも私には出来なかった…お姉ちゃんが言ってた協力してくれると思う死の外科医にも会えてないし…」
「えっ!?」
（桃はおにいちゃんを探してた!?）
　と思うシャミ子なのだが先程までは浅かったヘドロがみるみる増量してきた。
「ひぃぃぃ!?ヘドロ増量!?
　小桃が泣いちゃうとこうなるんですか!?」
「泣いてない…これは目汁…」
「そこは我慢しなくて良いです！」
　更に増え続けるヘドロ
（このまま夢で溺れたら…大変なことに！それなら！）
「ききかんりーーー！」
　と戦闘フォームになるシャミ子
「取り敢えず掃除です！おにぃちゃんも言ってました！
　健全なる魂は健全なる肉体と精神に宿るって！
　なので心のお掃除です！」
「!?
!!なんで服脱ぐの？」
「脱いでないです！危機管理です！ほら手伝う！」
　と何処からともなく出てきたバケツとデッキブラシを使い掃除を始めるシャミ子。
（おにぃちゃんは言ってました！）
（シャミ子掃除っつうのは何も自分が満足するためにやるだけじゃない。
　心の洗濯もするものだと俺は思っている。だから真心を込めるん

だ。）
（って！）
　そうして暫くすると辺り一面へドロまみれだったのが綺麗になり何処かで見た覚えのある桜の木と平原のような形になった。
「ちょっと殺風景だけど綺麗になりました！
　これコーラです！
　顔色も少し良くなりましたね！」
「ありがとう…露出の高いおねーさん」
「これは一族に伝わる（らしい）由緒正しいもの？なのです！
　それにしても最近出したものしか出せないとはいえコツは掴みました！
　色々とありましたがこれでゆっくりと作業できます…」
　と振り抜くシャミ子だったのだがすでに小桃は遠くになっていた。
「あれ!?じ、時間切れ!?も、桃ーー」
　ザザザザザ
　と夢とのリンクが切れてしまった。
　そうして夢から覚めたシャミ子
「惜しかったな～でも夢の内容は覚えてる…」
（もし桃が覚えてたら…）
（この覗き魔め！まぞくさばきじゃーーーー！）
　とさばかれちゃいます!?
　しまいには
（優子…）
（おにぃちゃん!?）
（覗き魔な妹を持った記憶はないんだがな）
（こ、これはごせんぞが!?）
（明日から他人として接することにする…）
　なんておにぃちゃんに言われてしまいます!?
　か、隠し通さなきゃ
「おはようシャミ子」
「ご、ごめんなさいでじだーーー」

とタイミング良く話しかけてきた桃にシャミ子は驚く。
「さ、さばかれる…鯖のように…」
「？何のはなし？」
「あ！覚えてない…桃!?顔色が悪い…体調が悪いのでは？」
「昨日から少し風邪っぽいかな？」
という桃が持っているものを見て驚くシャミ子
「それと何だか分からないけどコーラが飲みたくなっちゃって」
と買ってきたであろうコーラを持つ桃。
（ちょっとだけ暗示成功してた!?）
「あと少し体調悪い…」
とうずくまってしまった桃。
「桃!?って熱!?」
と近くのベンチへと桃を運ぶシャミ子。
そして運良く公衆電話を発見し十円を入れる。
「あっ！もしもし！私一年Ａ組の吉田優子です！」
「ん？優子か？どうした？」
「おにいちゃんですか！実は桃が道端で体調が悪くてお休みするのと私も送っていくので遅れます！」
「おう分かった。気を付けるんだぞ」
と公衆電話を切るシャミ子。
「もしかして潜在意識の大掃除が何かしら影響を与えて…」
と心配するシャミ子
「変な夢を見たんだ。あまり覚えてないけど嫌な夢…でも最後は安心する感じの。」
「安心ですか？」
「うん、あと露出魔が出てきた気がする。」
（それは戦闘フォームです!!）
そして、そのままシャミ子は半分寝惚けている桃に肩を貸して桃宅へと向かうのであった。

時は来た！シャミ子魔法少女の自宅へ

前回までのあらすじ
桃が熱を出したので自宅まで送り届けることに。
ーーーーーーーーーーーーー
私ことシャミ子は桃を家へと送り届けるために一緒に付いてきました！
しかし桃の家は…大きくてとても驚きました!?
「ありがとう此処まできたら大丈夫…」
「なに言ってるんですかフラフラしてるじゃないですか！
心配…ゴホン　此処まで来たからには情報の一つでも盗んで帰ります！お邪魔します！」
とシャミ子は門を開けると玄関までのタイルの道のりを見て
「さては正しい手順で踏まないと小麦粉まみれの水槽に落とされる!?
電灯も怪しい…セキュリティは万全ということですか！」
「いや普通の玄関だから…何処踏んでも良いよ。」
「では白を踏みます！」
そうしてドアの前まで来たシャミ子
「ドアオートロック…暗証番号で開くから」
「は、ハイテク!?さては番号を間違えるとザリガニまみれの水槽に!?
それとも熱湯!?」
「普通のナンバーロックだから。
番号はごろごろにゃーちゃん」
「はい！……？」
「間違えた…５６５６２」
「ごろごろにゃーちゃん！覚えました！」
そうして家へと入るシャミ子。
部屋の方はキチンと片付けがしてありとても女の子らしい部屋になっている。
そうして桃をソファーへと寝かせるシャミ子は体温計を探すのだがハートフルピーチモーフィングステッキという謎の棒を見つけた

り等したものの体温計が見つからない。
「もう帰っても大丈夫だよ。」
「まだ帰りません！今日は勝てる戦です！」
　にゃ～～～～ん
「あれ？猫？」
「その子はナビゲーターのメタ子」
「ナビゲーター？」
「光の一族の使い…魔法少女の案内役だよ。」
「なんと!?」
「今もおもちゃとかで機嫌を取ると神託してくれるよ」
「そんな一発芸感覚で神託を!?」
（神託って普通もっと神聖なものじゃないのですか!?）
　とメタ子のお腹を撫でるシャミ子…その時衝撃が！
「はがぁぁ!?」
　じゃりり　じゃりり　ざりり　ざりり
　とシャミ子の尻尾の先端が気に入ったのかなめるメタ子
「なんかじゃりじゃりを感じる!?」
「うん。シャミ子の尻尾は気に入られると思ってた。」
　そうしてシャミ子はメタ子を両手で抱える
「昔は結構喋ったんだけど私がやる気を失くしちゃったし結構、年だからもう9割7分普通の猫になってるんだ…
　多分姉と知り合いだった死の外科医はメタ子が喋る所は結構見てたんじゃないかな？」
「おにいちゃんずるいな～良いな～喋ってるところ見たいな～」
　とシャミ子は普通の猫は喋らないので物珍しさから思い付いたように言ってみる。そんな簡単に喋ったら苦労は
「ーーーーー時は来た!!」

・・・・・・・・・・・・

「ウェッ!?」

な、なんと都合良く喋る所に遭遇したシャミ子!

「し、神託いただいちゃいました……まぞくなのに!」

「宅配の人や獣医さんにも言うよ。あと最近は時は来たしか言わない。年だから」

「そうなんですか…」

とシャミ子は抱えたメタ子を見ながら言う。

「ケホッ　喋りすぎた…ちょっと休む…」

「あ!ごめんなさい。さっきより辛そうです…

本当に体温計と薬の場所分からないですか?」

「あんまり病気にならないから。最後に使ったのも10年?ぐらい前に薬箱を使ったような?」

「それはもう見つけない方がいい気がします!」

「(買い換えの)時は来た」

「です!薬にも消費期限があるのです!」

「早くも仲が良いね」

とシャミ子の尻尾の動きに合わせるようにメタ子も手を振りシャ

ミ子は言い放つ。
とそんな時引き出しの所に紙が貼ってあった。
「何だろこれ？」
とシャミ子はその紙を見る。
桃色屋へ
薬箱を発見したがとても使えるような状況じゃないから処分して新しいのを買い揃えておいた。
体温計も劣化が激しいから新しく変えておいたから場所を分かりやすくするためにこの紙を貼っておく。
トラ男
・・・・・・
「おのれ！桃色魔法少女！おにぃちゃんを籠絡するとは！卑怯だぞ！」
「死の外科医ならこの前家に来てくれてご飯もご馳走になった。」
「ガーーーン!?お、おにぃちゃんが…魔法少女に取られた…」
「？死の外科医に姉の話しを聞きたかったのもあるし別にそういうんじゃないよ？」
「…ひ、ひとまず保留です。氷枕を出しましょう！」
とシャミ子は冷蔵庫を開けるとそこにはコロッケや…謎の物体が!?
「シャミ子！冷蔵庫は開けないで！」
と急に立ち上がり冷蔵庫へと向かう桃だがフラフラして冷蔵庫の前で転んでしまう。
「桃!?急にどうしちゃったんですか？」
「見ちゃったか…」
「なんですか？この謎の物体Xは？」
「…それは…ハンバーグ」
「…こ、これは…まさかさばいたまぞくの純度の高い怨念を使用した」
「普通の牛ハンバーグ！その…シャミ子と約束したから…」
「桃…」
「勢いで言ったけど約束したから…でも私いつも料理は出来合いばか

りで何度やっても上手く行かなくて…死の外科医は手際よく作ってたのに…」
「…むぅ～～」
「シャミ子？」
「続けてください！」
「それで捨てるのも勿体ないと思って冷蔵庫に…でも一口食べただけで気持ち的に一杯で…」
「それが病気の原因では？でも私のために作ってくれたのなら頂きます」
　パクっとシャミ子は食べる。
「見た目で焦りましたが味は中々いけますね！」
「そ、そう？」
「はい！外はゴリゴリ中はドロドロ、ちゃんと生の玉ねぎの味がしますね！」
「それは大丈夫なの？」
「大丈夫！本当に駄目なものなら口にいれると痺れるか喉が本能的にえづくのでそれ以外のものなら食べれます！」
「食のストライクゾーンが広いんだね。」
　注この時期はテーブルに置きっぱなしだと腐るので本当に注意してください。
「自分の駄目な所が人にバレるのを怖がっていたらいつまでたっても前に進めません！」
「そっか…シャミ子は強いんだね。死の外科医の言う通りだった…また今度味見してもらおうかな？」
「どんと来いです！」
「あと死の外科医にも」
「お、おにぃちゃんが出るまでもありません！私で充分です！」
「…シャミ子もしかして羨ましがってる？」
「そ、そんなことありません！おにぃちゃんは私のことなら何でも知ってます！身長とか体重とか！」
「…それは女の子としたどうなのかな？」

「そ、それより今度は肉の味が分かるように塩の量を減らすと良いですね！折角の牛なのに塩と玉ねぎと炭の味しか分からなかったので！」
「…やっぱり最低限上手くなってから持ってくる」
「なんで!?」
　とシャミ子の言葉に若干落ち込む桃であった。
　そして冷蔵庫を改めて良く見るシャミ子
「ハンバーグ以外食パンとウインナー…コロッケが大量に!?それにこの形はおにいちゃん特製コロッケ！」
「？どうしたのシャミ子」
「ずるいです！おにいちゃんのコロッケは絶品でカニクリームコロッケやホクホクのじゃがいもの味が広がるじゃがコロッケなんですよ！
　それに外はカリッ中はトロッとした味わい深さがあるんです！私にも分けてほしいです！」
「…それは出来ない。死の外科医が私のために作ってくれたから。食べて感想言わないと。」
「ヌヌヌヌヌ…！そ、そうだ！今度家に食べに来ませんか？おかーさんハンバーグ得意ですから教えてくれると思います！」
「…是非そうさせてもらうよ。」
　と和む桃。
「濡れタオルを作りますから寝ててください！は、早く病人から魔法少女に戻ってくれないとやりづらいからな！」
「ありがとう…シャミ子」
　とその間にシャミ子は濡れタオルを作り戻ると桃は穏やかそうに寝ていた。
「熱はあるけど呼吸は安定してきたかな？…こうして寝顔を見ると強そうには見えない…とか考えてる場合ではないです！
　こ、これで勝ったと思うなよ…何だか小声で言うと物足りない気がする。」
　と桃を起こさないように小声で言い放つシャミ子であった。

「そうだ！家にうどんとか買い置きがあったかも！消化に良いし桃も辛くないです！フフフ！まぞくうどんを大人しく食らうがいい！」
と体調の悪い桃を気遣うシャミ子
「それにしても変な体勢です。これだと肩を痛めてしまいます。」
と桃の身体の体勢を整えるシャミ子はあることに気付く。
「あれ？桃怪我してる。さっき転んだからかな？もう！今日の桃はハラハラします！」
と持っていたタオルで血が出ていた部分をごしごし拭き取り絆創膏を貼る。
そしてシャミ子は自宅へと一度戻るため桃の家を後にする。

・・・・・・
「（目覚めの）時は来た!!」
「う……急にどうしたのメタ子？」
と起き上がった桃は左手の絆創膏を見て書き置きを見る。
ご飯を取りに一度帰ります。
すぐに戻ります。
シャミ子
「……ぁ生き血…！」
「うどんと氷枕あると良いな～～」
こうしてシャミ子は気付かぬ内に色々と大切なものを手に入れたのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「心配だ…物凄い心配だ。」
「トラ男先生！どうしたんだ！」
「佐田屋か。桃色屋が体調を崩してたまたま優子が居合わせて送り届けるってな。」
「千代桃が？シャミ子も一緒に？」
「あぁ。優子は清子のドジを受け継いでるからな。ポカをやらなきゃ良いが。」
「心配なら行った方が良いと思うな！」

「あぁグ…小倉屋か。」
「それとトラ男先生！この間の黒魔術の成果の飲むと集中力がいつもの三倍になる薬が出来たから味見してね！」
「効果は良いが反面、激不味だろ。ひとまず中抜けしてくとするか。」
「トラ男先生いってら～～」
とトラ男は桃の体調を考慮して何か作るかと一度ばんだ荘へと足を運ぶことにするのであった。

決意を新たに立派なまぞくを目指せ！

前回までは！
シャミ子は体調の悪い桃を自宅へと送り届けうどんを作ろうと家へと戻った。
「ただいまぁ～ってその時間だと誰もいないか。桃にうどん作って午後登校になっちゃうかな～」
というシャミ子は何かに気付く！
「はっ！何だか悲しくも情けないオーラが!?」
そこには使わなくなったチラシの上に重石代わりに置かれていたご先像が!?
「ご、ごせんぞー!?すっかり玄関小物として馴染んでしまって…
すみません！学校には連れていきます！」
とシャミ子は忘れないように置いておいたカバンの中へとごせんぞを逆さまにしまう。
「道理で身軽だと思いました！最近対決とか忘れがちだから気を引き締めないと…うどんあるかなぁ…」
とシャミ子は当初の目的である氷枕とうどんを探す。
キィィィィィィィィィィィン　ビカァァ
とご先像が輝きだす！
「…へ？今何か光ったような？…気のせいかな？」
とシャミ子は気にせずうどんを見つけ出す。
「…遅かったか…」
「桃!?どうして此処に？」
「漸くシャミ子の家を捕捉できた…やっぱり結界が貼ってあったか。」
「結界？」
「シャミ子今日看病してくれたとき家に来ないかって聞いたでしょ。多分私が結界を突破するにはシャミ子の許可が必要だったんだ。」
「どういう？」
「これ…何に見える？」
と玄関前に貼ってある少し破れた感じの紙がある。

「デザイナーズドア？」
「これがおしゃれに見える？これは魔法少女避けの結界だよ。
光の一族が一族側がこの家の住人に関わるのを運命レベルで妨げる保護結界…多分突破するにはまぞく側の許可が必要…とても条件も複雑で高度なもので
私がシャミ子の家を捕捉できなかったように他の魔法少女から身を守るための結界だね。
何度が弾かれて体調を崩したけど怪我の巧妙だね。
……シャミ子何してるの？」
「やっぱり！まだ熱があります！ちょっと上がってきてるかもです！」
「今はそんなことよりも」
「駄目です！せめて座って話しましょう！」
と桃を家に招き入れて座らせるシャミ子
「食欲はありますか？」
「あるけどそれより」
「おうどん温かいのと冷たいうどんどっちがいいですか？」
「……冷で」
と何だか焦っている自分が馬鹿らしくなってしまい大人しくうどんを食べようと座る桃。
そうしてうどんを作り終えて桃へと振る舞うシャミ子。
「…美味しい。」
「冷凍うどんを茹でて生姜とめんつゆかけただけの簡単料理ですが」
「……めんつゆとは？」
「へ？めんつゆは醤油に出汁や甘味なんかを入れたもので」
「…出汁？」
「そこも躓きますか!?」
「そっか…シャミ子そういえばウインナー焼いてたもんね。料理は出来るんだね。」
「はってなんですか!!」
と誉められているのか分からない言葉が桃から出てくる。

「そういえば最初にシャミ子と食べたのもうどんだったっけ？それよりもさっきシャミ子…封印解いたよね？」
「へ？」
「ん？」
　どうにも話しが噛み合っていない二人。
「…寝てる時に生き血取ったよね？」
　と左手の絆創膏を見せながら言う桃。
　・・・・・・・・・
「ほわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
　と本人も完全に忘れていたようで今になって気付いた。
「今気付いたの!?」
「だ、だって桃怪我してたしそのままほっとけないと思って…ご、ごめんなさい…」
「…まぁ取られたものは仕方ない…それでシャミ子はどの封印が解けたか分かる？シャミ子の一族は長い歴史の間に色んな力を封印されたんでしょ。水滴分の血液だと解けたのも微量のものなもしれない。」
「ど、どうして桃が封印のことを!?」
「色々と杏里ちゃんが教えてくれた。家が貧乏で大変だって」
「おのれ奴は刺客か!?」
「ともかくどういう風に力が戻ったか調べた方が良いと思うよ。」
「余もそう思うぞ！」
　と二人以外の声がした。
「ククククでかしたぞ！シャドウミストレス優子よ！魔法少女の豊潤な魔力！擦りきれたタオルの味！しかと受け取った！」
「もしかしてごせんぞ!?」
「うむ！まず始めに…この逆さまな世界を正しい位置へと戻しとくれ。」
　とシャミ子はご先像を段ボールへと置く。
　そうして調べるとどうやらご先祖が現世へと口を出すことが出来

るようになったようである。
　桃としてはリリスが口うるさくなっただけと少し落ち込む。
　と、唐突に思い出すシャミ子
「あ！そういえばおにいちゃんごせんぞが喋れるようになったら説教と斬ってやるって言ってたような？」
「なぬ!?ま、不味いのじゃ!?ああいう手合いは有言実行タイプじゃ。シャミ子よ！暫く余は夢で話しかけるように…」
「話しかけるように…で？」
「ほわぁぁぁぁぁぁ!?で、でででで出たーーーーー!?」
「おにいちゃん？学校は？」
「それはこっちのセリフだ。桃色屋の見舞いに行こうとしたら二人の声がするわ途中で像から声は聞こえるわ。で入らせてもらった。」
「死の外科医…」
「あーこいつは疲れと結界から弾かれた影響だな。普通なら3日4日で治るんだが…その様子だと優子がやらかしたみたいだな。」
「や、やらかしたって…」
「桃色屋の生き血取ったんだろ？」
「うぅ～はい。」
「魔力も下がったとすると免疫も弱くなってるから一週間は安静にするべきだな。下手に動くと悪化するかもしれんな。」
「そうする…」
「優子魔法少女の生き血っつうのは魔力そのものが通ってる云わば人で言う心臓と同じ役割がある。ポンプからの魔力が滞ると死に至る危険性もある。今回は少量だったから良いが今後は気を付けるように。」
「は、はい…」
「まぁ優子はそこら辺の事はまだ知らないこともあるから仕方ない。だが…」
　ガシッと邪神像を掴むトラ男
「こっちは話しが別だ。お前さんも封印されてたのは仕方ないが昔と今の情勢は違う。長生きなのは良いが優子に間違った知識を教えよ

うものなら…」
とＲＯＯＭを展開して手元へ包丁が出現し、
シュパッ！
とご先像が真っ二つになる。
「ひょえええええええご、ごせんぞーーーー!?」
「死の外科医!?なにして…」
「ひぃぃぃぃ……？余は真っ二つになっとるが封印空間に影響がないのぅ？」
「ＲＯＯＭ内なら斬ったとしてもくっつけることも切り離すのも自由自在。空間内から出ると中々面倒くさいがそこは置いとく。
リリス屋、優子は素直な分信じやすいから騙されることがある。身近な部分でのサポートは頼むぞ。でなければ…」
「で、でなければ？」
「知り合いの黒魔術を嗜んでる奴に売り付ける。」
「にゃんと!?」
「そうならないためにも頼んだぞ？」
「わ、分かったのじゃ！」
とトラ男はごせん像を元に戻してＲＯＯＭを解除して台所に包丁を返す。
「それじゃあ私の体調が良くなったらシャミ子は更に特訓だね。」
「へっ!?」
「私の魔力が減ったから町を守るのが少し難しくなっちゃった。私の魔力を奪った分ちゃんと働いてもらうよ。」
「まぁこればかりはな。それに強くなるのは悪いことじゃないからな。」
「で、でもこれは私が正々堂々と勝ち取って……」
と自信なさげに言うシャミ子
「でも借りのある病人の寝込みを襲うなんてシャミ子はずるまぞくだったんだね。」
「それは！その…手当てのためで…」
「わざとじゃなくても減るものは減ったから…それにその制服誰の

だったっけ?あとパソコン…」
「むぐっ」
「手伝ってくれるよね?お兄さんに嫌われちゃうよ?」
「は、はい!やります、やらせてもらいます!」
「まぁ俺がいるから当分は大丈夫だろうが用心はした方が良いだろう。優子や良子は狙われる可能性があるからな。」
「私!鍛えます!ゴロゴロしたのを引っ張ったり鉄のバットを振ったり!」
「修行のイメージが古い…死の外科医もいるけど…私はこの町だけは守りたい…一応助っ人を呼んでおこう…なるべくマトモでシャミ子が喰われなさそうな子を…」
「難有りの方多いんですか!?」
「そういえば桃よ。お主体調は大丈夫なのか?弱ってるところに魔力にダメージを負って?」
「…大丈夫じゃない…かも…」
「顔が赤いし熱もあるな。一先ず送り届けるとするか」
「おにいちゃん!半分私のせいですから私も手伝います!」
「ならその荷物を持ってくれ。俺は桃色屋を背負う。」
「はい!」
とトラ男が買っていた食材のストックをシャミ子が持ちトラ男が桃を背負いそのまま桃宅へと送り届けるのであった。
そして桃宅へと着いたトラ男は桃をソファへと寝かせて消化に良いおじやを作り冷えピタを額に貼りシャミ子が桃を着替えさせる間にそのままにんじん、キャベツ、もやしをふんだんに使った野菜スープを作る。
その間シャミ子が桃宅を少し掃除する。
「…これで勝ったと思うなよ…」
「へ?何か言いました?」
「(看病の)時は来た!」
「メタ屋も食っとけ。」
トラ男はメタ子の分もご飯を用意しそのままシャミ子を学校へと

行かせるのであった。
「死の外科医は行かなくて良いの？」
「自炊も出来ん病人一人残していく程鬼じゃねぇ。学校にはさっき連絡したから心配するな。」
「…ありがとう」
「ゆっくり休め。たまには休息も必要だ。」
（死の外科医…何だかお姉ちゃんとまた違った感じ…お兄さんがいたらこんな感じだったのかな…）
　こうして桃は一週間程学校を休むのであった。
ーーーーーーーーーーーー
「ごせんぞ…これからどうなっていくのでしょうか？」
「シャミ子のやり方で焦らずに詰めていけば良い。余がこうして喋れるようになったのは快挙じゃ。礼を言うぞ！」
「はい！私がやれることを考えてみます！とりあえずおかーさんと良に報告をしないとですね。」
　こうしてシャミ子は念願であった封印の一部解除に成功するのであった。
「そういえば私の渾名ってシャミ子で決定なんでしょうか？」
「余はしっくりくるから何か合ってると思うぞ！」

貧乏とおさらば!?祝い事は家族皆で!!

ゴロゴロ…
雨が降り雷の鳴るばんだ荘
「光の一族の巫女…魔法少女との接触…そして一族の封印の一部解除!
優子よ。貴女は偉大なことを成し遂げました。」
カッ!!ゴロゴロ…ブチッ
「今宵こそ家族に伝わりし儀式の時…」
「おかーさん…まさか!あれをやるのですか!
あれは今まで負荷が掛かりすぎておにいちゃんがいなくては出来なかったのに…」
「確かに今まではローさんに負担を掛けてしまってましたが此度は違います…さぁ始めましょう。」
いかにもまぞくらしい怪しげな儀式をしようとしている吉田家の面々。
そして取り出したるは…

ホットプレートであった。
「吉田家家訓！良いことがあった時は皆で鉄板を囲むのがてっぱんです！」

「お天気が優れませんね…ちょっと残念です」
「今ちょっと停電したね…」
さて何故こんなことになっているのか
回想～～～
それはトラ男とシャミ子が桃を送り届けた後の事。
家へと帰宅していた清子に一本の電話が
「もしもし？」
「もしもし、こちら多魔警察署の者ですけれども吉田清子さんはご在宅でしょうか？」
「はい。清子は私ですが？」
「実は…ーーーー」
「!?」
そしてシャミ子が家へと帰ってくると清子が座って待っていた。
「優子…とても重要な話しがあります。」
「？どうしたんですかおかーさん？」
「帰ってきたんです…ドブに落としてしまった財布とその中に入っていた１０万８０００円が！」
「じゅっ!?」
ーーーーーーーーーー

シャミ子の頭の中で宇宙の心理が展開されていた…
「はっ!?う、宇宙のめくれた部分を見ていました…」
「これは1ヶ月四万円の呪いが解けています！」
「ホントですか!?」
「優子よ。よくぞやりました！本日はローさんも呼んで我が家に伝わりし儀式をします！」
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
と1ヶ月四万円の呪いが解けていたということで張り切って買い出しをした清子。
「粉とかつおぶしとキャベツ…今日はお好み焼きですか!?ウインナーと焼きそばもある！後は買い置きで…豚こま、長ネギ、玉ねぎ、もやし、卵、もやし、にんじん、もやし、プリン、もやし、鶏肉、鶏肉、鶏肉、もやし、きゅうり、もやし……もやしが多い？」
「ごめんなさいおかーさんいきなり高級食材行くことに腹くくれなかった。」
「それに優子のお陰で多少の封印は解けましたがまだまだ慎重にいかないと…吉田家はまだまだ能力や運は差し押さえられているのです。
フィーバーが過ぎると運命レベルでガッカリ微調整が入るかもしれません！」
「が、ガッカリ微調整!?」
とシャミ子がおののく中で…
ポキリンチョ！
と吉田家唯一のフライ返しが根本から折れてしまった。
「家で唯一のフライ返しが!?お、お好み焼き出来ますか!?」
「だ、大丈夫です！木べらで何とか…」
カタカタ
と天井裏が揺れると天井裏が少しずれてひょこっと
「ノー？」
土の精霊ノームが出てきた。
「あれ!?貴方はこの前の小人さん!?何故此処に！」
「この前お姉の言ってた小人さん？」

「あらノーちゃんどうしたの？」
「ノー」
とノームはそのまま天井裏から畳へと着地して
「ノー！」
「もしかして良いの？」
「ノ～」
と清子はフライ返しをノームに渡すと徐にノームは何処からともなく出した小さいハンマーで
トンテンカン、トンテンカン
と叩くとあら不思議！
フライ返しは元通りになっていました。
「おぉ！フライ返しが元通りに！」
「小人さん凄い！」
「ノ～」
「ありがとうノーちゃん。腕によりを掛けてお好み焼きを作りますね！」
「そういえばおかーさんは小人さんと知り合いなんですか？」
「えぇ昔にお父さんとローさんと知り合った縁で。
普段は山奥でひっそりと暮らしているのですがどうやら偶々こちらへ降りてきた時に優子の魔力とローさんのクッキーを食べたからか
恩返し風な感じで天井裏に今は住んでます。」
「そうだったんですね！そういえばノーちゃんって？」
「その子もサラちゃんと同じで精霊なのです。土を司り物作りが大好きなんです。この前の優子の靴もノーちゃんが直してくれたんですよ。」
「あ、ありがとうございました！」
「凄い…小人さん何でも直せるんだ！」
とキラキラした目でノームを見る良子。
と話せるようになったごせんぞが清子に話し掛ける。
「セイコよ。余も話しに参加しても良いか？」

「夫から聞いてましたが直接話すのは始めてですね。」
「は、はじめまして優子の妹の良子です。」
「余もお主たちのことは簡単にではあるが知っとる。」
「こんなにハッキリ声が聞こえるなんて」
「うむ。これで肉叩きやドアストッパーにされる日々ともおさらばじゃ！」
「お主がダンベル感覚でいろんな所に転がすから現代事情に詳しくなれたぞ!!」
「すみません…」
　と少し恥ずかしがる清子。
「さて余がプチ復活したからには家長としてバリバリ権勢を振るうぞ！…聞きたいことも…」
　ガッ!!
　と調子に乗ろうとしていたごせんぞに対して、清子は話しを遮るようにご先像の真横に缶を置く。
「な、なんだこれは!?」
「ご先祖さま?今目出度い席ですので一旦後にしませんか?どうですか?まずはしゅわっと一杯?」
　とお供えされたそれを飲むリリス。
「なんだこれは!?甘い炭酸か！悪くはないな！そんなことよりくぎゅっ!?」
　とご先像が仰け反る
「わぁ!?ごせんぞ!?どうしたんですか?」
「なんだこれは～せかいが～シュワついてく～まさか…毒!?でもクセになるぅ～」
「缶チューハイです。」
「ごせんぞ!?話したい事って！」
「ん～ぐにゅ～」
「ご先祖さま?」
「ポン酒風呂も用意しました。体も暖まってぜいたくですよ?」
「こきゅ!?」

「ごせんぞ～～～～!?」
と桶にいれたお酒、銘柄まぞく殺しを並々と入れてご先像をその中へと突っ込む清子。
注意！
お酒は適量で済ませましょう。
何事も程々が一番！
ご先祖リリスは何千年と生きるまぞくで特殊な訓練を受けています！
お酒の一気飲みは絶対に止めましょう！
ガチャッ！
「清子。今日は済まないな。」
「ローさん良いんですよ。いつもお世話になってますからこれぐらいはさせてください。」
「おう。それと土産で五年寝かせたっていう、まおうごろしってのが手に入ってな。」
とご先像の側に置いてしまうトラ男。
さてまぞく殺しでダウンしていたごせんぞに更に追加があるとどうなるか
「み、水！ゴクゴクゴク…ひょえぁ!?」
「ん？やべ…こいつは割って飲まねぇと度数がキツいんだが…そのままお供えになっちまったってことは…」
「あっぷあっぷ…何だか星が見える～～」
「ご先祖さま。今はパーリィタイムですので込み入った話しはご遠慮ください。ご先祖さまとは後でじっくりとお話しさせていただきます。」
と清子は良い笑顔でご先祖へと話す
「仲良く同居したいですね。大姑さん」
「うううし～つ～ら～く～え～ん…」
「清子。落ち着け。話し合いは俺も参加するぞ？」
「頼りになるわローさん。」
「あわわ…この家の新しいパワーバランス…ちょっと見えてきまし

た」
　とシャミ子と良子は清子とトラ男の姿を見てそう言うのであった。
　その後料理を手伝うシャミ子に料理を教える清子。
　誰か気になった人に料理するのかと思ったらまさかの魔法少女にとのことだったので清子は少し心配になるのであった。
「それはそうと私暫くその魔法少女と共闘することになりました！」
「まぁ優子の成長に繋がるから俺も賛成してるしな。」
「ローさんが言うなら心配なしですね！優子はそういう道を選ぶのではないかと思っていました。優しく育って、魔法少女と仲良くなって…」
「えっ？仲良くなって？いやぁ何て言うか事故ですね。」
「事故!?」
「まぁ何はともあれ切り分けましょう」
　とお好み焼きを切り分けて各々へと配る。
「いただきま～す！」
「美味しい！」
「丁度良い焼き加減だな。旨い。」
「すっごく美味しいです～頑張ってよかった～。私これからお好み焼きって思い出すだけでどんな山も越えられる気がします！」
「喜んでくれて良かったです。」
「マヨネーズもソースもかつおぶしもあっておからじゃない小麦粉の味がします～」
「その食リポはちょっと…おかーさんこれからもう少し頑張りますね。」
　そうしてお好み焼きを食べていく。
　途中良子がシャミ子の参謀をしたいと申し出たりというハプニングもあったがそれとなく進んだ。
　そして食べ終わるなかで良子はお好み焼きとジュースをご先像に御供えする。
「ごせんぞ大丈夫？」
「んぐぅ～りょうこかぁ～余のようなドアストッパーにも優しいとは

～」
と言っているとノームが新しい桶にトラ男が水を入れたものをを持ってきてご先像をそちらに移すとタオルでご先像を綺麗にする。
「ノーー！」
「おぉ小さいのよ。かたじけない。余の力が戻ったら北アメリカ大陸ぐらいは支配させようぞ。」
と言っているとノームはフライ返しを直したときのハンマーを取り出していた。
「…お主何をするつもりじゃ!?」
「ノ～～！」
トンテンカン、トンテンカン
とご先像の片方折れている角を直そうと善意からハンマーで叩くのだがその衝撃がリリス本体にまで届くので。
「あ、頭が～～くらきゅうする～～止めてくれ～頭に響くのじゃ～」
「ごせんぞーーー!?」
「ノームちょっと待て。」
とトラ男が止めには入る。
「ノー」
「きゅう～～呪いの影響なのか角はそういう仕様なのだ」
「ごせんぞ酔い止め。」
「りょうこ～～すまなんだ～余が復活したら北半球を支配させようぞ」
「え?ごめんね。領土を与える系は姉の権限にしていきたいから名目上のトップじゃダメ?」
「あれ?なんか厳しい!?ていうかお主地味にため口じゃな！シャミ子よ氷水をくれぬか?」
「はーい……あれ?おかーさん！冷蔵庫の様子が可笑しいです！ひんやりが出てません!!」
「!?冷蔵も冷凍も動いてない…大分昔の型ですし故障でしょうか?」
「さっきの停電の時ブチッて音がした。あれは冷蔵庫さんの断末魔だったのかも?」

「まさかこれがガッカリ微調整!?」
「大丈夫…おかーさん最新式の冷蔵庫欲しかったから…こ、壊れてくれて逆に嬉しいーー」
「お、おい清子!?動揺が出てるぞ！泡が大変なことに!?」
「あわわわ!?おかーさん動揺してます!?」
「いや待てよ。俺の部屋の冷蔵庫を見てくる！」
とトラ男は自分の部屋へと戻り冷蔵庫を確認してまた戻ってくる。
「家の冷蔵庫は無事だったようだ。一先ず食材はこっちに避難させれば大丈夫だ。」
「すいません。冷蔵庫が届くまでの一週間お借りしますね！冷蔵庫の買い換えでお金はなくなりましたがローさんのお陰で食いだめしなくてすみました！」
「おかーさん!?人類は食いだめ出来ません!?」
「清子すまないが入りきらない俺の買ったのを調理してくれるか？」
「どうしたんですかローさん？」
「体調崩した奴に持っていくのにな。」
「！わ、私も手伝います！」
とローの部屋の食材を抜いてから吉田家の食材を入れそのまま調理してタッパーにつめるロー。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ピーンポーン
と寝ていた桃はその音で目が覚める。
玄関にまでいくと
そこにはシャミ子がいた。
「どうしたの？こんな雨の中？中入りなよ。」
「すぐ済むので大丈夫です！敵情視察に来ました！体調はどうですか？」
「まだ熱があるけど週明けには登校できると思う。」
とシャミ子は抱えていた包みを桃へと手渡す。
「？これは…」
「桃の素敵な最新冷蔵庫をまぞくの領土として侵犯しに来ました！」

「お裾分けってこと？」
「そうとも言う！これは鶏肉のハンバーグともやしと豚肉の卵とじとお惣菜…あとはおにいちゃん特製の中辛の麻婆豆腐とタッパーに詰めたご飯です。私も一部手伝いました！冷蔵庫に入れておけば1日2日は持ちます。」
「ありがとう。普段こういうの食べないから本当に嬉しい」
　ととても良い笑顔で微笑む桃。
「んが!?…勘違いするなよ！魔法少女！この滋養溢れる食事できさまの血をじっくりと培養して奪って…その…えっと…なんか思い付かない！
　お大事にーーーー!!」
「雨気をつけて。…ありがとう。お腹空いてたから一杯食べよう。」
　こうして宿敵のお見舞いに来たシャミ子であった。

特訓開始！・トラ男は杏里へテニヌを教える。

私はシャドウミストレス優子！
闇の一族の封印を一部解除したまぞくです！
放課後に体調の良くなった桃から呼ばれました！
「シャミ子。」
「桃！体調は大丈夫ですか？」
「うん。おかげ様で…シャミ子腕上げて。」
「？何を…」
と両手を上げるシャミ子に縄をくくりつける桃。
「じゃあ修行始めよっか。」
と縄の先には巨大なタイヤがあった。
「修行⁉というかそのタイヤなに⁉」
「？これは鉱山とか重いものを運ぶトラックのタイヤ」
「そうじゃなくて！どうしてタイヤがあって私は縄にくくりつけられてるんですか⁉」
「修行のためだよ。私はシャミ子に大量の魔力を持ってかれて弱くなった。」
「成る程！」
「だから強くなってほしい。だからおっきなタイヤを用意したんだ」
とドヤ顔でいう桃。
「どうして大きなタイヤになったのか意味が分かりません⁉」
「どこから説明したものか…私がどうやってタイヤを持ち上げられるんだと思う？」
「…筋肉と気合い？」
「違います。光の一族と契約し魔法少女になる時肉体を高濃度のエーテル体になるんだ。」
「⁇」
「つまりこれは筋肉じゃなくて魔力で干渉してるんだ。」
「あれ？でも今桃は魔力が減少してるんじゃ？」
「今は多少筋肉と気合いで補ってる。」

（やっぱり殆ど筋肉なんじゃ!?）
「ここまでなるには時間が掛かるけどシャミ子には強くなってもらわないと！そうしたらお兄さ…コホン　死の外科医の負担も軽くなる。」
「貴様今おにいちゃんのことを…」
「そこは引っ掛からなくて良い。魔力は人生経験、肉体、精神、いろんな要素で上がるから先ずは手っ取り早く筋肉を付けよう！」
「ひぃ！に、逃げなきゃ!!うげっ！
　な、縄がほどけない…ふんならば～!?」
「筋肉を付けてさらに筋肉を付けてついでに筋肉を付けてお兄さんの手料理を食べてそして筋肉を付けよう。」
「こ、怖い!?た、タイヤで逃げられない～
　というかただ筋肉を付けたいだけじゃないんですか!?」
「違うよ！（好きで）しかたないんだよ！」
「やっぱり好きなんですね!?というかホントに弱くなってるんですか！」
「魔力の最大値が下がってるから大技は使えないと思う。」
「大技の概念があるんですか！詳しくうかがいたい！あ！フレッシュピーチハートシャワーは！」
「なんでそんな細かいこと覚えてるの？あれは中技」
「みたいみたい！みーせーてー！」
　と尻尾をブンブン振り回して桃に言うシャミ子。
　完全に逃げられないことを忘れている。
「恥ずかしいから見せたくない。」
「千代桃？シャミ子も何してるの？」
「杏里ちゃん！実は！」
　まぞく少女説明中ーーー
「成る程。二人は共闘することにしたんだ～」
「共闘じゃなくて休戦です！」
「それにしてもシャミ先も喋れるようになったんだ！良かったッすねー…にしては顔色が悪いような？」

「諸事情によりに二日酔いでな…前回から約1ヶ月もこの状態で放置されとるんじゃ～作者は鬼畜じゃ～」
「メタ発言禁止！」
「あだ名がシャミ先何ですか…私も呼んでみても…」
「シャミ子よ…頼むからお主だけは余のことを敬っとくれ～」
「とにかく魔力訓練で修行か～でもさ千代桃、人間は鉱山用の車両のタイヤは引っ張れないよ？」
　横でしきりに頷くシャミ子
「成る程！そうだった。あんまり重いものが持てないシャミ子の特性を理解してなかった！」
「まぁ普通の人間でもこんな大きいのは持てないかな？先ずはシャミ先ぐらいの重さでチャレンジだよ！」
　とご先像をダンベルのように持って腕を振る杏里
「うっぷ…き、ぎもちわるい～～」
「ごせんぞーーーー!?」
　と慌ててごせんぞを救出するシャミ子。
「まぁとにかくいきなりハードなものよりシャミ子にあったやつで軽めからスタートした方が良いんじゃないかな？」
「成る程！」
「あ、杏里ちゃん助かりました！わたし杏里ちゃんと友達で良かった！」
「こんなところにいたのか。」
「おにいちゃん！」
「お兄さ……死の外科医」
「トラ男先生こんちはー！」
「佐田屋も一緒だったか。…んで何でバカでかいタイヤがあるんだ？」
「カクカクシカジカ」
「桃!?そんな説明で伝わるわけ！」
「マルマルウマウマ…成る程。優子の修行をしようと張り切って鉱山用のタイヤを持ってきたは良いもののまだ優子には早かったと言う

わけだな。」
「凄ぇーーーー！トラ男先生良く分かったな！」
「お、おにいちゃん!?どどどどうして桃のあんな説明で分かるんですか!?」
「事情を話すと長くなるからまた今度な。それと覇気を鍛えるのに下地は大事だからな。平行してやっていく意味でも筋トレは必要だろう。」
「覇気？何だか格好良さそうなやつ！」
「まぁな……そういや佐田屋はテニス部だったな。」
「そうだよ！」
「フム…なら面白い技を幾つか教えてやる。」
「おぉ！必殺技！必殺技なのか！」
「決まれば流れを掴めるだろうな。何なら桃色屋と優子も見てくと良い。何かしら掴めるかもしれないしな。」
とテニスコートに全員が集まる。
どうやらまだ部員も集まっていないようなので騒ぎにならない内に杏理に技を教えようとする。
「さてまずは打ってこい。」
「よっしゃ行くぜー！」
パァンと早速始まりラリーが続く。

そうしてトラ男が高くボールを上げる。
「よぉし！いっただきぃ！」
とジャンプしスマッシュを放つ。
「うん。ブレが少なくてバランスがいい…体感が確りしてるね。」
「杏里ちゃんのスマッシュです！」
がトラ男は後ろ向きから遠心力を利用するようにスマッシュをラケットの面に当てて杏里の上空へとロブを打ち上げ得点となる。
「トラ男先生！今の何！何！あたしのスマッシュ無効化してスッゲェ！」
「今のは三種の返し球（トリプルカウンター）の一つヒグマ落とし。相

手のスマッシュに対して遠心力を用いることによりスマッシュを打った直後の相手の上を抜いてベースラインに落とす技だな。
覚えればスマッシュを打たせる前提のテニスを組み立てられもするし相手の渾身の決め球を返して戦意を落とすことも出来るだろう。」
「成る程！」
「もう一つ教える。三種の返し球、つばめ返し実際にやってみせる。」
とまたラリーを再開させる。
さして杏里のキレの良いトップスピンの聞いたボールを打つとそれをスライスショットで返すトラ男。
そのボールはコートに落ちた後弾まずに決まる。
「球が弾まなかった!?」
「今のはトップスピンの効いた球に対してスライス回転で強烈なスピンを掛けたことによりボールが弾まなかったんだ。
相手のトップスピンを利用することでより強力な球で返せるから相手の意表を付けるな。」
「おにいちゃん凄いです！」
「うん。それに技術も相当だよ。」
「今はこれぐらいか。あんまり技に執着して他を疎かにするのも良くないからな。」
「ありがとう！トラ男先生！」
「よしシャミ子私たちも負けてられない！筋トレするよ！」
と桃はシャミ子を伴いタイヤのところまで戻る。
「じゃあ俺も戻るとするか」
と言った中で唐突に
「ここであったが百年目！超級まぞく！あたしの願いのためにーー!!」
と過激派の魔法少女がトラ男を襲撃しようと刀を振りかぶる。
「はぁぁ…ったく面倒な…」
とトラ男は武装色でボールを硬化させラケットを一閃する。
「デュークホームラン!!!!!」

ボールはまるで光るかのように魔法少女へと吸い込まれ物凄い勢いで吹き飛ばされる。
本来のデュークホームランでさえ相手を戦闘不能にする威力が武装色で更に威力を底上げされているので飛ばされている最中にコアへと戻ってしまう。
そして何事もなかったようにトラ男はラケットを返し本来の業務へと戻るのであった。
因みにコアになった名も知らぬ魔法少女は仲間の魔法少女に抱えられて桜ヶ丘を去り二度とこの地へ足を運ぶことはなかったと言う。
そしてシャミ子たちは戻った先で桃が怖いものと薄皮いちご大福というたまさくら商店街の一軒だけある和菓子屋で売っているものが怖いと言いシャミ子はダッシュで買いに行った。
そして桃はただ待つのも昼に残していたトラ男特製の焼おにぎりを食す。
「ハム…冷めても美味しい。」
「桃よ、何を食べておるのじゃ？」
「焼おにぎり…お兄さんが作ってくれたやつ。…リリスさんもどうですか？」
「おぉかたじけない…なんと!?醤油の香ばしさと冷えていながらも食欲をそそる味わい、旨いのぅ」
「うん…それに…あったかい…」
「成る程のぅ」
とリリスは豊富な人生経験より桃の言った意味を理解しそこから言葉にするのも不粋と無言で眺めるのであった。
そして戻ってきたシャミ子が買ってきたいちご大福を二人で食べ合う。
「桃騙したんですね！」
「ううん。ここの饅頭を見ると昔を思い出すんだ…姉が凄い好きだったんだ。」
「おねーさんがいるんですか？」
「うん。血は繋がってないんだけどね…とても大切で…シャミ子が頑

張ってくれてるから私ももう少し昔と向き合ってみるよ…」
「桃…」
「さて取り敢えず筋トレだね！」
「今までの穏やかムードはどこに!?」
「はいシャミ子今日はタイヤを動かせるまで頑張ろうね。あっ！門限とかある？電話持ってる？」
　と桃に言われるままに筋トレする羽目になってしまうシャミ子
「ほげぇぇぇ桃の鬼ーー！まぞくよりもまぞくらしい！筋トレ魔法少女ーーーー！」
「タイヤ動かせるように頑張って！にじゅしーち…にじゅはーち」
　と自信もバーベルを持ってスクワットをする桃。
「こ、これで勝ったと思うなよーー！」
　頑張れシャミ子!!
　心と身体を鍛えて怖いものを克服するんだ！

シャミ子の1日たまさくらちゃん体験！

皆さんこんにちは！
私は闇の女帝シャドウミストレス優子！
最近私は闇の一族として覚醒し宿敵の桃色魔法少女との辛く険しい修行に耐える毎日を送っています！
しかし特訓が終わったときは甘いお饅頭やお団子といった甘いものを食べさせてくれるので頑張りがいがあります！
そして私は杏里ちゃんの誘いで商工会の手伝いに来ています…
なんでもキグルミの中の人をやってほしいとのことです！
杏里ちゃんの頼みです！
全力でやってやるですよ！
…ただ……ちっこい人にしか務まらないのは余計です…
「たまさくらちゃんっていうこの町の桜の木から生まれた妖精さんなんだ！」
「すごいファンシーです！」
「それでね特技がバク宙アツアツおでんで持ってる茶碗からは中毒性の高い飴をたくさん出すことが出来て子供たちを洗脳して商店街の従順な下僕に…」
「わ、私やっぱり帰ります!!!」
「報酬ははずむからお願い！」
何ですか!?どうしてそんなに設定の渋滞が起きてるんですか!?
ーーーーーーーーーーーー
（結局杏里ちゃんに押されるままにやることになってしまいました。）
「動きが少なくても結構キツイ仕事だから2．３０分に一回は水分補給してね。私は物販を手伝ってるからね～」
（それにしても案外重いです…それにじりじりと暑い…しかし一度引き受けたからには必ず成功させます！）
「あっ！たまさくらちゃんだ！」
「あくしゅして～」
と子供たちが集まってきました。

「バク宙みたい！」
「いつものやたら美味しいあめちょうだい！」
（い、意外に認知されてる!?）
「ヌンチャクの扱いが上手いってほんとー？」
「忍者刀つかった壁登りみたい！」
「あめ…おいしいあめ」
（設定の味付けが濃い！）
「今日はバク宙からのあつあつおでんやらないの？」
（普段のたまさくらちゃんはやってるんですか!?あわあわ…こ、子供たちに人気なのは嬉しいけど…あめ配ってチラシ配って…チラシ配って…こ、混乱します～）
　とシャミ子は噴水の所に足を引っ掛けてしまう…
「はわぁ!?」
　チラシを持っていたため受け身を取れずに転んでしまうかと思われたが
「危ない！」
　とたまさくらちゃんキグルミを着たシャミ子を誰かが受け止めてくれたようである。

「大丈夫かしら？いきなり倒れそうになるからびっくりしちゃったわ。」
「え？だ、誰ですか？」
「ほらほらねこさん困ってるでしょう。いい子は順番に並んで。」
「ま、前が見えない…」
　とあたふたするシャミ子。
「大丈夫？頭がずれちゃってるから直すの手伝ってあげる。」
「あ、ありがとうございま……」
　ぐいっと頭を直すとそこには…最近仲良くなった桃の変身した姿のような少女がいた。
「見えるようになった？」
（はわわわ…見えてはいけない系の服が見えてます!?ま、まさか…ま

さか！この格好は…）
「ねぇそれ地図付いてるかしら？」
「は、はひっ！」
「ここに行きたいんだけどどう行けばいいかしら？」
「ここは……ちょうどこの広場です…」
「あ、そうなんだ！昔と大分変わってて分からなかったわ」
そしてシャミ子は違ってて欲しいと思いつつ聞いてみる。
「あの…コスプレぶらり旅ですか？」
「ん～ん通りすがりの魔法少女。」
あわわわわわわわわわわわわわわ
「…大丈夫？どこかぶつけた？」
（あえて言うなら今一番ぶつかりたくない存在にぶつかっています！
た、たすけておにいちゃん～～～～）
バイト中に桃以外の魔法少女に遭遇してしまったシャミ子！
果たしてどうなる!?
一方のトラ男
「成る程…茄子が安いな…ならば麻婆茄子にするか…茄子とひき肉とにんじん…でいいな」
とシャミ子のピンチを知らず呑気に買い物をしているトラ男。
因みにこの後帰った後に吉田家にて作ってると苦手なピーマンを投入する清子の姿があることは想像するに容易い。
「あれ？…お兄さ…死の外科医？」
その声に振り返るとそこには
「桃色屋か…それと言いやすいほうで良いんだぞ。」
「じゃあお兄さんで、買い物？」
「そうだ。桃色屋は…たまさくらちゃんグッズの買い巡りか？」
「そう。新しいシークレットたまさくらちゃんステッカーと缶バッチを探してるところ。」
「たまさくら？…あぁあのやたらと設定が盛られている猫か。」
「そう。シークレットたまさくらちゃんステッカーが今日限りの発売だから逃さないようにしてる！」

「ふむ…俺も買い物は一通り終わったから付き添うぞ。」
「ありがとうお兄さん。」
そうして桃とトラ男は歩きだしてステッカーの売場と缶バッチの売ってる場所へと向かう。
お店に着くとガチャガチャが立ち並びステッカー及び缶バッチが景品として置いてあった。
「これは…中々骨がおれそう…でも諦めない！」
「ほう。今時のガチャガチャはステッカーまでやってるのか…珍しいな。」
とトラ男が店内の様々なガチャガチャを見ている間に桃はこれでもかとガチャガチャを回す。
肉に埋め込まれたたまさくらちゃん、小さいぬいぐるみ、おでんを食べるたまさくらちゃん、側転たまさくらちゃん、
引いても引いてもお目当ての物が出てこない。
「ふっふっふ…今日も来てるな…悪いがそのガチャガチャにはステッカーと缶バッチは入ってないのさ…他のガチャガチャに適当に入れさせたから俺もどこに入ってるのかは分からん。
今日もお金を落としていくが良い…！」
と覗いている店長らしき男。
いつも出るまで回している桃を知っているので表示しているガチャに入れず他のガチャに入れてるようだ。
思いっきり詐欺である。
そんな思惑が渦巻いているもののトラ男が桃の様子を見に戻ってくる。
「…お兄さん…全然当たらない…たまさくらちゃんに嫌われてるのかな…？」
「桃色屋…落ち込むな。代わりにさっき適当にやったガチャから出てきたこいつをやる。」
とトラ男は桃に渡したのは…なんとシークレットたまさくらちゃんステッカーと缶バッチであった!?
「えっ!?ど、どうしてお兄さんが???」

「来ただけっつうのも悪いから二回、回したら出てきてな。それにそいつらは桃色屋の元にいきたそうにしてたからな。」
「お兄さん！ありがとうございます！」
と桃はトラ男の手を持ちブンブンと上下に降る。
筋トレばかりしている物理特化魔法少女によるそれを何とか武装色にて防御することにより事なきを得たトラ男であった。
「…あ！そういえば待ち合わせしてるんだった！」
「以前言った応援か？」
「そう、久し振りにこっちに帰ってくるって言ってたから…そろそろいかないと。そうだ！お兄さんさっき買ったこのお面をどうぞ。」
と桃は個性的なお面を渡す。
「一応俺も行っておくとするか」
とトラ男も同行することにした。
とその前に
「そこの店主。」
「はひっ!?」
と冷や汗だらだらと流している店主にトラ男は話し掛ける。
「今回は見逃すが次にこういうことをしたら……」
「し、したら？」
「社会的に抹殺する。好きなものを楽しむそんな純粋な気持ちを利用するのだけは止めておくことだ。」
「は、はい!!」
こうしてトラ男は桃と共に待ち合わせ場所へと向かうのであった。
後日このお店に顔を出した桃に限定品の詰まったたまさくらちゃんグッズを搭載したガチャを出したりし桃は喜ぶのであった。

柑橘系魔法少女との遭遇、お面は御免だ!?

前回新たな魔法少女と遭遇してしまったシャミ子
果たしてどうなる!?
私シャドウミストレス優子はピンチに陥ってます!
何故なら目の前に魔法少女が現れたからです。
桃から穏健派は大丈夫らしいけど他のに捕まればグツグツ煮込まれてまぞくの出汁をつかったスープにされてしまうとのこと。
ま、まずは話しを聞かないと…
「何故そのような格好でこちらに?観光…ですよね?」
と観光でもそんな格好はしないと思うがシャミ子は聞いてみる。
「違うわ。今ちょっと警戒モードなのよ。なんでもこの町の魔法少女がまぞくと抗争を起こしちゃったみたいなのよ。」
「は、はい…」
(抗争というか私が桃から生き血を取ってしまったのが原因というか)
「大変なバトルの末にボコボコにされて魔力を奪われてそのまぞくの配下にくだったそうよ」
(なにそれ!?そんな話し知らない!!?)
「ネコさんどうしたの?何か心当たりあるわけ?」
「えっ!?えっとないですけど、そ、その情報主は多分とんでもないざっくり系です!」
「流石にこの町の魔法少女がそんなやられ方するとは思えなくてね。」
「わ、私もそう思います!確実に誤報です!」
「だからそれらしいまぞくをみつけたら挨拶代わりに数発しばいて様子見よっかなって。」
「しばく……」
まぞく辞典
しばく
①棒や鞭で殴ること。あるいは殴ったり蹴ったりすること。
例　まぞくをしばきたい

②関西弁で飲んだり食べたりすること
姉ちゃん茶しばかへん？
その言葉に着ているキグルミから汗が出ているような、とても震えるシャミ子
「あなた何か様子おかしくない？」
「いえ…」
（こ、このキグルミ脱いだらちぎ投げコース!!!）
そうして配り終えたシャミ子であったのだが
（配り終わったけど帰れない…何故ならちぎ投げガールがずっと付いてくるから…）
「ねぇさっきから挙動が可笑しくない？取り敢えずキグルミ脱いでみて」
（怪しまれてる!?）
「た、たまさくらはキグルミじゃないたま！」
「急にキャラを仕上げてくるわね…!?でもいろんな所から汗が出てるし」
「こ、これは汗じゃなくて新鮮なたま汁たま!!」
とシャミ子は冷や汗だらだらで凌ごうと必死に言う。
「やっぱり貴方何か変よ？声も最初より震えてるしちょっと裏まで行きましょう！」
「だ、大丈夫…」
「良いからほら早く！」
（状況悪化!?）
ぐいっと強い力で引っ張られ裏地に引き込まれるシャミ子
「はら早く脱いで」
「ぬ、脱げません！」
「脱ぎづらいなら手伝うから！」
「脱げません!!」
「脱いで」
「脱ぎません!!」
「…いいから早よ脱げ！道中でこんな会話してたら色々誤解を招くで

しょうが!!」
「ひやぁぁぁぁぁ!?」
スポーンとたまさくらちゃんキグルミの頭を取られてしまうシャミ子。
「え？つの……？」
ブルブルと震えるシャミ子
「し、しばかれる…しばかれるぅぅぅ～～」
「き、き…危機管理ーーー!!!!」
とたまさくらちゃんキグルミを着たまま叫ぶシャミ子
端から見たらネコのキグルミが可愛く両手を挙げている姿である。
そうしてその勢いのままにシャミ子は危機管理フォームへと変身出来た。
「貴女…その格好…っていうかまぞく？…えっ？」

「はっ!?」
(咄嗟に変身できてしまった…もしかして桃との修行の成果？で、でもでもここからの引き出しがゼロです…)
「あの…私の言い方も悪かったかしらね…
その…熱中症かと思ってそうだったら脱水症状とか結構命に関わるからキツメに言っちゃったけど
…そういう脱衣は求めてなかったわ…
なにがなんだか分からないけどその格好は冷えるわ。
その…街中でゴメン。」
(羽織るものを施された!?)
とその魔法少女から羽織るものを手渡されたシャミ子。
「グスン…し、しばかないんですか…？」
「こんな弱そうな子しばかないわよ!?戻り方分からない系？」
「わからない系です…」
「取り敢えずリラックスしてえっと軽くメンタルを脱力させる感じで、それとこれも飲んで落ち着いて。」
とみかんジュースを手渡されるシャミ子

「何してるの？シャミ子に…ミカン？」
「優子バイトじゃなかったか？それに…柑橘屋か？」
「知り合いですか…？」
「あっ！桃！来てあげたわよ！地面に頭がめり込むぐらい感謝なさい！」
「知り合いだけど…街中で脱がしてる変態さんは知り合いなのか…通報しようか迷ってた。どういうこと？」
「ご、誤解よ！」
「優子大丈夫か？」
「おにいちゃんーーー!!怖かったで……」
とシャミ子はトラ男に抱きつくのだが…固まる…
何故ならトラ男は先ほど桃からもらった…
赤い般若のお面をしていたからである。
しかも妙に迫力があり口もちょっと笑っているようで安心したところにボディブローが入ったようなものである。
なので…
「お、おにいちゃんが鬼に食べられたーーーーー!?キュウ」
と魔法少女に遭遇し神経をすり減らしてたところに容赦ない追撃を受けたためシャミ子気絶してしまうのであった。
「優子!?ど、どうしたんだ!?」
「あ、お兄さんさっきのお面付けっぱなし。」
「ひぃ!?は、般若!?桃貴女…ま、まさかこんな怖いのと戦ったの!?」
とお面を外したトラ男はシャミ子を診る
「って先生！先生もいたのね！」
「あれ？ミカンお兄さん知ってたの？」
「そりゃそうよ。私のカウンセラーしてたしなんなら勉強も見てもらってたわ！
ここ数年はメールでのやり取りだけだったけど
…というかさっきその子お兄ちゃんって…もしかして先生の妹さん!?」
「みたいなもんだ。取り敢えず何処かで休ませるか」

「あれ？トラ男先生？とシャミ子!?」
「佐田屋か。」
「シャミ子来てなくって探してたら…千代桃と…だれ？」
「桃色屋の知り合いだ。控え室借りれるか？」
「大丈夫！」
とシャミ子を控え室へと運ぶトラ男たち。
ーーーーーーーーーーーーーー
そうして数十分して
「…あれ？私は…確か魔法少女っぽいまぞくしばきの人がいておにぃちゃんが鬼に食べられて鬼からおにぃちゃんの声が聞こえて
…あれ？あれれ？これは夢!?」
「シャミ子目が覚めたんだね。」
「桃！」
「御免なさいね。何だか変に緊張させちゃってたのね。気分はどう？」
「はっ!?まぞくしばき魔法少女！」
「違うよ。この子は陽夏木ミカン。私が助っ人を頼んだ魔法少女。」
「というか桃！貴女説明ざっくりしすぎなのよ！
貴女を待ってる間に複雑なことになってたのよ！
それと既読無視するな！」
とＬ○ＮＥのメッセージを見せる。
まぞくに魔力を取られた、たすけて欲しい、結界を限定的に解除してまぞくを補足できるようにしたことが書いてあった。
そして最後に送ったミカンのメッセージには既読が付いてなかった。
「私てっきり心をなくしたバフォメットみたいな見た目のやつが彷徨いてると思ってたのよ！こんなに可愛い娘なんて聞いてないわよ、もう！」
「ごめん。」
「なんなら結構緊張してたわ、お守りとか買っちゃったしそれにお土

産よ！・今日泊めて！」
「布団ない…」
「先言え！」
（結構いい人なのかな？そういえばお兄ちゃんは？）
「目が覚めたようだな。」
「お兄さん。」
　とこれまた控え室へと入ってきた般若のお面をしたトラ男。
「ももももも、桃ーーー!?お、おおお鬼ですぅぅぅ」
「優子落ち着け。俺だ。」
「鬼の知り合いに俺って人はいないですぅーーー」
「先生またお面してるわよ？」
「あぁしまった。これでいいか。」
　とお面を外して後ろへと装着するトラ男。
「お、おにいちゃん!?それはなんですか!?」
「桃色屋からもらってな。中々リアリティがあって良いもんだろ？」
「物凄く怖いですぅ！」
「先生妹さん怖がらせちゃダメよ。」
「おにいちゃんの知り合いなんですか？」
「あぁ。魔法少女としての活動名はシトラスレディであらゆるものに柑橘系のものを掛けてしまう妖怪柑橘オバケの異名を持っている。」
「先生!?なんですかその異名！私初めて聞いたわ！」
「そりゃあ俺も今思い付いたのを言っただけだからな。」
「でも大体あってる。それにしてもさっきのシャミ子の格好もよく分かんないけど水分はちゃんと取らないとダメだよ。」
「ごめんなさいでした…」
「桃それは私も悪いのよ。魔法少女がまぞくを襲うなんてここ以外なら結構日常茶飯事だもん。まだ小さいのに怖がらせてごめんね。」
「はい……え？」
「私桃と同い年だからバリバリ頼りなさい！
　それに大恩ある先生の妹さんだもの！力になるわ！
　年いくつ？

中学上がったぐらい？」
「……」
「こ、これで勝ったと思うなよーーーーーー!!!!」
と控え室から出ていってしまうシャミ子
「柑橘屋…優子も同い年だぞ。」
「えっ!?そ、そうなの!?ご、ごめーーん！」
頑張れシャミ子。
仲間を増やして立派なまぞくを目指すのだ。

尚この夜清子に般若お面を見せたところ可愛いとの感想をもらい良子からはカッコいいと言われたまに般若お面をしてはシャミ子に叫ばれるようになるトラ男であった。

ハッピーバースデーシャミ子！シャミ子の生まれた日

今日は９月２８日
シャドウミストレス優子…吉田優子の生まれた日である。
今日は朝から気合いが入っていたようである人物…
死の外科医トラファルガーローことトラ男はケーキを一から作るために材料を集めに各地を巡っていた。
それとは別に桃はシャミ子の誕生日ということで何か贈り物を考えていた。
「ミカン…シャミ子に渡す誕生日プレゼント何がいいかな？」
「それは貴女が考えないといけないものよ。私が考えたもので買ったらダメでしょう？」
「むぅ…どうしようか。」
「あっ！桃これだけは言っとくわ。ダンベルとか健康器具は止めときなさい。」
「…駄目なの？」
「駄目に決まってるでしょ！シャミ子だって可愛い物好きな女の子なのよ！
それをダンベルなんて普通の女子高生が持つ可能性の少ない物を買ってどうするの！」
「成る程…因みにミカンは？」
「私？私はネックレスとバスソープよ。」
「…ちょっと考えてくる…」
「時だぞ！」
「夜は吉田家でパーティーだから早く帰るのよ。」
とミカンは桃を送り出した。
一方のトラ男はとある私有地の霊験あらたかな泉にて水を汲んでいた。
定期的に取りに来てはその霊水に秘められた神秘的な力を貯めて

いる。
　すると
「今日も来ていたのですね。」
「あぁ。日課になっちまっててな。俺の能力で霊水の力を食物に宿して優子の健康を保つ目的で最初来てたが最近はお前さんとの会話を楽しみにしてるのもあるな。」
「お世辞が上手くなりましたね。
　最初あったときは主たる桜に暴言を吐く問題児で生意気でしたのに…
　人の時というものは早いものですね。」
「…あれから十数年か。」
「えぇ初めここへ来た時はどんな泥棒かと思えば貴方がいて貴方の熱心な言葉と態度を見てここを使用する許可を出しました。
　桜と貴方は似ている。不器用な所もそう。
　お人好しな所も…人助けを他人を思いやる気持ちも…」
「俺はあそこまで無鉄砲じゃないぞ。」
「良く言いますね。貴方も時折無茶をしてはその都度怒られていたではありませんか。」
「あれはバカ桜のやつが…本人がいねぇのに言ったってしょうがないか。」
「早く戻らなくて良いのですか？
　…誕生日なのでしょう？」
「あぁ。じゃあな。ウインディーネまた来る。」
「えぇそれではお気を付けて。」
　とトラ男は水の精霊ウィンディーネに挨拶しばんだ荘へと戻るのであった。

ーーーーーーーーーーーーー
　桃サイド
（シャミ子何が良いかな？
　消耗品…は形が残らないし…

そういえば調理器具とか…駄目だ…
ナンとかの杖で変身できそうだから却下…何が良いのかな…
私…シャミ子から貰ってばかりだ…
昔はこんなに誰かに興味を持ったり…心がざわついたり…ご飯が美味しかったり…景色が色付いて見えたりしてなかった…
全部シャミ子に出会ってから…）
「…そうだ…花とかどうだろう…でもすぐに枯れちゃうし…」
「それなら造花にすれば長持ちするし送ったものが壊れなければずっとそのままだから良いんじゃないかな！」
「…小倉…いつも神出鬼没だけど丁度良かった。造花を売ってる場所は」
「こっちにあるよ！それとシャミ子ちゃんも今の時間商店街にいるからプレゼントを内緒にするなら私が持ってくよ！」
「それはありがたい！」
「お礼は今度魔法少女の戦闘記録とシャミ子ちゃんの髪の毛数本で良いよ！まぞくに効く新しい物を作るためによろしくね！」
「……仕方ないか…」
と桃は数種類の造花を買い小倉へ一度手渡し帰路へと付く。
そこへ
「桃！奇遇ですね！」
とシャミ子に出会う。
（危なかった！小倉に渡してなかったらサプライズにならなかった…）
「シャミ子どうしたの？」
「今日は家で誕生日会じゃないですか…その…主役は遅れて登場ということで家を追い出されました。」
「成る程。」
「桃はどうして？」
「野暮用…でも終わったからこれから帰るところ。」
「…少し話しませんか？」
「？」

とシャミ子は桃といつもの川原へと行き座る。
「私…凄い嬉しいんです。今までずっと病院とか…お家でおかーさんや良、おにぃちゃんにしか祝われてなかったんです…」
「シャミ子…」
「私一時期…このまま迷惑を掛けるならいっそのことって言っちゃったことがあるんです…」
「えっ!?」
「その時はおかーさんやおにぃちゃんに迷惑ばっかり掛けてて病院のお金だってバカにならないし…特におにぃちゃんは自分の時間を削ってまで私の看病をしてくれて…
何も出来ないのが辛かったんです…」
「……」
「でもおにぃちゃん私に言ってくれたんです。迷惑を掛けるのなんて子供の特権だ…それに俺は優子の健康を守りたいんだ。
自分の時間を削ってでも俺のしたいことだ。
だから気にすることはないって。」
「流石お兄さんだね。」
「それとおにぃちゃん私から色んな物をもらったって言ってました!」
「そっか…そうだね。シャミ子は貰われまぞくだもんね。」
「貰われまぞくとはなんだ!」
「気にしなくて良いよ。」
「全く桃は…」
そうして話している内に夕方になっているのに気付き吉田家へと帰宅するのであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「ねぇ先生…」
「なんだ柑橘屋。」
「これ…大きすぎないかしら?」
「いつものことだ。それに食いきれなければ知り合いに渡しに行くだけだ。」

とトラ男はケーキを見ながら言う。
そう直径2メートル、高さ1．5メートルを越えている。
作る過程でトラ男はＲＯＯＭを使いその中で薄力粉はふるっておく。
無塩バターは湯せんにかけて溶かす。
ケーキ型にオーブンシートを敷いておく。
ボウルに卵を割り入れ、グラニュー糖、はちみつを加え、湯せんにあてながらハンドミキサー（又は泡立て器）で泡立る。
この時良くかき混ぜるようにシャンブルズで混ぜ合わせる。
人肌まで温まったら湯せんからはずし、更に筋が残るくらいまで泡立て、薄力粉を加えてゴムベラで混ぜ、粉気が少し残る位で無塩バターを加えてよく混ぜ合わせる。
この工程はタクトを使い道具を複数操りながら進めていく。
生地を型に流し、１８０度に予熱したオーブンで３０～３５分焼く。
のだがガンマナイフの電圧のみで綺麗に焼いていく。
焼けたらクーラーに逆さまにしておき、粗熱をとる。
生クリームに粉砂糖を加えて泡立てる。いちごはデコレーション用を粒のまま8個残し、残りは半分に切る。
スポンジを縦、横に七等分するのにラジオナイフにて綺麗に切断しそこへ果物であらかじめ作った物を挟み込んでいく。
蜜柑、キュウイ、ブルーベリー、イチゴ、メロン、抹茶、甘栗
ラジオナイフの効果がきれて綺麗にくっつく。
その後に全体にホイップクリームをぬる。トップはお好みの口金でホイップクリームを絞り、いちごを飾る。
最後に霊験あらたかな霊水の神秘的な性質をケーキへと移植し完成！
「ローさん、そろそろパーティーオムレツ出しますよ。人数分のお皿をお願いします。」
「任せとけ。」

とトラ男は空の皿をミカン、小倉、桃、杏里の分も追加して清子の持つオムレツとどんどん入れ替えていく。
そしてシャミ子、桃も帰ってきて
「皆さん今日は優子のために集まって頂きありがとうございます！
それでは乾杯！」
と大人組（トラ男、清子、リリス）はお酒、他の者たちにはジュースを配る。
「ん～やっぱりおかーさんのオムレツは美味しいです！」
「お姉誕生日おめでとう！これへアピンと後、小倉さんに作ってもらった角の光沢を保つためのワックスと保湿液！」
「良…ありがとう！」
ギュムと良子を、抱きしめるシャミ子。
それから全員にプレゼントを渡されるシャミ子。
「優子。」
「おにぃちゃん！ケーキありがとうです！」
「何気にするな。半分趣味の範囲だからな。
それとプレゼントだ。」
と綺麗な小包に入った物を渡すトラ男
早速シャミ子は開けてみると
「？長い棒？」
「シャミ子これ簪よ。長い髪を纏めたりとかで使うやつだわ。
それにこの光沢…結構高めじゃないかしら？」
「にゃ!?お、おにぃちゃん!?い、良いんですか!?」
「優子もこれから色んな行事に参加するしな。成人式とかでも使えるから今の内に渡しておく。」
「ありがとうおにぃちゃん！」
「シャミ子私からも…」
「ありがとうございます桃！お花ですか！」
「うん。造花で小さくて場所も取らないから何処かに飾ってくれると嬉しいな。」
「ありがとうございます！」

（先生…先生！桃が上げた造花…の元になった花の花言葉って…）
（たしか花言葉で
アイビーは友情と永遠の愛
白いサクラソウは初恋
センニチコウは「不朽」『色あせぬ愛』『永遠の恋』で千日紅は確か名前の由来のような「枯れない」「無くならない」という意味の花言葉が多かったか？）
（重いわ!?クソ重チョモランマだわ!?桃ったらどんだけシャミ子のこと想ってるのかしら!?）
（そこまでは考えてないと思うぞ。まぁそれは本人のみが知るといったところか。）
「あはははははご先祖様～ほらチューハイですよ！ハイッ、チューなんて…」
「セイコよ…余はクラキューしとるのじゃ～追加はやめとくれ～」
「清子ほら漬物とポテトも作ったぞ。」
「ロー君ありがと～うふふこうやってお世話されると昔を思い出すわ～～
ヨシュアといた時良くお鍋を引っくり返しちゃったりしてロー君が片付けてくれて～ヨシュアと優子と四人でご飯食べて」
「そうだな。」
「ほんと…どうしてあの人は…」
「清子…あの野郎だって」
「…分かってますよ。あの人は帰ってくる…そう信じてます。それに私はあの人の妻で優子や良子の母親なんですから。これぐらい平気です。」
「その重荷を、代わりに背負うことは出来んが…共に背負うぐらいなら俺にだって出来る。」
「ロー君…ありがとう。」
「礼を言うのは良いのだが兄上殿！余にもケーキをくれなのだ！」
「はいはい。全く残念なところは流石優子の先祖というべきなのか」
そうして各々楽しみ解散となった。

桃は隣の部屋へと戻るなかでシャミ子は桃を見送る。
「今日はとても楽しかったです！」
「シャミ子が喜んでくれて嬉しい。」
「明日からも宜しくお願いします！」
「ん……ねぇシャミ子。」
「何ですか？」
「少し目を瞑ってくれるかな？」
「はい？良いですけど？」
と目を閉じたシャミ子に桃は…
チュッ
と頬に口付けをする。
「ふぇ!?な、何だがとても柔らかい感触が!?」
「シャミ……ううん、
優子
ハッピーバースデー
生まれてきてくれて…私に色んな物を教えてくれて
ありがとう！」
「はわわわわわわわわわ!?」
「おやすみ！」
と桃は部屋へと戻るのであった。
「お、おのれ魔法少女～～こ、こ、
これで勝ったと思うなよーーーーーー!!!!」
と恥ずかしくて真っ赤になったシャミ子の姿があるのであった。
因みに部屋へと戻った桃はメタ子を抱えながら自分の恥ずかしい発言を思い出してゴロゴロと転げまわるのであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
「さて読者の諸君！
如何だったかな！
もうちょっとバカトラが能力を使った方が良いとか
桃ちゃんとシャミ子ちゃんの宿敵デートではないけどほんのり甘い展開があったりともう少し長い尺度でと思うかな？

まぁ作者君も初めてだから馴れてない部分は多々あったかな？
さてまちカドまぞく第二期も終わりこの小説も漫画の二巻に突入してミカンちゃんも出てきたね！
私についてはアニメでは二期で漫画では3巻で少し明らかになるはずだからもうちょっと待っててね～」
とメタいことを言う謎の女性の前に何やら怪しいプレゼントボックスが
「？何かしら？」
とそのまま開けると
トラ男の顔をしたビックリ箱でそこには
このままだと桃色屋の兄妹ボジはもらうぞということと
小説本編にこれでもかと出れてるぞ。
どうだ羨ましいだろ？
ウインディーネが心配していたぞ。
そしてとある私有地の霊験あらたかな霊水がそこにはあった。
「……バカトラーーーー!!!余計なお世話よーー!
ち、ちっとも羨ましくなんてないんだからーーー!
ウィンちゃんごめんねーーー!!!
それと桃ちゃんの姉ポジは私のものよ!!!」
と謎の女性もとい千代田桜は叫ぶ！
「こ、これで勝ったと思わないでよーーーーーーー!!!!」

ハロウィンパーティ開催!!悪い子はいねが？

皆さんお久し振りです！
私はこの街を統べている魔法少女の手伝いをしているシャドウミストレス優子です！
今日はハロウィン！
トリック・オア・トリートでお菓子かイタズラをする日です！
ふふふ我が宿敵の魔法少女千代田桃も油断しているはず…！
私のイタズラを大人しく受けるが良い！
そうしてシャミ子は千代田家へとお邪魔するのであるが…
「時は来た！」
と桃のナビゲーターのメタ子がパーティ用の帽子をかぶりながら言う。
「えっ!?あ、あれ？メタ子が仮装してるってことは……」
意を決して扉を開けると
「あ、シャミ子…トリック・オア・トリートお菓子をくれないと筋トレさせるよ？」
「何でですか!?普通はイタズラですよ!?というかどうして桃は仮装してるんですか！こういうイベントに無頓着そうなのに！」
「…それは…お兄さんのせい…」
「へ？」
「お兄さんがかぼちゃの煮物やかぼちゃプリンにかぼちゃグラタンにかぼちゃスープを用意するって言ってたから気合い入れて仮装してみた。」
といつもの戦闘服の魔法少女の格好をした桃
「それは仮装なんですか？いつも見てるから仮装に見えない…」
「シャミ子も危機管理フォームになれば良い。そうすれば仮装になる。」
「あれは色々と露出が激しいので駄目です！それに私の戦闘フォームでごせんぞが考えてくれたんですよ！」
「そう…それでお菓子は持ってる？」

「……あ！」
　そうシャミ子は桃にイタズラすることばかり考えてお菓子を用意していなかった。
「ないならこのバーベルを持ってスクワットだね。大丈夫。バーだけだから１０キロもないよ！さぁお菓子がないならスクワット！」
「こ、こ、これで勝ったと思うなよーーー!!!」
　と律儀にバーを持ちながらスクワットするシャミ子なのであった。
「ぬぐぐぐぐ」
「ほらシャミ子姿勢キープしてじゅういーち」
「ふんならば～」
　タユン
「……」
「も、桃？」
「姿勢が悪かったからもう一回、じゅういーち」
「ふぇ!?ぬぐぐぐぐ…にゅ！」
　タユンタユン
「……胸が揺れたからもう一度…じゅういーち」
「はぇ!?ももももも、もんも!?」
「何かな？胸を強調させるいやらしまぞくさん？」
「何をいうちょりますか!?し、仕方ないじゃないですか！」
「ふ～ん。じゃあ持っててあげるからもう一回。」
　もにゅんタユンと桃はシャミ子の胸を両の手で鷲掴みする。
「ひゃゃゃゃゃゃぁぁぁぁぁぁぁ!?な、なにするの!?」
「ほら早く…ハリー…ハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリー」
「め、目が怖いいいいいいいい!?た、た、
　助けておにぃーーーちゃーーーん!!!」
「やめんか色ボケ屋」
　ズドンと瞬時にトラ男が現れるや武装色を纏わせてそのままチョップして桃を沈める。
「パーティ準備するから呼びに来たら筋トレしながら何をやってるん

だ？」
「おにいちゃん！も、ももも桃がいきなり私の胸を鷲掴みしたんですぅ」
　とシャミ子はトラ男の背中に隠れる。
「ふむ…もしかしたらハロウィンの魔力に当てられたのかもしれんな。」
「何ですか!?ハロウィンに魔力なんてあるんですか！」
「ちょっとはっちゃけたりイタズラしても良いという一種の免罪符があるからかそういう魔力に当てられてハロウィンの時は一部の魔法少女がおかしな行動を取ることがあるらしい。」
「そ、そんな冗談みたいなことあるんですか!?」
「かくいう桜屋も同じようなことしてやがったからな…お菓子をくれなきゃ下着をもらうってな」
「うぇ!?桜さんが!?」
「次の日にはケロッとしてやがったからその様子を動画にして見せてやったら恥ずかしかったのか
　一日中サクラメントキャノンやらサクラタイフーンやらぶっぱなしてきてしまいにはサクラチョークスリーパーホールドしてきやかって
　…動画を消してやったがバックアップ取ってたのは気付かれなかったからな。それでからかってやったな。」
「おにぃちゃん何してるんですか…」
「まぁそれは置いといて頭冷えたか桃色屋？」
「……はい…ごめんシャミ子…さっきまでの私…浮かれフルーツポンチだったね……ごめん…」
「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁも、桃の影が薄くなってます!?だ、大丈夫です！そういう日だってありますから！気にしないでください！」
「…ありがとうシャミ子…」
「時は来た！」
「あぁそろそろ行くぞ。」
　とトラ男はシャミ子、桃を連れてばんだ荘へと戻りハロウィンの準

備をするのであった。
――――――――――――――――――――
そうして吉田家にてハロウィンパーティの準備が着々と進んでいた。
「ミカンさんこれどこに付ければ良い？」
「そこの角にお願いね。良ちゃん手伝ってくれてありがとう。」
「ううん。今日はハロウィンだからお姉も仮装するしその勇姿を写真にとっていつか軍団が出来たときに披露する！」
「いやぁ～それはシャミ子ちゃんの精神衛生上良くないかな～と私は思うな。」
「小倉さん、貴女いつも通り屋根裏から出てきたわね。」
「ノー！」
「小人さんもこんにちは。」
「ノームと一緒に住んでるってのもシャミ子は凄いわね。」
「どうしてですか？」
「ノームは過激派魔法少女のせいで結構警戒心が強くなっちゃってるのよ。でもシャミ子には気を許してるからそれだけでも凄いのよ。」
「成る程！お姉が小人さんの心を鷲掴みにしたんだ！」
「鷲掴み………（シャミ子の胸…柔らかかったな…………鷲掴み…鷲掴み）」
と桃は置いてあるみかん二つをニギニギしながらシャミ子の感触を思い出していた。

「桃…貴女何ていうか、その触りかたいやらしいわよ？」
「違う…これは…みかんが柔らかいのがいけない。」
「そうですねミカンさん凄い柔らかいですもんね！」
とシャミ子はミカンの身体が柔らかいと言っているのだが
「な………せ、セクハラ禁止よ！」
と何処からともなく現れた雨雲がもくもくとシャミ子と桃の頭に降り掛かり微少なあられも降る。
「ご、ごめんなさいでした……」

「なんで私まで…というかお兄さんはミカンの呪いに掛からないけど何でなんだろう？」
「過剰な覇気にはそういったもの呪いとか直接害をもたらすような能力は通じねぇからな。あくまでも自分だけだから他はどうしようもない。同じ覇気使いかつ身体強化系の能力とかは無効化はできん。」
「成る程！奥が深いですね！」
「私も習ってるけどまだまだ未熟だから気配とかは分かるようになったんだけど先生がもっと冷静にって…難しいわ。」
「とにかく優子と桃色屋は風呂入ってこい。それまでに料理作っとく。」
とトラ男はそのままかぼちゃ煮を作り、カボチャのポタージュを作り始める。
「トラ兄私も手伝いたい！」
「なら良子は剥いてボウルに入れたこのカボチャを潰してくれ。」
「分かった！」
そうしてトラ男はまずかぼちゃを種とワタを取り除き皮をむく。
そして２ｃｍ角に切り、耐熱ボウルに入れてふんわりラップをし、５００Ｗの電子レンジで８分柔らかくなるまで加熱します。
良子にフォークを渡して柔らかく熱いうちにフォークで潰してもらいそのままミキサーに入れます。
そこに牛乳を２回に分けて加えながら、なめらかになるまで都度撹拌します。
次に鍋にミキサーでやったものをを入れて中火に熱し塩、コンソメ、白コショウを加えて味を調えます。
ひと煮立ちしたら有塩バターを加え、よく混ぜ合わせ、火から下ろします。
こうして良子の手伝いで完成！
そして冷蔵庫に予めよういしていたカボチャのグラタンをトースターへと放り込み人数分やる。
「にゃ…にゃんですかこれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」
「お姉？どうしたんだろう？」

「あぁ優子のやつあんまり用意してなかったからな、俺の方で衣装を見繕っておいた。」
「おにいちゃん！な、何ですかこれ！」
「ん…おぉ着てみたか？どうだサイズ的に？」
「サイズはピッタリです…じゃなくてこれですよ！猫耳ですよ！」
そうトラ男が用意したのは猫又衣装であった。
猫耳と明るい赤を強調した和服でとても良いコスプレである。
「お姉綺麗！写真取らせて！」
「似合ってるじゃねぇか。」
「ありがとうおにいちゃん！でも尻尾が私…」
「猫耳サキュバスコスプレだから平気だ！」
「サキュバス!?わ、私淫魔じゃなくて夢魔です！」
「そこら辺は大目にみてくれ。」
「お兄さん私まですいません。」
「おっ！そっちも着てみたか。」
と桃は犬耳コスで懐かしいキャラＤ○ＧＤ○ＹＳのお姫様の格好をしていた。
「その…こんな服私に合わない……」
「おおぉ！桃凄い！何処かの城のお姫様っぽいです！」
「桃貴女似合ってるんだから自信持ちなさい！可愛いわよ！」
「桃さん写真良いですか！」
「わ、私で良ければ…」
「ハッハッハあのいつも澄ました顔をしている桃が慌ててておるぞ！」
「ほれリリス屋かぶっとけ」
とパーティ用の帽子をかぶせるトラ男。
そうして料理も出揃い各々のコスプレもトラ男を除きしていた。
ミカンはアニメ二期ＯＰの魔女コス、良子は雪女の格好、小倉は悪魔チックな羽とゴスロリ衣装を着ていた。
「清子のやつもそろそろ帰ってくるだろうから俺も何か着るとしよう。」
とトラ男は一度自分の部屋へと戻る。

「先生のコスプレ何かしらね！」
「きっと気合いを入れてくるはず…吸血鬼とか？」
「もしかしたらフランケンとか？」
「ゾンビコスとか？」
　それぞれ感想を言いつつガチャという音がしたのでシャミ子は様子を見に行く。
「おにいちゃん一体どんなかっ……こ…う……」
　シャミ子が見たものそれは……

　デカイ鉈をもったなまはげであった……
　何故になまはげ？
「あわわわわわわわわわわわわわわわなななな
　なまはげーーーーーーーー!!!!?」
　と叫びながら居間へと戻り勢い良く駆け込むシャミ子。

「ももももももももんも～！なまはげですぅ!?わ、悪い子は食べられちゃいますぅ。」
　と桃にぎゅうと抱きつくシャミ子。そんな桃の胸中は
（シャミ子のたわわんとした二つの果実が…柔らかい…和む…ここで良いところを見せて…）
　と考えていると
「悪い子はいねがー」
　となまはげが来る。
「ひぃ!?な、なまはげ!?あわわわわわわ」
　とミカンがドキドキしてしまい呪いが吹き出すのだが
「悪い子がーー？」
　雨風吹き乱れているはずなのだがなまはげの周りには何も起きていない。
「ふぇ!?わ、私の呪いが効いてないってことは先生！先生よね！」
　とミカンはトラ男だと思い話し掛ける。
「…えっと…トリック・オア・トリートです」
　の前に良子がなまはげに言う。
　そうしてなまはげは良子を見つめる。
「良!?り、良は良い子です！た、食べるならこの私シャドウミストレス優子にしてください！」
　とガクガク震えるシャミ子だが良子を後ろへと隠しなまはげと正面から向き合う。
　そうして数瞬…
「良い子だー」
　とシャミ子と良子の頭を撫でるなまはげ。そして手に持っていたバスケットよりクッキーを差し出す。
「あ、ありがとうございます！」
「なまはげさんありがとう。」
「そりゃあ二人は良い子だから大丈夫よね。」
「悪い子がー？」
「ひぃ!?ま、魔法少女やってて周りには迷惑掛けてるから多分悪い子

です！」
「良い子だー！」
とこれまたミカンの頭を撫でてクッキーを渡す。パァァと輝く笑顔でクッキーをそのまま食べるミカン。
「クククッ桃よ。お主は悪い子ではないか？余を何度も投げとるし余の扱いがぞんざいだしのぅ！」
「……」
（私は…姉がシャミ子のお父さんを封印してしまってお父さんを１０年も奪ってしまった…本当なら姉の代わりに気付かなければいけなかったのに…それにシャミ子のこと……最初は監視してたし…私なんて…）
と暗い顔をする桃。
「悪い子はそこがーー!!」
と桃の方へと歩み寄るなまはげ。
「ま、待ってください！桃は良い子です！私みたいな弱々まぞくを鍛えてくれて色んなことから守ってくれて！だから！」
「良いんだシャミ子…わたし…シャミ子に色々と酷いことしてたし」
「ほれほれなまはげよ！悪い子はここだぞー！」
とそんなことを言うごせんぞ。
そうしてなまはげは桃の目の前に来る。
そして思い切り掴む！

桃の前にあったごせんぞう…リリスを……
「悪い子はおしおきだーー！」
「ちょちょちょっ!?ま、待つのじゃ！余が何をしたと！」
「インターネット無駄遣い」
「ギクッ」
「唆し、家計の圧迫、乗っ取り、居候」
「ギクッギクッギクゥ!?って居候は仕方なかろう！」
「ギルティ悪い子だーー」
「シャミ子やーーた、助けとくれーーー！」
「う～んごせんぞ頑張って！多分おにぃちゃんなら悪いようにしないと思いますから安心して逝ってきてください。」
「いやシャミ子よ兄上殿だとセイコよりも過激じゃよ!?」
「ごせんぞ様先生なら悪いようにしないわ！」
「あ、あの…」
「とてもいい子だ～」
となまはげは優しい手付きで桃を撫でる。そしてクッキーを桃へ手渡す。とても新鮮な感覚でとても気持ちがいいのか目を細める桃であった。
「良かったです！おにぃちゃ…なまはげさんも桃が良い子だと分かってくれて！」
「元気にしろよ～～」
「誰か助けて～～～～～～～」
となまはげはそのままごせんぞうを持ったまま出ていくのであっ

た。
「トラ兄のコスプレ凄かった！」
「流石おにいちゃんです！」
「まぁまぁ、ふふふふ、そうだねぇ流石だねぇ」
「先生のコスプレ凄かったわ！相変わらず呪いも弾いてたし」
「ん…とても良い撫で心地だった。」
　ガチャ！
「待たせたな。色々と考えたがピエロにしてみたぞ。」
　とトラ男がコラさん衣装にピエロの装飾をして入ってきた。
「へ？おにいちゃん!?さっきのなまはげじゃなかったの!?」
「先生さっきなまはげしたのにまた仮装してきたんですか？」
「トラ兄…さっきのなまはげのが迫力あったよ？」
「お兄さんピエロはなんか……うん、」
「そうだねぇ。悪くはないんだけどさっきのなまはげのインパクトの後だと難しいねぇ」
「なんで受けが悪いんだ!?」
「ただいま帰りました。」
「おかーさん！実はさっきなまはげさんが！ってごせんぞ!?どど、どうしておかーさんがごせんぞを!?」
「なぜか知らないけどご先祖様、桶に逆さまに突き刺さってたから取り敢えず持ってきたわ。」
「しゃシャミ子や～さっきのやつは～」
「あらご先祖様トリック・オア・トリートです。お菓子はありますか？」
「持っとらんぞ～」
「でしたらイタズラですね。缶チューハイとレモンと甘酒ですよ～」
「あっぷあっぷ～目が回る～～」
「さぁ皆さんご飯食べましょう。ローさんもそのコートは一旦脱いで手伝ってください。」
「あぁ分かった。」
　と清子はトラ男と残りの料理を作る。

カボチャ尽くしでとても美味しいご飯でその後にカボチャケーキを清子と共に作ったトラ男。
そうして幸せな気分でハロウィンは終わるのであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
夜遅く
皆が寝静まった後トラ男は清子と晩酌していた。一応ごせんぞうも一緒である。
「ったくなまはげのせいか渾身の仮装が受けなかったとは…」
「元気だしてローさん。ピエロも中々可愛かったわよ？」
「ってもな昔もやったがいまだに迫力は変わんねぇな清子」
「ふふ、皆驚いてくれて良かったわ。」
そうなまはげの正体はトラ男ではなく清子であった。
「それに俺だと思わせるために声真似して厚底の靴下履いて身長誤魔化して柑橘屋の呪いは覇気で弾くからなおさら俺だと思われてたぞ。」
「まだまだ現役で驚かせられるわ。」
「昔に桜屋とヨシュアの野郎とちっちゃかった優子でやった時も桜屋ガチで怖がってたしな。」
「それはそうよ。大事な弟の下着を剥ぎ取ろうとしてるんだもの。思わずね。」
「まぁいいか。ほれ日本酒」
とくとくっとお猪口へと注ぐトラ男。

「コクコク　ふぅ…優子も元気になって友達も出来て嬉しいわ。後はあの人も…」
「そうだな。いつかはやつも交えて酒を飲みたいもんだ。」
「余を忘れんでくれ～」
「あいよリリス屋。」
とごせんぞうへとお供えするトラ男。
トントンと控えめなノックがする。
そのままトラ男が出るとそこには桃がいた。

「桃色屋？どうした？」
「あの…清子さんいますか？」
「はい？どうしましたか桃さん？」
「あの今日はありがとうございます。あのなまはげ…清子さんですよね。」
「あらあら気付かれちゃっわね。」
「多分他の皆…小倉以外は気付いてなかったです。そのお願いがあって」
「お願い？」
「…その…一緒に寝てほしくて…寂しいというか…なんというか…」
「良いですよ。それに桃さん。まだ今日はハロウィンです。そういう時は？」
「えと…トリック・オア・トリートです。」
「ええ。いらっしゃい。」
　とそのまま気を利かせて布団を二人分引いたトラ男はごせんぞうをそのまま持ち部屋へと戻る。
　そうして布団へと入る桃。
「桃さんもっと近くに寄って良いのよ？」
「今になって恥ずかしくなってきて…」
　と言う桃を後ろから抱きしめる清子。
「良いのよ。甘えるのは子供の特権だもの。それに桃さんはずっと一人で頑張ってきたんだからもっと甘えて良いの。」
「清子さん…」
「今日はお母さんだと思ってくれて良いわよ。って流石に」
「…お母さん…お母さん…！」
　と清子の胸に抱きつく桃。
「大丈夫…大事よ桃。貴女は頑張ってるわ。思いっきり甘えてくれて良いの、よしよし。」
　無理もない。姉の桜がいなくなり誰とも関わらないように寂しくても心を殺して生きていたのだ。
　清子はそんな桃を優しく抱きしめて頭を撫でる。

そうして母親に甘えて寝る子の姿があった。
「ゆっくり眠れよ桃色屋…」
トラ男は見聞色で見届け夜も更けるのであった。

番外編　昔々のハロウィンでのこと

これはいつかのハロウィンのお話し
今日はヨシュアの野郎にパーティするからと誘われたが行く気がなかったんだが清子に誘われちまったから行くことにした。
そうして吉田家へと入り居間へと行くなりいきなり桜屋が
「トリック・オア・トリート！お菓子をくれないと下着を剥ぐわよ！」
「……なんだと？俺の聞き間違いか？おいヨシュア」
「う～ん聞き間違いかと聞かれれば間違いなくそう言いましたね。」
「ついに頭が逝っちまったのか？流石に俺の今の腕じゃ治せんぞ。」
「どうやらハロウィンの魔力に充てられてしまったようですね。」
「んなバカなことあるか！」
「実際ハロウィンは仮装するじゃないですか、そういった騒ぎにかこつけてまぞくも本来の姿を表してお祭り騒ぎになるんです。
見つかっても仮装してるって言えばそれまでですから大勢のまぞくが騒いで
そこから出た余剰魔力が魔力でマテリアル体を構成してる魔法少女にとって余計に影響を受けやすくハロウィンの日に変な行動をする魔法少女が多いんです。」
「それで桜屋はこんなことしてやがるのか…ヨシュア見てねぇで助けろ！こいつ普段より馬鹿力だぞ!?」
「ほらほら早く下着を頂戴よ！クンカクンカしてピーしてピーするんだから！」
「おま!?それは色々とアウトだ!?冷静になれ！」
とトラ男は馬乗りになった桜を止めながら言う。
「う～ん、僕は優子のことで手一杯ですので自力でどうにかしてください。」
「おとーさ、だっこ」
「良いですよ～」
「た、確かに優子の方が大事だ！クッ！このやろ正気に戻れ！」
「私は素面よ！バカトラは私の思いに気付かないし！さっさとバカト

ラの匂いの染み込んだ下着を頂戴!!あと出来れば私の処女とかバカトラの童貞を!」
　また小さい優子の安全の方が大事と早々に諦めて何とかしようとするトラ男。しかし思いの外力の強い桜にズボンを脱がされあわやというところで
「悪い子はいねがー」
・・・・・・・・・・・・
　となまはげが登場した。勿論この場にいない人物が仮装してるので正体は清子である。
「な、ななななななまはげ!?ど、どうして!?」
「!そ、そういうことか!な、なまはげ、俺はこいつの暴走を止められんしこいつを変態にしないようにしてるが自力で止められん悪い子だ!」
「ちょっ!?なに行ってるの!?私は変態じゃないわよ!ちょっと乙女心が暴走してるだけよ!元はと言えばあんたが私の気持ちに答えてくれないからよ!」
「良い子だー、そっちが悪い子だー!」
「まままままままって!?まだバカトラの下着をーーー!」
「いい加減にしなさい…桜さん…」
　とドスの効いた声が桜へとかけられあわあわする桜をそのままなまはげは首根っこを掴むとそのまま退散するのであった。
「ゼーハー、た、助かった…」
「いや～清子さん凄いですね。まるで本物のなまはげそのものでしたね!それにしてもロー君も清子さんのこと分かってますね。」
「そりゃあな、清子は形から入るタイプだからなまはげのこと調べるだろうからな、今までの悪いことを報告して丁重にもてなすとかだったか?」
「成る程、だから急にあんなことを…所でロー君、桜さんのことどう思いますか?」
「手のかかる同僚、行き当たりばったり、説明が下手くそ、損ばっかしてるやつだ。」

「あはは…これは中々骨がおれますね～」
「んにゃ！にいちゃ！だっこ！」
「良いぞほら優子、」
「んにゃ～」
とちび優子と戯れるトラ男と中々恋愛に発展しなさそうだと思うヨシュアであった。
ーーーーーーーーー
その頃のなまはげに扮した清子は桜を叱っていた。
「桜さん、ハロウィンだから可笑しいふりして願望丸出しなのは良くありませんよ！」
「はい…すみません」
シュンとなる桜。彼女自身魔力の操作に長けているのでおかしな行動はしないのだが折角なのでトラ男に自分なりにアプローチした結果があれである。
もうどこからどう見ても痴女である。
「もう桜さんも好きなら好きってちゃんと伝えないとダメよ！ロー君にぶちんなんだから。」
「だって～恥ずかしいんだもん…それにバカトラ気付いてくれないし…私だって女の子だから恋とかその…したいもん」
「も～う、女は度胸とは言いますけどもっとしっかりとしたアプローチじゃないと振り向いてくれません。ああ見えてロー君とても一途なんですよ、真正面から言った方が効果は余程あります！」
「はい…で、でも私、ヨシュアさんと清子さんみたいな仲良しな夫婦に凄い憧れてて…トラとの子供を一緒に育てて一緒に笑いあって暮らしたいです…」
「ならまずは胃袋から掴んでしまいましょう！桜さんお料理手伝ってください。」
「！はい！清子さん！」
と二人で料理をするのであった。
「お？味付け変えたのか清子？」
「ふふ、それは桜さんが作ったのよ。」

（ドキドキする…お、美味しく作れてたかな…まぞくとの仲介より緊張する…！）
「そうだったのか…旨いじゃないか桜屋。」
「そ、そう…か、感謝して食べなさい…！」
（わぁぁぁぁ私のバカァーーす、素直にありがとうって言わないといけないのにーー！）
「ふっそうするとしよう。この甘さ控えめな味付けは中々旨いな。」
「…あ、アリガトウ」
　そうして食べた料理で桜の作った物が誉められ帰り道で小躍りしながら喜ぶ桜なのであった。